

Persona 5 Scramble —Eleventh Member—

週末ラテ少年

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

EMMA、ジェイル、そしてペルソナ。

彼『服部 翼』は、ある事をきっかけにそんな奇妙な運命に巻き込まれることになる。

心の怪盗と出会い、そして共に歩むことになり。

1カ月の旅路の中で、彼は何を思うことになるのか――

これは、彼が共にいた「だけではない」物語。

※現在、札幌編を更新中

2023/01/22

・お気に入り登録者数が50人になりました！ありがとうございます！
す！

・あらすじを変更しました。

2023/05/03

・仙台編完結、併せてあらすじを少し変更

2023/07/03

・通算UA10000突破、ありがとうございます！！

目次

#15	Painter and Writer	206
#14	Literary Grandson	193
#13	Masamune	178
entation		
Ep. 2	Walled City Coverd in Ost	
#12.5	Character Setting	174
ney		163
#12	The Beginning of the Jour	
#11	Closing Time	147
#10	Rabbit in Wonderland	133
#9	Lock Keeper	122
#8	Bird Cage	107
89		
#7	A Passing Ally of Justice	
#6	Television	81
#5	My Codename is:	65
#4	Joining	49
#3	Awakening of Rebellion	36
#2	Strange World	22
n Lust		
Ep. 1	Amusement Park Drowning	i
#1	We are friends	9
#0	From Jailor & Prologue	1

# 26		# 24	# 23	# 22	# 21	h	E p.	# 20	# 19	# 18	# 17	# 16
Melting		Bribe	Major Clean up	Sightseeing	Boys, Be Ambitious!	Gluttony	A Silver World Filled with	Scientist And:	Time of Fall	Dragon of Nightmare	Fixed	Back to TOKYO
324	314	303	295	286	275			262	248	237	224	214

0 From Jailor & Prologue

この小説は二次創作です。

閲覧前にあたり、私から注意事項を。

まず、名を持つ新たな「反逆の徒」の視点から描かれる物語である為、ベルベットの^空間^間が描写されることは殆どございません。

訳：名ありオリ主の視点が中心のため、ジョーカーのみが来れるベルベットのルーム等は殆ど描写されません。

それに伴い、新たな「ペルソナ」、「アルカナ」、「ペルソナの力」が内容として取り込まれております。

訳：オリジナルのペルソナ、アルカナ、スキルが含まれます。

また、物語の後半では原作の根幹に触れますので、ご注意下さい。

訳：p5及びp5sのネタバレを含みます。

一部、この小説独自の設定が含まれます。

訳：独自設定あり

そして、次が最重要事項となるのですが……

新たなる「反逆の徒」と「隠者」のペルソナ使いとの恋愛描写が含まれます。

訳：オリ主×佐倉双葉の恋愛描写があります。

以上の注意事項を理解された上で、この小説を閲覧しますか？

▶？同意する

同意しない

…承知しました。

世界を救ったトリックスター、
そしてその後の物語。

新たなる破滅への道程。
トリックスターの旅路。

そして、新たなる「反逆の徒」との出会い。

彼らのアルカナは……………

「神官」、「■望」、そして「技師」。

それでは、この物語をお楽しみください。

…作者様、この様で宜しいのでしょうか？

…完璧？

ふふ、そう言つて頂けて嬉しいです。

夜の様な暗さを見せる中、ネオンが輝く渋谷にて。

ビルの上を、二人の男が駆けていた。

一人は漆黒のロングコートに真紅の手袋を羽織っており、黒髪も含めてその景色に溶けてしまいそうだ。

そしてもう一人の服装を一言で表すならば、忍者そのもの。

銀髪の少年は額^{ひたい}当^{あて}を模した仮面を被り、その手は白の手袋に覆われている。

…と、その時。

『二人とも気をつけろ！下からだ！』

プロペラ音と共に、ドローンのようなものが二体現れた。

その手にはマシンガンが握られていて、その先は2人に向いていた。

そして響く連射音。

回避した二人は駆け降りるようにビルの壁を降りていく。と、不意に忍者の少年がライフルを取り出す。彼は銃口を横の黒髪の青年に向け――

背後のドローンの頭を貫く。

青年は呼応するように動き、再び撃たんとしたもう片方のドローンへと近づき、ドローンの白い仮面を引き剥がした。

そして墜落するドローン。

着地した二人の目の前では、無数の警備員がひしめき合っていた。大群を前に、二人は武器を構える。

青年はナイフを、少年は双剣を、その手に握った。

『よし、作戦開始だ！』

『二人ともド派手な登場だなー。』

今のでだいぶ注目が集まってる！

そのまま陽動よろしく！

暴れ回って敵の注意を引いてくれ！』

その言葉を合図に二人は敵のもとへと突貫していった。

『みんなは作戦通りに。』

二人が踏ん張ってる間に頼んだ！』

『了解。サーチライトは任しとけ！』

『俺たちはハッキングのサポートだな。』

『ええ。まずはゲート周辺の安全確保からよ。』

通信の中で飛び交う複数人の会話。

二人はそれを聞き流しながらも、警備員を切り伏せていく。

『いいぞ、その調子！』

敵の目は二人に釘付けだ。そのまま続けて！』

『あの数を二人だけで…』

ジョーカーは流石と言ったところだが、シノビもだな。』

『スカルじゃこうもいかないね。』

『ナニこのデジャブ感？』

声を掛け合いながらも、己の力を顕現させて舞うように蹴散らしていく二人。

と、その片方が口を開いた。

「ちよつと、多すぎやしないかい!？」

『それはそうだが…』

ソフィーも頑張ってたんだ！

オマエも同じ新株だが、シノビが言い出したことだろ。』

「まあそうなんだけどさ…」

自業自得に嘆きながらも自身のする事をすべく動くシノビと呼ばれた少年。

増えつつある敵を一瞥し、一体一体に集中して双剣を動かし、切り

刻んでいく。

『お、敵が集まってきたな…』

二人ともー！やっちやえー！』

了解の返事をした二人。

ジョーカーと呼ばれた青年は飛翔。

「アルセーヌ！」と叫び、目の前で呪怨の炎柱を上げた。

「おー…流石リーダー。」

僕も続かないと、魅せ場無くなっちゃうな。」

イルジメツ！

シノビはその名を呼び、顕現した像が創りだす光によって敵はふらついてしまう。

その隙を見逃さぬ「2名」は、敵の間を切り拓くように、神速の如き速さで敵を切り刻んだ。

「さあ、締めだ！」

一刀両断。

その言葉に応え、像は腰に差す刀で敵を横薙ぎにしたのだった。

シノビは調子に乗りかけるが、現れる増援がそれを許さない。

か？
……渋谷の中で、何故彼らがこのような大立ち回りをとっているのか？

それは、数日前に遡る。

—7月24日(月)—

東京、四軒茶屋。

駅からそれ程遠くない裏路地の入り口に、僕は立つ。

みんなから聞いた話だと、そろそろなんだけどな…と、目的の人物が視界に入った。

「あー！その人ー！」

黒髪、眼鏡、クセつ毛、ボストンバック、そこから顔を出す黒猫。情報通りの人物に声をかけた。

「どうした？」

「いや、友達から聞いたルブランっていうカフェを探してて…

この辺りに慣れてそうだったんで、場所、知ってないかなって。」

「そうか。場所なら知っているぞ。

俺もそこに用があるからな。」

「そうなんですか？」

なら、ついていっても良いですかね？」

「構わない。そういえば、名前は？」

「はっとりつばき服部翼です。そちらは？」

「あみやれん雨宮蓮。じゃあ翼、ついてきてくれ。」

言われるがままついていく…という演技をとる。

程なくして、その看板「ルブラン」の文字が見えた。

二人で扉の前に立つ。

「OPEN」とあるが、予定通り、スマホの懐中電灯モードを使って中へ向けて点滅させる。

「何をしているんだ？」

「友達がこのマスターと仲がいいらしくて。

入る前にこうしたら、彼女の友人だってわかるらしいんです。」

「そうなのか。」

と、カバンからニャー！と元気な猫の声がした。

「どうだろうな」と彼は答えたが、これで裏付けはついたな。

「お先にどうぞ。見たところ、年上っぽいんで。」

「…？」

失礼しよう。」

これでよし。我ながら完璧な演技だった。程なくして、お帰り！と声が店内に響く。

僕の、ちよつと変わったひと夏の始まりだった。

T o B e C o n t i n u e d . . .

#1 We are friends

再会を祝われる蓮さんの後ろで。

僕はみんなの会話を聞く。

「サプライズ、大成功だね！」

「ニヤー！」

(まったくオマエら、ニクいことしてくれるじゃねえか！)」

「久々に会えるってのに、何もナシじゃつまんねーだろ？」

だからマスターに頼んで、開店前に入れてもらったんだよ。」

「…元氣そうじゃねえか。」

「マスター。そっちはどう？」

「ま、ぼちぼちな。

積もる話もあるだろうが、そろそろ店開けるからよ。

続きは上でやりな。

お前の部屋だ。好きに使い。」

「世話になります。」

「…あいよ。

その代わり、後で店手伝えよ。」

「いよっし、じゃあ全員アジトに集合！」

ゾロゾロとルブランの奥へと音が消えたところ、もう行ったよう
だ。

それに合わせて店内に入る。

「…まったく、騒がしいのが帰ってきやがった。」

「こんにちはー、マスター。」

「いらっしや…って、翼か。」

「いつものでいいか？」

「はい、お願いします。」

「…あいよ。」

上から聞こえる談笑。灯いたテレビからの音声。

それらをラジオ代わりに、カウンターに座ってコーヒーを待つ。

コトリとコーヒーカップが置かれた。

「ほらよ。いつもの、ブレンド微糖入りだ。」

ありがとうございますといつもの返しもして一口。

「やっぱり、マスターのコーヒーは美味しい…」

「そう言われちゃ、マスター冥利に尽きるってもんよ。」

「そういえばだが…」

「どうしました？」

「お前も上に行かないのか？」

「それはお断りで。」

大体、僕は怪盗団の一員でもない一般人ですよ?」

「それはそうだが…」

双葉の友達なんだろう?」

「でもなあ…」

一応集まったメンバーが全員揃って怪盗団のメンバーなのは知っている。

何なら僕はしががない怪盗団フアンの一人だ。

それでも、やはりメンバーでないというのは大きいと感じている。やっぱ手を貸すべきじゃなかったのかな…

「つばさー!」

早く上来いよー!」

「…どうやら、向こうから呼んでくれたみてえだな。」

はいと応答し、2階の屋根裏部屋へ。

上がってみると、7人と1匹が。

「蓮、紹介するぞ!」

わたしの友達の翼だ!」

「ども。改めて、服部翼です。」

「改めてよろしく。」

言い忘れていたが、この猫はモルガナだ。」

「ニャー!」(よろしくな、ツバサ!)」

「…で双葉、何で僕呼んだの?」

「蓮は今日から、夏の間はこっちで過ごすことになってるんだ!

今から夏休みの予定を決めるところなんだけど、翼もどうだ?」

「なるほど。それ、僕もさっきまで考えてたところ。」

「お、なら一緒に来てくれるのか?」

「いや、断るほうに傾いてる。」

「なぬっ!」

「考えてみ。」

僕はこの場にいる全員が怪盗団のメンバーである事を知っている。

そして、僕は怪盗団の一員でも、敵対している側でもないただの一般人だぞ?」

簡単に言くと、肩身が狭い。」

「待て。翼は、俺や竜司たちが怪盗団であることは知っていたのか?」

「ええ。」

「竜司さんがポロツとね。」

「ああ…あの時のことか…」

「せめて忘れてくれりゃ良かった…」

「がつくしと、座ってるのに肩が下がる竜司さん。」

「まあ、忘れるわけないんだよな。」

「だが、翼は俺たちの仲間の友人だろう。
ならば、参加する道理はあるんじゃないのか？」

「…言われてみれば確かに。」

「……………なら、僕もついて行こうかな。」

憧れてる怪盗団と一緒にいたっていう、面白い夏休みになりそうだしー。」

「翼ならそう言うと思ってたぞ！」

「ニヤニヤ。」

(それなら、今年の夏は翼も含めて行動する。

みんなもそれで良いよな?)」

全員が賛成のような発言をする。

「真さん、モルガナは何て？」

「今年の夏は翼くんも入れるかの確認よ。」

「怪盗団は——」

「怪盗団は全会一致が基本だからな！」

「…なるほど。」

「…それで、予定はどうするの？」

「今日決めるのよね。」

「そうそう、翼くん忘れてたけどそうだった！」

「やっぱり旅行じゃね？」

「1ヶ月遊び放題なワケじゃん？」

「あのね…宿題の存在とか、忘れてない？」

「うっ。」

「それに、竜司や杏たちは高三でしょ？」

「卒業とか、進路のことだって……」

「言わないで！わかってるから！」

「今だけは忘れさせて！」

「進路かー…」

「まだそんな時期じゃないけど、考え始めておかないとなあ…」

「話を戻すが、旅行なら京都がいい。」

「寺社仏閣を回り、ひたすらスケッチに勤しむ。」

「ひと月あれば、どれだけの芸術に出会えるか！」

「歴史と伝統ある文化財が俺を呼んでいるッ！」

「芸術系ならわたしはパス。あんま興味ない。」

「『興味ないね』ってか？」

「まあ、日本史は僕も好きだし、京都もありかなー。」

「祐介さんは『何ッ!?』という表情だが、まあそれだけ行きたいのだろう。」

「京都といえば、金閣とか銀閣、あとは平等院鳳凰堂とかかな…」

「てかさ、旅行もいいけど、まずは近場でキャンプとかしてみない？」

「昼は自然の中で思いっきり遊んで、夜はバーベキューとか！」

「ば、ばーベきゅーにきやんぷ!？」

リア充限定イベと呼ばれるアレか!？」

「バーベキューはともかく、キャンプならリア充限定とかじゃないだろ。」

巷じゃソロキャンなんてワードもあるんだし。」

「お、おう…確かにそうだな。」

「ふふ、楽しそう！」

焚き火するなら、薪割りは私に任せてね。」

「景気づけにバーベキューで肉祭り…アリだな。リーダー、どうよ?」

「肉もいいが、野菜も買おうか。」

「ニヤァ。」

(フム…セレブな食卓には、彩も必要だからな。)

「夏らしくていいわね。」

健康も考えて、野菜は多めにね。」

「フツ、バーベキューとなれば黙っておれん。」

歴史と伝統に触れるのはその後でいい。」

「芸術より食い気か…」

それでいいのかおイナリ…」

「き、京都旅行…」

まあ、キャンプなら別にいつか。」

「じゃあ、再会祝い第一弾兼服部翼歓迎会は、全会一致により、キャンプに決定！」

「おー！それなら…」

スマホを出し、「EMMA」のアイコンをタップ。

「ハイEMMA、キャンプで使う道具、教えて。」

『キャンプに必要なものをリストアップしました。

渋谷705付近に専門店があります。

そこでの購入をオススメします。』

「ニヤ？」

（お？なんだ今の。）

「双葉、モルガナは何て？」

「なんだ今の？だってさ。」

「ああこれ？」

確かコンシエルジュアプリってやつの一つで、EMMAっていうんだ。」

「あ、聞いたことある。

何でも教えてくれて、すごく便利なんだよね？」

「確か…愛で動いてるヤツだろ？」

「愛じゃなくてAI。人工智能だよね。」

「artificial intelligenceの略な。」

あらゆる情報の検索からナビゲーション、スケジュール管理、果てはお悩み相談まで…

聞きたい事を音声入力するだけで最適解を出してくれるのがウリだ。」

「テレビでも特集されてたわね。」

「すごく優秀だから、急速に普及したって。」

「そーそー、なかなか良く出来てる。竜司の1万倍は賢い。」

うつせえ！と竜司さんは返すが、脳裏に「0には何をかけても0」というワードがよぎる。

まあ言うつもりはないけど。

「よかったらみんな入れてみる。わたしと翼はもう使ってるぞー！」

全員がアプリを入れ、初期設定まで済ませたらしいところで、トモダチ申請を送っておく。

「お、みんな起動できたみたいだな。」

とりあえずトモダチ申請送つといたから。

翼ももうしてるのか？」

「あ、うん。」

「ニャー…」

(オススメキャンプグッズと出てるな…)

「これをそのEMMAが用意したのか？」

「双葉、何て？」

「これをEMMAが用意したのか？って。

あと、何気にわたしを翻訳機代わりにしないでくれないか…」

「仕方ないじゃん。僕はモルガナの言葉が解らないんだし。」

「質問に答えるなら、確かにそう。でも、ただ選んでるだけじゃないんだ。

今の季節、天気、個人のプロフィールとか、位置情報も含めて最適な解答を表示してるらしい。」

「マジかよ？愛、すげーわ。」

「だから、AIね。」

「じゃあ、このリストにあるもの、手分けして買いに行かないとね。」

「…つつても、明日でよくな？」

外クソ暑いし、移動で蓮も疲れてんだろ。

せつかく集まったんだし、今日はここでダベろうぜ！」

「ああ、話したいことは幾らでもある。

特に、近代芸術における問題点と、その新たな可能性についてだが…」

「却下。

それより、僕はリーダーの蓮さんから見た怪盗団の活躍を教えてくださいー！」

「それも良いな。

なら、4月から話をしようか…」

その後はみんなで怪盗団の話とか、雑談とかをして盛り上がった。まあ、前半はファンの僕が興奮してただけなのかもしれないが…

―夜―

日が暮れるまで話が続いた結果、マスターからカレーまで振る舞って貰った…

まあ美味しいし。旨いし。

「だろ？そうじろうのカレーは最高だからな！」

「…何故分かった!？」

「ふっふーん。まあ、数ヶ月の仲ってやつよ！」

「あのな、数ヶ月程度でわかるものか。

大体翼、お前も顔に出てたぞ？」

「ま、マスターア…」

因みに今はみんなが帰った後で、ルブランでコーヒーを楽しんでいるところである。

「それじゃ、僕はここでお暇します。

コーヒー代、置いときますね。」

「そうか。双葉はどうする？」

そろそろ店閉めるところだが…」

「んー…翼と帰る！」

「分かった。」



路地裏を進む中、ふと双葉が立ち止まり、口を開いた。

「翼。その…ごめんな。」

「ごめんって…突然どうした？」

「翼を蓮との再会に誘ったこと。」

翼、最初は怪盗団のわたしたちとは旅行とか躊躇ってただろ？

翼はわたしたちみたいにな怪盗団の一員でもないし。

ましてや、本当の関係だって――

「双葉、ストップ。」

「え…？」

「大体、僕がルブランでの再会に立ち会ったのは、僕自身が責任を取るべきなんだよ。一芝居打ったのも僕の提案。」

これで悪い方向に向かったとしても、僕のせいなんだよ。」

「…そっか。」

そう…だな。

でも、責任は翼ひとりで取るな！

実質、翼も怪盗団と一緒にいる人だからな！

何かあったら、わたしが前に立つ！」

「ったく。」

運動音痴の誰かさんよりは、僕のほうが前に立ってあげようか？」

「なぬー！」

……

……

…

双葉と別れ、家の扉を開ける。

「ただいまー…って、誰もいないんだけどね。

この癖、直さないとなあ。」

自分で自分に苦笑いなんてな。

風呂などを済ませ、部屋に入る。

…と、パソコンが載った机の端にある紙の山が見えた。
アレも、処分するのはもう少し先になりそうだな。

一緒に見えた壁の一部分を見て、ちよつと顔を潰す。
不快な気分にならないうちに寝よう。

壁に大量に貼られた付箋。

ソレの1部分には、「柊アリス」と書かれていた。

To Be Continued…

Ep. 1 Amusement Park Dro
wning in Lust
#2 Strange World

—7月25日(火)—

「おっ！翼じゃねーか！」

「竜司さん！早いな…」

「そりゃ、キャンプの準備だろ？」

「ワクワクするに決まってるだろ！」

「ふふ。まあ、確かにそうか…」

駅前広場にて竜司さんと合流。

「えーっと、確か705の近くに店はあるんだっけか？」

「ちよ、蓮さんがまだだって…」

「わーってるって。」

「…おっ、ウワサをすればってやつか？」

「二人とも、早いな。」

「竜司さんと同じこと言ってる…」

「蓮が来たなら、早く行こうぜ。」

「つかマジ、今年の夏暑すぎ…早く店ん中入って涼もーぜ…」

「…左に同じく。」

えーっと、たしか僕たちはバーベキューセット担当だったかな？
EMMA、昨日言ってた場所に道案内お願い。」

『分かりました。目的地までのガイドを開始します。』

「すげー…そんな聞き方で分かるんか…」

なら、さっさと買い出し済ませて、明日からの作戦立てようぜ！」

EMMAに頼めばピロンと音が鳴り、地図アプリにルートが表示された。
今すぐ行こうとしたその時。

《left》 キャー！アリスー！ 《left》

アリス最高ー！

「ん？何だろ。」

ちよつとした疑問を口にしたとき。ピロンとスマホから鳴った。

『イベントサジェスチョンです。』

渋谷705前で、終アリスのイベントが開催されています。』

「あ？ んだ、サジェスチョンって…」

つかアリスってマジかよ！」

「アリス…？」

『終アリスは、日本のファッションモデル、アーティスト。』

キュートナルックスと、色彩豊かで独創的な世界観で人気を博し、
様々な分野で活躍中。

ポップカルチャーの発信者として、若者を中心に絶大な支持を集めています。』

「絶大な支持、ねえ…」

偽物の人気の癖によく言うよ。

「ニヤア。

(ほう、芸能人ってやつか。そんなに人気なのか?)」

「あの騒ぎ見りやわかんदार。

生アリスかー、テンション上がるわ。」

「…あのくらいの騒ぎ、通れるかな。

EMMA、別ルートはない?」

『検索を開始しま「いやいや、ここは一旦見てから行こうぜ!な、蓮?」

「賛成だ。俺も興味がある。」

「お、やっぱお前も?それなら、今から行こうぜ!」

「ちよ、僕の意見は…って、待ってよー!」

◇

なんとか追いつき、渋谷705前に到着。

群衆の会話を聞いたところ、どうやらアリスがプロデュースしたブランドショップのオープニングセレモニーが行われているらしい。

ちなみに僕は蓮さんの背後に隠れる形で立っている。

「みんなありがとうー！」

じゃあ、今回は特別に、先着100人のみんなへ、特別な招待カードをプレゼントしちゃう！」

不思議の国をもっと楽しめる魔法のカードだよ☆
喜んでくれたら嬉しいな♪」

…魔法のカード？

そんな思考をよそに、アリスはステージを降りてカードを配っている。

…って、こっち来てる！

「君、眼鏡似合ってるねー！」

ふふっ、ゴメンなさい。楽しんでね☆

あ、後ろにいる君もどうかな？」

招待カードの中には「ワンダーランド」の文字が。トモダチキーワードか。

「ああ、遠慮しておきますよ。」

それ、トモダチ申請のためのキーワードでしょうか？僕が佟アリスさんとトモダチになるのは流石に…」

「いいのいいの！はい。」

…結局、押し切られて貰っちゃったな。

まあ、申請しなければただの紙切れか。

「白いウサギは不思議の国への案内人。」

みんな、遊びに来てねー♪」

その言葉が最後だったらしく、セレモニーは終了した。



「ニャー…」

(やれやれ…スゲえヒトばかりだったな…)」

「いやー、よかったぜ生アリス…」

「やっぱ超カワイかったわ…」

「服がエキセントリックだったな。」

「わかってねえなあ。それがほかの芸能人と違っていいじゃねーか！」

「ニャー！」

(ワガハイはアン殿一筋だからな、興味ないぜ。)」

「へいへい、そうでした…」

…つか、なんで翼は招待カード貰うの遠慮したん？あのアリスだぜ？」

「いや僕、実はアリスちよつと苦手で…」

「アンチではないけど。」

「ニャ。」

(そうなのか。ならリユージ、これで気は済んだか？

さっさとキャンプの買い出しに行くぞ。)」

「わーってるってー！」

…そういや、蓮と翼はカード貰ってたよな。アレって何だったんだ？」

「ニャフフ！」

（ニャフフ、リユージュはスルーされてたからな。）

「うっせえ！」

「しよーがねーだろ、あんだけ人いたら。」

「このカード、多分トモダチキーワードの紙だ。」

『EMMAのトモダチキーワードです。みんなトモダチになってねー！』ってあるし。」

「EMMAのトモダチキーワード？」

「あそつか、竜司さんは昨日入れたから知らないのか。」

：トモダチキーワードってのは、トモダチ申請をする時のキーワードだね。

昨日、トモダチ申請したでしょ？

人によっては申請にキーワードが要るように設定してて、それに必要なのがトモダチキーワードってこと。

まあ、アリスみたいな有名人は、殆どキーワードを設定してるね。」

「うお、良いじゃん！蓮、やってみろよ！」

「ああ。」

「ちよっ、アリスのキーワードは止めー！」

時既に遅し。

気づいたらもうキーワードを入力しておりー

『キーワードが入力されました。ナビゲーションを開始します。』

…え、ナビゲーションを開始ってどういう事？



「んん…一体何が…ってここどこお!？」

視界が揺らいだと思ったら、立っていたのはスクランブル交差点のど真ん中。

見回すと、ビル街はそのままだが、空は紫色に染まっていた。

そして、渋谷705は奇妙な姿に。

極めつけは、謎の服に身を包み、仮面をした二人の男、あとマスコットの的な何かだろう。

「あと誰え!？」

「ん…？何か変な…ってその格好!？」

「オマエもだ。見てみるよ…」

…喋ったあ!？」

「うおっ!?!マジか!？」

「…どうやら、ここはイセカイって事になるな。」

「…イセカイ?？」

「そうだ!ツバサは知らないんだったな。

だが、どこから話せばいいものか…」

「なあ、あれって705にいたヤツじゃねえか？」

「確かに、見覚えが…」

疑問に思っていると、彼らの真上にある巨大スクリーンが灯った。そこには、ピンクの髪をした謎の人物が。

『ねえ皆…私のこと、好き？』

「う、うん！」

「そ・れ・な・ら…」

皆のネガイ、私にちようだい？

と同時に現れる白い仮面をした警備員。

彼らは逃げることができず、胸に手を突っ込まれて宝石のようなものを取り出された。

もちろん、警備員らはこちらに向かってきている。

「ど、どうなってんだよ…！」

「僕あんな風にされたくないよ!?!」

「…考えてる暇はないようだぜ！」

突破するぞー！ジョーカーー！スカルー！」

「ああー！」

「クソ、やりやいいんだろやりや！」

相手んなってやるよー！」

「油断するなよオマエら！」

久しぶりの戦闘なんだからな。

まずは身体を慣らしながら、カンを取り戻していくんだ！」

「誰に言ってるんだ？」

切り込み隊長ナメんなよ！」

「その意気だスカル！」

ツバサはワガハイが守るから安心しろ！」

「ちよつ、これどういう状況？」

僕はどうすれば…？」

「アイツら…『シャドウ』はワガハイたちだけしか相手できん！」

ワガハイたちが何とかするからツバサは自分の身を守るんだ！」

「…了解！」

彼らだけでしか相手できないという無力感を感じながらも、目の前の二頭身に守られて動く。

「つか、この服んなるだけじゃなくてフツーにペルソナも使えんのな…」

シャドウはウジャウジャいやがるし、何なんだよここー！」

「ペルソナ…？服が変わる…？」

「それは後で話す！すまないが今は無理だ！」

3人（2人と1体？）は各々の武器を持って応戦しており、増援が

来てはいたものの、数は減っていった。

「うっし、片付いたな！」

俺らにケンカ売るとか、100万年はえーんだよ！」

だが。

「む…？3人とも、気をつけろ！」

「ハア!?また増えやがった！」

「これじゃキリがないな…」

「ここは撤退だ！」

「あ、あそこ！敵が少ないから安全かも！」

「でかしたぞツバサ！逃げるぞ！」

「一気に突っ走れ！」

大量の敵からひたすら走る。

逃げ込んだ先は路地裏であり、うまく巻けたようだった。

「っーか…」

マジで何なんだよ、ここ…」

「異世界、だろうな。」

「……………ここは、アリスの『パレス』かもしれない。」

「パレスって…」

アレはもう出来ないんじゃないのかよ？

大体、イセカイナビだつて俺らのスマホから消えちまつて…！」

「ワガハイにもわからん…」

だが、それ以上に説明のしようがない。

モニターに映ったアリスも見ただろ。アレはどう見てもシヤドウだ。

ここはアリスのパレスで、ワガハイたちはそこに迷い込んだ

…

それが最も合理的だ。」

「クソ、とにかくヤベえことに変わりねえつてことかよ…」

翼は大丈夫か？」

「ええ、まあ…」

てかあなた達は…？」

「俺が竜司だ。ロングコートのやつが蓮で、コイツがモルガナだ。」

「え、この喋ってるちっちゃいのがあの…？」

疑問に思えたのでとりあえず頭を撫でて顎をかいてみる。

「ギニャツ!？」

…ニヤ〜♪」

「…うん、猫だ。」

「突然なんだよ!？」

あと、ワガハイは猫じゃねーよ!？」

「でも蓮さんの鞆にいたときは黒猫だよね?？」

「うっ、それは…だな…」

あと、レンじやなくて『ジョーカー』な。」

「ジョーカー…？トランプ？」

「コードネームだよ。」

異世界で本名で呼び合うのは不利だからな。

ちなみに、ワガハイは『モナ』、リユージは『スカル』な。」

「了解。ジョーカー、スカル、モナ…うん、覚えた。」

あと、他にも聞きたいことはあるんだけど…」

◇

「この世界で敵対してるのがシャドウで、シャドウに対抗できるのがペルソナで…」

……うう、しばらく時間経ったけど、まだ思考が追いつかない…」

3人が情報集めと言って去った後、僕は残ってそのまま考え込んでいた。

そりや、さつき言ってた「ペルソナ」の力が無いからか当然か。

…と、その時。

「おい！そこに誰かいるのか!？」

「…やっべ、見つかった!」

「あいつ、ネガイを奪われてないぞ！

追えー!」

なんと警備員シャドウに見つかり、追われることに。
なんとか生き延びなければ…！

◇

走った。

ひたすら走った。

地下に降り、水路を横目に走り抜き。

コンクリートがやけに目立つ空間を行き。

気づけば、シャドウは巻けていた。

「ハア…ハア…」

でも、ここ何処だ…？」

もう、必死すぎてどうやって来たのかすら覚えていない。

見回すと、ところどころにゴミの山ができていて。

どうやら、地下の廃棄場に辿り着いたようだった。

「運良く逃げられたのはいいけど、ジョーカーたちがここに来てくれるかどうか、かな…」

さすがに廃棄場まで来たとは想像し難いだろうし。」

奥に道がないか探しに立ち上がる。

ゴミの臭いにやられながらも歩いていると、真っ黒でとても大きい箱があった。

何だろうか。とりあえず、開けられないか調べてみよう。

何か入ってるかもだし。

そう思って箱に手を触れた途端、突然箱の様子が変わって…

REBOOTING

SOPHIA Ver1. 37

STARTING NEURAL NETWORK...

LANGUAGE:OK

MOTOR:OK

SENSORY:OK

VISUAL:OK

MEMORY:NONE

MEMORY SYSTEM INITIALIZING...

ALL SYSTEMS:OK

What would you like me to become?
me?

To Be Continued...

#3 Awakening of Rebellion
on

眩しさに目を閉じていたが、いざ開いてみるとー
赤髪の少女がいた。

…ん？何故箱から人が出てくるんだ？

そんなもって、彼女は周りを見渡している。

「…どこだここ。オマエは誰だ？」

「いや、それはこつちも訊きたいって。名前、何？」

「私は『ソフィア』。人の良き友人だ。

そういうオマエは誰だ？人間か？」

「人間だよ。僕は服部翼。よろしくね、ソフィア。」

「ああ、よろしくな。」

その後の会話で分かったのだが、

ソフィアは「人の役に立つ」ために生まれたこと。

ソフィア自身、メモリが消失している…つまり記憶喪失であるがために自分の身の上が分からないこと。

その他いくつかが分かった。

「…なるほどね。」

「そういう翼はどうやってここに？」

「話すと長くなるけど…」

とりあえず、このパレスと思しき場所に来た所から説明した。

ジョーカーたちのこと、アウトプットと兼ねて異世界のことについてもついでに話しておいた。

「なるほどな。それで、ツバサは出口がわからなくて困ってるのか。」

「まあ、そんなところ。」

地下だし、ジョーカーたちがこの辺りにくることはないだろうからここから早く出たいんだけど…」

「OK、任せろ。」

ソフィアもそう意気込んだ時——

『うわああああああああ!!!』

お、親方！空から男2人と化け物が！

ソフィアと一緒に近づくと、3人（2人と1匹？）は見知った顔だった。

「つて、ジョーカー!?それにスカルとモナも！」

「いってて…つて、翼じゃねえか！」

「本当だ。どうやってここに？」

「あの後、運悪くシャドウに見つかっちゃって…

がむしやらに走ってたらこんな場所に…」

「それは災難だったな……だが、ワガハイたちと合流できたのが幸運、だな。」

「……なあ、そのこの3人が、さっき言ってたジョーカーたちなのか？」

「そうだよ。」

ロングコートの人がジョーカー、ドクロマスクの人がスカル、ちっちゃい2頭身がモナだよ。」

「ジョーカー、スカル、モナ……」

よし、覚えたぞ。」

「つて、ちっちゃい2頭身ってなんだよ！」

「……そういえば、よく見たら……」

「な、なんだ？ワガハイに用か？」

突然モナを見つめるソフィア。

口にしたのは……

「……タヌキ？」

「猫だよ！」

「……あ、猫じゃねーよ！」

「「いやどつちだよ……」」

「……ツバサ、少しいいか？」

ジョーカーとスカルもだ。」

「あ、うん。」

言われたままにソフィアから離れ、4人で集まる。

「ツバサ、ソフィアは何者なんだ？」

「シャドウではなさそうだし、敵意もないが…」

「えーつとね、ソフィアは…」

とにかくソフィアについて説明。

ソフィアに教えてもらったことそのままだ。

「なるほど、大体わかった。」

それでなんだが…ソフィアはAIなんじゃないか？」

「…言われてみれば。」

「…4人揃って、困ってるのか？」

「ツバサはさつき、私に出口を探してくれって頼んでたから、3人も一緒にどうだ？」

「うおっ、いつの間に…」

「まあ、そんな感じで頼むわ。」

「OKだ。とりあえず、地下から出られればいいのか？」

「まあ、ひとまずそうだが…」

「任せろ。出口を探してくる。」

「ちよつ、僕さつきまで追われてたからシャドウに見つかからないようにー」

…って、見つかってるしー！」

「離れろ、ソフィア！」

……………

……………

……………

……

…

「うっし、やっと外に出れたな！」

「だがまだ異世界の中だ。気を抜くなよ。」

なんとか地下から脱出した一行。

その間でも、ソフィアがペルソナのようなものを使っていたり、ジョーカーが自分にしかない才能を発揮したりしていたからなんとかと一言では言えないのだが。

「……………！ 待て。」

「どうしたソフィア、何か見つけたか？」

「…感じる。あっちに出口がありそうだ。」

「マジかよ!？」

…つつか、何でわかんたよ?」

「ビビっと来た。」

「びびっと…」

「出口はこっちだ、ついてこい。」

そう言つて駆けていくソフィア。僕らは追いかけるのであった。

…そういえば、走つた方向からしてあの先はスクランブル交差点だ。

アリスに見つからないといいけど。

◇

「やっぱりだ! 出口は近いぞ!」

「おお! やつと出られるのか!」

「ああ。だがまだ…ぐあつ!」

「も、モナ!?!…グハツ!」

「…不意打ち!?!」

待ち伏せなのか、突然現れた警備兵シャドウ。

なすすべなく、力を使える4人は組み伏せられてしまった。モナだけ、手が小さいからか拘束に難航しているようだが。

『ハイハイー! みんなお手柄〜!』

「その声…アリスか!？」

巨大スクリーンにアリスの姿が映し出され、同時に現れるテレビカメラを持ったシャドウ。

あれでこっちの状況を見てるのか…

『ご名答、ジョーカーくん。』

やっぱり『廃棄』じゃなくて直接殺したほうがいいと思って。そこの銀髪のカレもだよ?』

「なっ…!」

っつて、言われてもそうか。」

『ホント、銀髪くんには現実で手を焼かれたよ。』

今だって、トモダチキーワードを渡したのに『改心』してないんだし。』

「そりゃあそうさ。」

僕はアリスの手口を知っているからな。」

「知っている…? 一体どういうことだ?」

『だけど、それももう終わり。キミたちはここで死ぬからね。』

…そういえば、私が『改心』させた奴にそんな感じの銀髪の女がいたなあ。

あいつら夫婦は金も、愛も、それなりだけど地位もあつたからね!』

「…それ以上、僕の両親に言及するな!」

『キミもキミだよ。』

ハッキングと、週刊誌並みの行動。全部お見通しだよ?』

「なっ……!」

『私のシンパが大勢いるのは分かってるよね?』

『そいつらうまく使えば、簡単なことだよ。』

「…マジ、かよ。」

『銀髪クン、見た目からしてあの夫婦の息子なんですよ?』

『どうせ『復讐』なんてものに囚われてたんでしょ?』

何も返せず、言葉が詰まる。

だが、何か引つかかる。

僕は、自分の為だけじゃない。

誰のために、復讐しようとしてたんだっけ?

『ホラ、もう殺っちゃって。』

五月蠅いハエとも、これでオサラバだよ。』

思わず信号機の柱に寄っかかり、そのまま座り込んでしまう。

「っ、ツバサ……!」

もう終わり。

『再び』諦めた、その時。

諦めるのかい?

…ああ、死の淵だからか幻聴まで聞こえ出したか。

その幻聴も、自分の声なのだから逆に面白い。

君は、失った家族の為、復讐に走った。だが、諦めた？
本ツ当に、同じ『我』とでもいうのかい？

…そうさ。お陰で、こんな有様なんだけどな。

その復讐は、『悪』だったのかい？

友を巻き込み、そして信じた正義の果てがこんな結末だったとでも？

…そう、だった。

僕は、大切な友達までも、僕の復讐のために使った。

…本当に、馬鹿らしい。

「復讐なんてもの…：最初から、するべきじゃなかったんだ。」

「それでいいのか!? 諦めたままで！」

…：ジョー…：カー？

「家族のためにやったんだろ!? それが悪いワケがねえ！」

「抗うなら、とことん抗いやがれ!!」

スカル…？

「その通りだ！」

「もう一度立ち上がることの何が悪い!? ツバサなら、できる筈だ！」

それに、オマエは本当に自分の為だけに戦ったのか？

自分だけの為なら、そこまでできないだろうが!!」

モナ…

「ツバサ…頑張れ。」

ふふ、ソフィアまでかよ。

…そうだ、思い出した。

僕は自分の為だけにアリスに挑んでいたわけじゃない。

アリスの力に巻き込まれ、狂わされた人の関係者みんなの為だったはずだ！

それに、友達…双葉にアリスの魔の手が伸びないようにする為じゃなかったのか、服部翼！

「はは、何卑屈になってたんだろ。『諦める』？

そんなの、いつ僕がしたって言った？

僕は、今こんな風に立ち上がってるんだよ？」

『…そんな威勢よく立ち上がって、何のつもり？

もうオシマイなんだよ？』

「…黙れよ」

『あ？』

「黙れって言うてんだよ!!」

忍者とは真反対に。

豪快に。

叛逆の剣は、掲げられた。

|||||

その心意気やよし！

「うグッ…!?!」

何だよ…これ…!

その覚悟、気に入ったよ。

「アア…ガッ…アアア…」

家族を失い、友を巻き込み。その上、大義を得ての復讐。

痛みが…全身、につ…!

そこまでやるのなら、我も「契約」で以てその覚悟に応えようじゃないか。

我は汝、汝は我。

さあ、我が名を呼べ!

今こそ、捲土重来の時だ!

「オ、オイ、あの『仮面』…!…!」

「もしや…!」

「仮面」だって?なら剥がさなくちやあな。

顔に手をあて、そして高らかに宣言する。

来い、イルジメエツ!!

|||||

「何か」が爆ぜ、そして青い炎に包まれる…が、熱くはなかった。そして、着ている服装の感覚が変わる。

両手には小太刀が握られ、背中にかかる感覚を見るとマークスマン・ライフルそのものだった。

そして、背後に立つはペルソナ「イルジメ」。

漢服を着流し、左肩では上着が下がっている。

目を惹くのは、腰に差した刀だろうか。

その意思強き眼は、ある小説で活躍した同名の義賊を彷彿とさせた。

「おお…これがペルソナ…!」

「ツバサ! さっきの衝撃でワガハイだけ拘束が緩くなったみたいだ。

ミンナを解放するまで時間稼ぎを頼む。」

モナから、アリスに音を拾われないように話しかけられる。

なら、先ず狙うのは一つ!

前に駆け出し、1体のシャドウに目をつける。

だが、狙うのはシャドウではない。

右腕を振るうと、軽やかな音と共にガシヤリと機械が落ちたような音がした。

『なっ…! アイツ、テレビカメラを…!』

その声と共に巨大スクリーンは暗転した。

「上手いぞツバサ！ さあ、存分に暴れてやれ！」

「了解ッ！」

To Be Continued...

#4 Joining

「ハーツ、ハーツ…もう動けない…」

「肩貸してやってんだからもうちよつと頑張れねえのか？」

「仕方ないだろ。」

ツバサのやつ、ペルソナに目覚めてすぐなのにあれだけ動けたんだ。

充分どころじゃねえぜ。」

「そりゃ…言って貰えて嬉しい…な…」

「ソフィア、この辺りで良いんだよな？」

「ああ。ここまで来れば、シャドウは追って来れない。」

「そうか。」

なら、ツバサが回復するまで待機するか。」

「それなら…よつと。」

スカルに下ろしてもらい、その場で座り込む。

鉄製の足場の上だが、まあ大丈夫だろう。

「にしても、この服何なんだ？

なんか忍者っぽいし…」

「それはツバサの『叛逆の心』が生み出したものだ。

『叛逆の心』が具現化したものって言えばわかるか？」

「うーん…時間をかければ。」

　　というか、短時間の間に異世界のこと、ソフィアのことを知って、それに僕にペルソナの力が目覚めた…って感じでキャパオーバーギリギリなんだ…」

「まあ、無理はないだろうな。」

「だが、自分が目覚めたペルソナの力自体、理解しておかないとダメだぞ。」

　　一度、仮面を剥がして意識してみろ。」

「ん、やってみる。」

　　目の辺りに張り付いたものを剥がすように外してみれば。

　　忍者が頭に巻くもの…額当のようなものは砂のように消え、そして頭の中でしっかりとその姿が見えた。

ペルソナ：イルジメ

アルカナ：技師

習得スキル

・エイハ

範囲内の敵に呪怨属性の小ダメージを与える

・寝首搔き

範囲内の敵に万能属性の極小ダメージを与える

状態異常の敵に当てるとダメージ大幅上昇、

さらにTECHNICAL扱いとなる

次習得：目眩し

弱点：祝福
耐性：呪怨

……なるほど？

スカルみたいな物理関係のスキルはないみたいだが、「寝首搔き」とは？

状態異常になっている敵に有効みたいだし、見かけたらやってみたいな。

「そういえばだが……ここがソフィアの言う出口なのか？」

「……匂いが薄いから、ここで間違いない。」

そうなのかと思いつつ、見ていなかった周りを見渡す。
渋谷駅の真上みたいだが、横を見ると謎の穴が。

「あれ、なんだろう……？」

「大丈夫、ここは外に通じてる。」

「……通じてる？」

「グニャーってなってバーンってなるが、出られる。」

「テキトー過ぎんだろ！

大丈夫なのか、それ？」

「言われたままだと、爆発四散するようにしか思えない……」

「信じろ、ジョーカー。」

「やってみるしかないだろうな。」

「うーむ…」

今はソフィアの話信じろしかないか。」

「なら、もう行くのかな？」

少々疲れるが、立ち上がってみる。

足が震えた感じはないし、大丈夫そうだ。

ジョーカーたちと穴に向けて足を出すが……

ソフィアが来ない。

「ソフィアも来ないの？」

「私は…どうしたらいい？」

「ここは危険だ。一緒に帰ろう。」

「ジョーカーの言う通りだ、ソフィア。

そこら中シャドウだらけだろ？」

一人でうろつくのは危険だぜ。」

だが…と言ってソフィアは口籠る。

……しようがないか。

前に進み、その白いパーカーを持って引っ張る。

「流石にこんな場所に置いてけないよ。」

とにかく、一緒に帰ろ。」

「…わかった、ついて来いと言うなら。」

「んじゃ行くぜ！　せーの…！」



穴に入り、暫く歩いていると見慣れた渋谷駅前の光景が。

だが、光が嫌に強調しているところ、もう夜になっていたようだ。ついでに、服装は元に戻っている。

「現実…なのか？」

「ああ、戻って来られたみたいだな。」

とその時、蓮さんのスマホが鳴った。

『『ジェイル』から帰還したらしい。お疲れ様でしたのメッセージ付きた。』

『『ジェイル』…？』

『『ジェイル』って言うと、思い当たるのはさっきの場所っぽいけーってさっき誰か喋った？』

「いや、俺じゃねえけど…」

「ああ、ワガハイだぞ。」

声のした方向を見ると蓮さんが。

その蓮さんは「俺じゃないぞ」と顔で語っているようだけど…

「だから、ワガハイだったの！」

「そっか、その人…って、人じゃない!？」

「化け物みたいに言うな！モルガナだ！」

「…………猫が、喋った…!？」

もう無理だ。

異世界から帰ったと思ったら猫が喋ったぞ。

「ワガハイは異世界だとあんな格好だが、現実だと猫の姿なんだ。

異世界に行つて『ワガハイが喋る』と認知したから、こつちでもワガハイの言葉が解るんだ。」

「なるほど…………って、ソフィアは？」

竜司さんも同意のようで、見回していた。

続くが、それらしい白いパーカーは見当たらない。

「それらしいのは見当たらん…」

「おい、ちつこいの！」

いるなら出て来いって！」

「リユージ！こんなヒト混みでデカイ声出すな！」

「おい、呼んだか？」

「今の声、ソフィアか！」

「どっから聞こえた？」

「なんか、翼の方から聞こえた気がするんだが…」

「ここだぞー！」

「え、僕のスマホから？」

取り出してみるが、異世界に入る前の暗転したままで。と、不意に画面が明るくなる。

「ここだここ。翼のスマホだ。」

よく見ると、丸いアイコンが浮かんでいた。みんなで覗き込んでみる。

「んだ、この白いの…？」

「よー！」

「うお、なんか出てきた！」

「ん？」

「三人とも着替えたのか？」

「オマエ…ソフィアなのか…？」

「そうだ、私だぞ。」

「…というか、オマエは誰だ。」

「ワガハイはモナだ。こつちの世界じゃ、猫の姿をしてる。」

「モナ？ オマエが？」

「タヌキじゃなかったのか…」

「違うって言っただろ！」

「てか、何でスマホに…？」

「なんでって…私はAIだから。」

「AI…!?!やっぱりなのか！」

「エーアイって、あの賢いやツか？」

「フタバが言ってただろ。人工知能だ。」

「マジかよ…」

「では、なぜ翼のスマホに？」

「…近かったから？」

「光の中に投げ出されて、翼の匂いを追ったらここだった。」

「匂いって…」

「もしかして、ソフィアが初めて会った人間が僕だったから、とか？」

「AIだから、このスマホの中にデータとして移動してきた…ってところか。」

「要は、翼のスマホに住んでるってことかよ？」

「狭いが、必要なものは揃ってるから居心地はいい。
スカルも来るか？」

「ハハ…もう突っ込む気力もねえわ。」

「とにかく、無事に帰ってこられて一安心だな。」

「そういえば、あの中で捕まってた人たちは？
捕まったまま…とか？」

「わからん…」

「だが、普通のニンゲンではなす術がないだろうな。」

「助けに行くか？」

「そうしたいところだが、無闇に動いてもまた捕まるだけだ。」

「それに、恐らくツバサはアリスのシャドウに警戒されたままだろう
し…」

「パレスそっくりな謎の異世界、そこを統べる強力なシャドウ、そし
てEMMA…」

「また、とんでもないことが起ころうとしてるのかもしれない。」

「嫌な予感がするな。」

「ああ、ワガハイもだ。」

「とにかく、一旦ルブランに集合だ。」

「これからどうするか決めないとな。」

「こいつはどうすんだ？」

「…私はここから出られないみたいだ。

こつちに來たらネットに繋がって色々確認できたが、私の記憶は消えたままだ。

復旧手段も見つからない。

このスマホから出ていく方法もわからない。

これからどうすれば…」

「なら、ソフィアも一緒に行く？

どっちみち僕のスマホだから強制だけど…」

「まあ、ミンナに説明するとき、ソフィアがいれば話は早いだろうな。」

「あいつらどんな顔すんだろうなー、またパレスみてえなのができてるって聞いたたら。」

「他にも怪盗の仲間がいるのか？」

「いろいろ揃ってるぜ？」

「お前と気が合いそうなやつとかな。」

「ふーん…面白そうだな。」



「なるほど…」

つまり終アリスの招待で異世界に行き、謎の少女ソフィアに導かれて戻ってきた。

さらに、翼にペルソナ能力が覚醒したと。」

「なんかそう言われつと、すげえぶつ飛んだ話だけだよ…」

「ペルソナの件は僕が生き証人だしねえ…」

「だが事実だぜ。この目で見てきたからな。」

「ああ、信じてくれ。」

「な？ 蓮も言ってるだろ？」

「…わかったわ。」

「冗談で言うような理由はないもの。」

「とにかく、そのソフィアって子が一番事情を知ってるそうね。今一緒にいるの？」

「ちよつと話せないかしら。」

「そうだな、百聞は一見にしかずだ。」

「ソフィアからも説明してもらおう。」

「分かった。スマホのスタンドってあるかな。」

◇

全員がソフィアに自己紹介をし、改めて竜司さんとモルガナもしたよう。

ソフィアも自己紹介をし、質問を受けて明日の予定が決まった頃。

「じゃあレン。」

明日、改めて潜入ってことでいいか？」

「ああ、そうしよう。」

「よっし、決まりだな！」

「あー、それならなんだけど…」

「どうしたんだ、ツバサ？」

「いや、僕から言うのは烏漕おこがましいかもだけど…」

「なんなんだよ？」

「僕も、怪盗団に入れてほしい。」

「…は？」

「突然すぎて話が見えんぞ。」

「確かに、ツバサはペルソナ能力に目覚めてるが…

…何か、理由でもあるのか？」

「ある。その前に、僕の身の上について話させてくれないかな。

それと、双葉とのこと。…話してもいいかな、本当のこと。」

「…いいぞ。その内バレるだろうからな。」

「実は、僕の母さんはアリスの被害者なんだ。」

「被害者…と言うと？」

「聞いたことあるでしょ？」

アリスを心から信奉してとにかく貢いだり、アリスに意義を唱えようとすると暴力沙汰にしたりする人。」

「…そういうえば、そんな話をニュースとかで聞いたわね。」

「アレ全部、恐らくアリスのせい。」

「マジかよ…」

「母さんは、前者の『とにかく貢ぐ人』。」

2ヶ月くらいか前、母さんが突然そうなって。

あの時は突然どうしたってなって父さんと騒いだけど、その時に、母さんのカバンからアリスのトモダチキーワードを見つけたんだよね。

同じ頃に母さんと似たような人が出始めて、もしかしてアリスのせいなんじゃないかって勘づいた。

そこから先はアリスの裏を取ろうと独自で調査。

週刊誌紛いの行動とか、アリス関係の情報をハッキングしてまで集めた。」

「そのために、わたしに取り引きを持ちかけてきた。

わたし、その頃はクラスの中でも浮いてて、友達があんまりできてなかったんだ。

そんな時に、翼が話しかけてくれたんだ。『取り引きしてみないかい？』って。

わたしは翼にハッキングの技術を教えて、翼はわたしと『友達』として一緒に遊んだりする。

どーやってわたしのハッキング技術を知ったのかは知らんが、応じ

た。」

「そこまでのしたのか…」

「それだけする理由があるのか？」

「勿論あるとも。これ以上、アリスの被害者を増やしたくなかったから。」

「アリスのせいで狂わされた人の関係者の気持ちは、一番解ってるから。それだけ。」

「まあ、母さんを奪ったアリスに復讐したかったってのもある。」

「それ聞いてびっくりしたぞ、その時のわたし。」

「…でも、協力する気になれたんだ。」

「なんだか、わたしと似てたから。」

「わたしも、悪い大人にお母さんを奪われたから。」

「…それで、どうなったの？」

「双葉がハッキングを教えてくれたおかげで、調査自体はかなり進んだ。」

「…でも、結局アリスが起こしたことについては分からず仕舞い。」

「その上、さつき知ったけどアリスにもバレてたみたいだし。」

「結局、諦めたよ。」

「その頃に、ワガハイとレンがこっちに戻ってきたと。」

「まあそういうこと。」

「母さんを奪ったアリスに復讐するため、そしてこれ以上アリスのせいで困る人を増やさない為にも、僕を怪盗団に入れてほしい！」

「なるほど、分かった。仲間に入れよう。」

「蓮さん…ありがとうございます！」

「ワガハイもだ！」

「…みんなも賛成みたい。

それなら、コードネームはどうする？」

「それは潜入した時で良いんじゃないかな？

私たちは翼くんの怪盗服を見ていないし。」

「ならば明日、それも含めて改めてジエイルに潜入だ。

集合場所は渋谷の連絡橋でいいな？」

「…と、その前に♪

あとでソフィアの中身見せてくれ！

約束したよな？ な？

こいつは解析のし甲斐がありますぞ？痛くしないからな、フヒヒっ
…」

「…大丈夫かコレ。」

「まあ、双葉のことだし大丈夫だと思うよ？腕は確かだし。

…あと、僕も見えていいかな？」

「しっかし、集まった途端にコレかよ。

とんだ夏休みになっちまったな。」

「…ハッ!？」

「え、なに？どうしたの？」

「京都旅行の野望はどうなる。

それに、俺の肉は…！」

「残念だけど、延期だね。」

「おのれ不可解な異世界…！」

このフォックスが膾炙りにしてくれる！」

「いや、異世界は斬れねーだろ…

斬るならシャドウにしとけ…！」

その辺りで解散となった。

双葉はソフィアの解析に残るらしいので、僕も残るとしようかな…

To Be Continued…

#5 My Codename .is...

双葉が持つて来たパソコンと僕のスマホを接続させる。
そうしたら、すぐにパソコンの画面はコードで埋め尽くされた。

「ふむふむ、なるほど…ナヌ!?

マジか…いやでもこっちは…

スゲー…そういうことか…」

「…楽しそう。」

「同感だ。」

ちよつと覗き込んでみる。…が、この辺りの知識が無いが故に良く分からんとしか言えない…

「…どうなんだフタバ。

ソフィアのコードってやつは。」

「うーん、これ作った人、天才だ。

コードってのは、書いた人間の個性が出る。

能力やクセ、思想や性格までいろいろだ。

このコードは洗練され過ぎてて、普通に読んでも理解できない。」

双葉でも理解するまで数ヶ月かかるんだとか。

僕には一生モノなのかもな…

「フタバでもか?」

「そいつは只事じゃないな。」

「よくわからんが、私はスゴイってことか?」

「ああ、とんでもないぞ！ソフィアはスーパーAIだ！
ソフィアが世に出たら、EMMAもオワコンだろうな。」

「オワコン？」

「『終わったコンテンツ』の略称ね。言っちゃうと時代遅れってこと。
まあまあ前に流行ったネットスラングの一つだね。」

「なるほど、理解した。」

「翼は物知りだな。」

「いや、物知りって…」

「二人とも、あんまりヘンなこと教えてやるなよ。」

「特にツバサは、自分のスマホにソフィアがいるワケだからな。
それより、ソフィアの身元の手がかりになるモノはなかったのか？
作成者とか、企業の名前とか……」

「今のところナシ。結構署名入れたりするもんだけどなー。」

スマホを覗くと、ソフィアは黙って話を聞いていた。

「やっぱり、記憶喪失だからかそういうのは知りたいのかな。」

「とにかく、家でもう少し調べたい。」

「何かわかったら連絡するぞ。」

「頼んだ。」

「うむ、任せておきたまえ！」

「なら、僕のスマホ要るかな？」

「あー、それは大丈夫。」

「さっきデータ入れといたから。」

「オーケー。」

◇

サラダバーと一緒に言っけてルブランを去り、二人路地裏を歩く。

「だが、翼が怪盗団に入るとはビックリだぞ！」

「そりゃあね。」

アリスを改心できるってんなら、飛びつかない訳ないよ。
うまくいったら、きつと母さんも…」

「……………」

「…双葉？」

「いや、ちよつとな。」

「ちよつとつて何だよ。」

「聞いてみたいし。」

「……………わたしのお母さんのこと、翼は覚えてるよな？」

「…うん。」

認知訶学ってやつの研究者で、日夜研究に勤しんで…

それでいて、片親でも双葉をしっかりと育ててくれた人だっけ。」

「ああ、百点満点だ！」

…さつき言ったけど、なんかわたしと翼は似たもの同士だなんて。でも、翼はお母さんがいなくなっても、復讐であつても前を向いた。

ちよつとだけ…うらやましいなって、思った。」

「羨ましい、か…」

「僕も、そうなのかも。」

「…？どう言う事だ？」

「僕だって、母さんがアリスの影響を受けてすぐから前を向けてた訳じゃない。

それに、この間までは内心『もしも怪盗団がアリスを改心させてくれたらな』って思ってたし。

怪盗団が悪人を改心させてる力を持っていることが羨ましかった。まあ、数時間前にその力を僕も手に入れたワケだけどさ。」

「なんだ、そこまで似てるのか、わたし達。

…ハッ、まさか性別が違うだけのほぼ同一の存在!？」

「いやいや、流石にそこまではならないでしょ！」

その言葉に、思わず二人で笑ってしまう。

「…まあ、似たもの同士頑張ろうな！」

わたしが先輩として色々レクチャーしてやるぞ！」

「ふふっ。先生、お願いしますよ？」

「ふっふーん。このナビに任せなさい！」

「自信あるねー。」

「それじゃー！」

「ああ、また明日な！」

◇

特に何事もなく帰宅。

変わったAIがついてきてるのだが。

「しっかし、まさかこんなことになるとは…自分でも信じられない。

異世界に行くし、ソフィアみたいな会話するAIに会うし、ペルソナが僕にも使えるようになったわけだし。

怪盗団に入ったのは尚更、か…」

「翼、呼んだか？」

「何やら声が聞こえたが…」

「ああ、ソフィア。ただの独り言だって。」

「ここが翼の家か？」

「他に誰もいないみたいだが…」

「母さんが変わってから、父さんの提案で今は一人暮らしなんだ。

高校生活もあるから結構苦労はあるけど、アリスの調査とかもあつてこっちの方も板についてるけどね。」

「そうなのか。」

「そういえばだが、私みたいな会話するAIは少ないのか？」

「勿論。それこそEMMAくらいだよ。」

「つまり、希少価値が高いつてことか？」

「高いけど、謎が多すぎるから一概には言えない…かな。」

「言われてみればそうだな。」

「それに、言っちゃうとAIにしては言動が曖昧だし…」

「それは……」

…反論の余地がない。」

「ちよつ、へこまなくていいんだつて。」

「…私は人の良き友人。」

役に立てないと意味がない。」

「良き友人ねえ…」

それだけ覚えてるんだつて。」

「ああ、きつと大切なことなんだと思う。」

「…でも、役に立つだけで友人って言えるのかな。」

「…違うのか？」

教えてくれ。他にどんな方法がある？」

「突然そんなこと言われても…」

考える。

役に立つだけではただの利害関係。なら何だろう…

「…人のことを知る、とか？」

「知る…？」

「うん。そうすれば、相手の気持ちや心が理解できるし、友人にもなれるんじゃないかな。」

「……」

「まあ、難しく考えなくていいよ。

ソフィアは僕と一緒にいるんだし、行く先々で人のことを知って勉強すればいいと思う。

手段の一つで怪盗団に入るってなると話は別だけど…」

「そうか…なるほど、悪くない。

それで人の良き友人になれるのなら。

それじゃあ、早速ジョーカーに電話で聞いてもいいか？」

「どうぞ、ご自由に。」

「感謝するぞ。」

暫くすると、ソフィアの嬉しそうな声が聞こえた。

取り引きという形でうまくいったらしい。



―7月26日(水)―

蓮さん、双葉と合流し、渋谷駅の連絡通路に集まる。

「よし、全員集まったな。」

今から『ジエイル』に潜入する。覚悟はいいか？」

「僕はできてる。」

母さんや被害者の為にも…」

「何度も通った道だ。」

いまさら怖気づく理由はない。」

「か、かかってこーい！」

「情報も少ないし、慎重にいきましょう。」

今回はまず偵察ね。」

「EMMAを使って入るんだよね？」

特別な操作が必要なの？」

「別に、そういうわけじゃなかったね。」

EMMA上で名前の検索して、トモダチ申請するときキーワードを言えばいける。」

「おお、さすが翼センセイ！」

「先生って…」

新入りに言う事なの、それ？」

「後は、安全に入る方法だけ…」

「昨日脱出した場所なら敵はいない。」

その場所の近くまで移動して、キーワードを音声入力すればいい。」

「…信じて行ってみるのかなさそうね。」

「うっし、じゃあ出発だな！」

○●○●

視界の揺らぎが戻ると、真下は鉄製の足場。

どうやら到着したらしい。腕や足を見ると服装も変わっていた。

「…どうなった？」

着いたのか？」

「…てか、皆の怪盗服ってこんな感じなんだー…」

「むっ、確かにか？」

「オマエもな、フォックス。」

「おお…久しくこの姿を忘れていた。」

美と機能性の融合…やはり良い。」

「あつ、美少女怪盗がいる！」

「…美少女怪盗と申します！」

それと共にポーズをとる春さん。

「…美少女怪盗…?」

それを言うなら真さんは世紀末覇者とか思ったが言わないでおく。

「もう、ふざけないの。でも、この格好は確かに懐かしいわね。」

「それより、翼の怪盗服はまるで忍者だな。

どこことなく親近感を感じるぞ。」

「おイナリは狐だもんなー!」

「本命はこつちじゃない。街の景色をってみろ。」

指指された先はジェイルの風景。

奥にいくほど街らしくなく、705の形も変わっていた。
みんなも声を漏らしている。

「誰かの認知が影響して、あんな風になってるんだよね…?」

「恐らくアリスのな。」

あそこは特に歪みが強い場所なんだろう。」

「ジェイルを統べる女王の根城ということか。

さもありませんといった佇まいだな。」

「この辺りは街の形を保っている。

ある程度離れば、影響は少ないらしい。

前回ワガハイたちは、この下のスクランブル交差点から入った。

そこで、アリスに従うシャドウたちが、大勢のニンゲンから何かを
取り出していたんだ。」

「あの宝石みたいなやつな。」

つか、あれって何だったんだ?」

「…それは『ネガイ』ってやつなのかもしれない。」

「ん、誰…って、ソフィアか。」

「よ、怪盗団。」

「おおつ、ソフィアか!?

AI少女、ガチの実体化キター!」

「わあ、すごく可愛いねソフィア。」

「なかなか興味深いフォルムだ…

調和のとれた曲線が美しい。」

「え、そこ?」

「その服、なんか不思議な感じ…。モフモフしていい?」

「モフモフ…?」

「触ったり抱きついたりしてみたいってことらしいわよ、ソフィア。」

「それは拒否する。子供じゃないからな。」

「断られた!」

「…そもそも、AIに大人子供があるのか?」

「それよりソフィア、さつき言ってた『ネガイ』とは何だ？」

「このシャドウたちが言ってた。

『ネガイを奪え！』とか『王に献上する！』とか。

人から奪われていたのなら、それが『ネガイ』なのではないかと推測。」

「そういえば、昨日シャドウに追われたときもそんな事言ってた気が…」

「確かにアリスと会った時も、そんなことを言ってたな。

そして王つてのがアリスのことで、このジェイルの主の事か…」

『『ネガイ』って、お願いとか、そういうこと？』

「願いが奪われる…」

それってどういうことなのかしら。」

「んー…推測だけど、もしかしたらああやって改心させてるんじゃないかな。

トモダチキーワードを入力した人が改心されるなら、そういうことなのかも。

まあ、昨日襲われた人がどうなったのかだけだ。」

「なるほど…して、その肝心の被害者たちはどこに居る？」

それらしい人影が見えないが…」

「わからん。何処かに囚われてるのかもしれないが…」

「…ねえ、その襲われてた人たちって、本当に人間かしら？」

「どういうことだよ?」

「もし被害にあった人たちが本物の人間で、今もこのジエイルに囚われてるのなら、今頃、巷は集団失踪事件とかで大騒ぎになってる筈じゃない?」

「そんな騒ぎ、ネットにも流れてなかったぞ。」

「うん。」

「僕も被害者の関係者から話を聞いたことはあったけど、失踪までは聞かない。」

「聞いても、借金が返せなくてーって感じだけ。」

「じゃあ、現実世界では、誰も居なくなってるない?」

「え、そうなるのかなり矛盾が…」

「そうか、シャドウか…」

「シャドウって何だ?」

「シャドウ…」

『無意識に存在している抑圧されたもう一人の自分』…だっけ?」

「ああ、よく覚えてたな。」

「じゃあ、本人は無事ってことか?」

「いや、シャドウは本人と表裏一体だ。」

「シャドウからネガイが奪われたとき、現実の人間がどうなるか…」

…まさか、それが昨日、翼の言ったようになるという事か？」

「いや、今の話はあくまでも推測だ。

ワガハイたちが見たのは、あくまで認知世界での出来事だ。

現実世界で確かめないと、本当に何が起きてるのかは判断できない。

その為にも、アリスや被害者のことの裏付けをとっておく必要があるんじゃないか？」

「それに、認知世界で主に何かすれば、最悪廃人化させちゃう可能性もあったよね…」

「ええ。

行動に移す前に、しっかり調べておかないとないと危険だわ。」

「それなら、アリスと被害者のことを調べよう。」

「了解。

けどよ、実際どうする？」

「まあそういう話は外で、だな。」

「それなら、偵察は終わりってことでいいか？」

翼のコードネーム、決めようぜ！」

「ああ、そういえばそうだったな。」

「んー、みんなってどんなコードネーム？参考にしたい。

ジョーカー、スカル、モナは覚えてる。」

「えっと、パンサー、ノワール、フォックス、クイーン、そしてわたし

「がナビだ！」

「なるほど、ほとんど英単語からか…」

「翼くんは忍者って感じだし…」

全員、うーんと唸る。

「…クロ？」

「なんか犬っぽいから却下。まあ服装は黒いけどさ。」

「シルバー…とか？」

「なんか違う。」

「いつそのこと、ニンジャはどうだ。」

「安直すぎるしダサイ。」

「ダサイ…」

「スナイパーはどうだ？」

銃にスナイパーのやつ使ってただろ？」

「なんかなあ…」

てかこれはマークスマン・ライフルだから若干違う。」

「それならマークス？」

「なんか人名っぽいからダメ。」

「…シノビとか、どうだ？」

「…それだ。」

ナビ、ありがとう。」

「ふふん」

ならわたしが名付け親だな！」

「ペットじゃないんだけど…」

「それじゃ、コードネームも決まったし、外出ようぜ！
よろしくな、『シノビ』！」

「よろしく。」

…なんか、本名以外で呼ばれるのはもどかしいな。

To Be Continued…

#6 Television

僕のコードネームも決まったところでみんなで帰還。

「ジェイルの状況は確認できた。

ここからは、アリスや被害者のことを調べるぞ！

……と言いたいが、ツバサはその辺りは調べてるのか？」

「勿論。

アリス周辺の黒い噂や被害者からの声は聞いてるけど、でもできれば裏付けをとってほしい。」

「裏付けか…

本人の周辺に近づく必要があると思うが…」

「大人気アーティストに近づくのはちよつと難しそうだよね…」

「……あ、あのさ。

私、明日アリスに会えるかもしれないんだけど。」

「は？」

マジか、何ですよ？」

「えつと…

前にモデル事務所の社長に頼んでて。

アリスがテレビに出るみたいだから、勉強のために生で見たいって見学お願いしてさ…

みんなとの予定があるから諦めてたんだけど、今ならまだ間に合うかも…」

「…見事なタイミングだな。」

「ああ、流石はアン殿だぜ！」

「何もわかんないかもよ？」

「話すのとか、そもそも無理だし。」

「いや、杏さんならいけるかも…」

調べた感じ、アリスはファッション誌に関心あるらしいし、杏さんはその中でも人気な方だから向こうから接触してくるかも。」

「翼、そこまで調べてんのか…」

わたしの預かり知らんところで何処まで応用を…」

「まあそれは置いていて。」

行けても、全員は無理だよ？

せいぜい、あと1人くらいじゃないと…」

「それは仕方ないかあ…」

適任者…：蓮さんか？

それは無意識のうちに全会一致してたらしく、無言の圧のようなのがかけられる。

「よし、そういうことだ。」

よろしくな、蓮。」

「なんかちよつかいかけて、アリスの尻尾掴んでこいよ。」

「任せておけ。」

「おお、案外やる気満々！」

「ワガハイも一緒に行くぜ。」

見つからなきや大丈夫だろ。

とりあえず今日は、街で集められるだけの情報を集めようぜ。

これにはツバサも参加してくれ。家にある情報は、ワガハイたちがテレビ局に行ってる間に頼む。」

「了解！」

—7月27日(木)—

「さーて、やるかあ…」

「なんでわたしも…」

「私はスマホから出られないからな…」

終わったら、直接コード見てもいいぞ。」

「ホントに!?!」

昨日集めた情報によると、街中でジェイルにいた人を見つげられたらしい。それに加えて、彼らは闇金に手を出していたんだとか。母さんと同じくアリス狂いになってる辺り、やはりアリスはクロ。

今日の行動予定は、自宅でアリス関係の情報の精査をして使えるものを調べるといふもの。

ソフィアもいるが、一応で双葉も呼んでおいた。

会話からして現金な人だな…別に気にしてないけど。

「ソフィア、アリスが出る番組が始まるまでどのくらいあるんだ?」

「あと1時間54分だ。」

番組で行われるコーナーの傾向から推測すると、アリスが現れるのはそれから約15分後になるぞ。」

「そこまで分かるのか…」

「凄いなソフィア。」

「褒められた。♪」

「それじゃ、まずは資料の整理からだな！」

「翼の部屋にあるのか？」

「あ、うん。」

そう聞いたすぐ、双葉は部屋の中に入っていった。

曲がりなりにもウチなんだけどなあ…。

ま、やましい物は置いてないし、いっつか。



『続きまして、『今、会いたいヒト』のコーナー。』

今日はスペシャルゲストをお招きしました。

現在話題沸騰中。ファッシュョンアーティストの柊アリスさんです
！』

約2時間後。

ソフィアの推測通り、アリスが登場するコーナーが始まった。

蓮さんたち、頑張ってくれよ…

「双葉ー。アリス出たよ！」

「むっ、もうそんな時間なのか。」

「よし、休憩がてら観るぞー！」

「そのつもりだって。」

「麦茶入れてくるねー。」

「ああ、助かるぞー！」

2人分の冷えた麦茶をコップに注ぎ、双葉に渡して一緒に見る。
見たところ、普通の生放送のようだ。

『…その時のキラキラした輝く想いを、私のように引っ込み思案だった人に届けたい。『誰かの光』になりたい。』

それがこのファッシュョンを始めたらきっかけです。』

「…翼。今の話聞いて、何か響いたのか？」

「別に。」

メディアの前で何を言ったところで、結局人々を洗脳してる時点でね。」

「誰かの光になりたいか…」

「わたしも、ファッシュョンで変わる…のか？」

「さあ、どうだろうねー。」

実際のところ、僕にファッシュョンセンスなんてないし。

「今度杏さんに見繕ってもらったら？」

「おお、それいいな！」

「ファッション…」

私も心がわかれば、理解できるようになるのか？」

「ソフィアならきつとできるぞー！」

そんな会話をしながらも、3人で見ていたその時。

『そんなアリスちゃんだけど、最近は何氏の噂も…』

「カレシって…」

『あ、あ…あれ…？』

そのまま黙るMC。

「突然どうしたんだろ…」

「突然のハライタとかか？」

「それは無いでしょ…」

『アリスちゃん…俺…』

キミのことが好きだ！ 付き合ってください！』

一瞬の静寂。

それを理解すれば、こうならざるを得ない。

「…は、」

「はああああー!?」

「ど、どどどどうしたんだ突然!?!」

『付き合ってくれ』って…

あのMC、隣のアナウンサーと婚約してた筈だよ!?!」

「そうなのか? フリンってやつなのか?」

「ソフィアア、そんな言葉覚えんなー。」

…って、それかなりやばくないか!?!」

「しゅ、修羅場になるぞ…!」

案の定隣のアナウンサーが叫び、すぐさまCMが入る。その時、アリスが笑みを浮かべていたような気がした。

「い、今の放送事故どころじゃないぞ…」

…まさか、改心の力でMCを操ったのか!?!」

「そうだとしたら、終アリスもかなり大胆だな。」

放送事故に立ち会ったとかで、きつと知名度が増すぞ。」

「てか、さっきアリスが笑ってた気が…」

もしかして、破局させるのを楽しんでるのかも…」

「なぬう!?!」

まさかアリス、翼のお母さんをそんなことの為に…?」

「マジだとしたら、やっぱかなりのクズだな。」

なーにが『誰かの光になりたい』だよ。
ジエイル行ったらアイツシメるか。」

「翼、口調変わってるぞ。」

「そりやあ母さんをそんな理由で奪ったらね。」

「そうなのか…」

その後、テレビ局に行つた3人によると、アリスはマネージャーに暴行を、しかも当たり前のようになっていることを知つたらしい。

しかも、追い込まれたらトモダチ申請をした辺り、自分が改心の力を使えるのは自覚してるだろう、とのこと。

まあ、こんなの聞いて腹立たないワケないよな。

To Be Continued…

#7 A Passing Ally of Justice

遊園地と化したBunkamachiにて。

「よっし！ ミッション達成だな！」

「あ、これ知ってる。」

よくCMで流れてる曲だよね。」

『まかろんきやのん』。

アリスの代表曲で、売り上げランキングは常に上位だね。」

「その人気も、インチキ改心で手に入れたってことかよ。」

現在、僕と同じく新しく怪盗団に入ったソファイアこと『ソファイア』も加えて、ジェイルにてアリスが鎮座する『王城』を攻略するためにサーチライトを潰して回っているところだ。

詳しく言うと、サーチライトのエネルギー源を盗ってるワケだが。ここまででも、マルクシテイでアリスブランドのワンピースを、宮前公園でアリスが表紙を飾る雑誌をエネルギー源として手に入れている。

モナの推測によると、これらはすべて「アリスを王^{キング}たらしめているもの」らしい。どれもらしいものだな。

「それじゃ、ここの『牢獄塔』も制圧できたんだし、サーチライトは消えたはず…なんだよね？」

「そうだな。」

「ようやくアリスの王城に潜入できるな。
すぐにでも向かうか?」

「ああ、一刻も早くアリスを止めないと危険だ。
スクランブル交差点に戻って、王城に突入するぞ!」

◇

スクランブル交差点へと戻ってきたワケだが、迎えたのはサイレン音、閉じる王城への道、そして大量のシャドウである。

「な、なに!?!」

「ふ、塞がってる!?!」

「…それに、凄い数のシャドウだわ。」

「クソ、どうなってんだよ…」

「これじゃ城に行けねえじゃねえか!」

「せつかくサーチライトを潰したのに…」

「あちこちで暴れ回ったからな。」

「アリスに警戒されたか…」

「ナビ、どうにかならないか?」

「うーん、簡単にはいかなそう…」

「今はどうにもならん。」

「ここに居ても囲まれるだけね…
ジョーカー、どうする?」

「一度退くか。」

「それしかないよねえ…」

それに、こういう時こそ冷静に…」

「そうだな。」

一度現実に戻って対策を考えよう。」



「…すっかり遅くなっちゃったね。」

「つか、どうするよ…」

あの壁なんとかしねえと…」

「いや、差し迫った問題が他にある。」

…腹が減った。」

「つて、ソコかよ!」

もうちっとマジメに…」

いいかける竜司さん。

腹の虫は容赦なく鳴き声を上げる訳なのだが。

「あ…いや…」

確かに腹減ったな…」

「ふふ、まずは食事にしましょう。

栄養取らなきゃ、アイデアも浮かばないよ。」

「む、食事か？ 店探すぞ。」

「いや、大丈夫だよソフィア。

もうターゲットは決まってるからね…」

「む、翼もか？」

「ルブランのカレー。そうでしょ？」

「そのとーり！

きつと皆にもご馳走してくれるぞ！」

「もう、マスターに甘えすぎよ。

いつもご馳走になってるんだから…」

「うっ…」

なら諦めようと言いかける。

と、酒に酔ったような人の声が聞こえてきた。

「なんだ…ケンカか…？」

「どいつもこいつも…ヒック…

人を馬鹿にしやがってよお…」

「ハア…ただの酔っ払いかよ。」

「面倒だし、さっさと避けてくか…」

「あん？　なんだガキども…こんな時間に…」

そう言つて杏さんに近づく酔っ払い。

「なあ、そこのセクシーなオネーチャン！

おじさんの相手もしてくれよ…グへへ…」

「ちよつと、やめてくださいー！」

「警察を呼ぶぞ？」

「んだその口の利き方はア！」

「ちよつとキミら、反抗的な態度は取らないでよ。」

「あ…？」

そつちから突つかかつてきたんだろーが。」

「そーですよ。」

大体、そつちもストッパーしてくれつての。」

「このガキ…俺様が礼儀つてやつをヒック…

教えてやろうじゃないの…」

「いい加減に『はいはい、その辺にしとけて。』」

と、横からスーツを着た男が。

髭あるし、髪が長くてちよつと胡散臭い。

「なんだアテメエ…」

「あー…なんつーか…」

「通りすがりの正義の味方です。」

「うさんくさっ。」

「わかる。」

「なあにが正義の味方だあ…?」

「ざけんなコラア!」

酔っ払いはその男に突っ込んでいきーー
ボッコボコにされた。

「おっと…急に転んでどうしました?」

「いや、なんか一方的にぶん投げてたし…」

「いやいや、百歩譲っても正当防衛だろ。」

「ちよ、何だお前! 警察呼ぶぞ!」

「俺がその警察だ。」

「わかったらさっさと帰りな。」

何かを出したスーツの男。

隣にいた会社員は「すみませんでしたー!」と言って走り去って
いった。

…倒れた酔っ払いを残して。

「あー、こいつ置いてくんじゃねーよ！」

なんつー薄情な…

まあ、そのうち目え覚ますか…

…で、お嬢さんたち。大丈夫だったか？」

「ああ、助かった。」

「いいってことよ。善良な市民を守るのが、俺の仕事でな。」

「…気をつけろ、蓮。」

「この男、恐らく公安だ。」

「おつ、察しがいいな。」

まあ、監視を知ってりやそりやそうか…

ちなみに、ソコにも1人いるのは気付いてたか？」

「馬鹿野郎、何考えてて…」

「悪い悪い。この酔っぱらいの保護頼むわ。」

「ハア!？」

「なんなんだ、こいつ…」

「怪しみ200パー超えだな。」

「…その公安が、私たちに何の用？」

「そう怖い顔するなよ、ちよいと事情があつてな。」

「コーヒーでも飲みながらどうだ？　そこはカレーも絶品でな。」

「あー、なるほどね。」

「おっ、そこの銀髪。分かるじゃねえか。」

「この辺に住んでるだけなんですけど…」

◇

来たのはやはりルブラン。

マスターはお冷をドンと置き、ごゆっくりとだけ言って去った。

「ごめんなさい。私たち、警察が嫌いなんです。」

「笑顔で言うな笑顔で…」

「用があるならばやく言ってください。」

「わかったわかった。」

前置きはなしだ、本題に入るとしよう。

…俺は長谷川善吉。警視庁公安部に出向中の捜査官だ。
階級は警部補。それなりに偉い立場でもある。」

「警部補って偉いんだな…」

「OK、覚えた。」

「あん？ どっから声した今？」

…まあいい。雨宮、お前に聞きたいことがある。

先日、テレビ番組の中で、柊アリスへの告白騒動があったのは知っ

てるか？」

「ああ、勿論だ。」

「まあ、だいぶ騒がれたからな。

知ってて当然か。

まあ訳あって、一応アレにも調査が入ったんだがな…

事前にMCがあんな事をしでかす様子はなく、アリスに特別な感情を抱いてた形跡もない。

居合わせた女性MCと先日婚約したばかりだったらしいからな。そもそも動機がない。

…で、警察は今こう考えてるわけだ。

『心の怪盗団』による、『改心事件』なんじゃないかってな。」

「改心事件って…まさか…」

「去年、よく似た事件がたくさん起きたよな？

人格の豹変、異常行動、精神暴走…

改心事件となれば、容疑者の筆頭はお前だ。

心の怪盗団のリーダー…雨宮蓮。

薬か催眠術かわからんが、テレビ局に対する威力業務妨害ってところだな。

このままだと、遅かれ早かれお前は逮捕される。」

「い、いや、なんで…！」

「ふざけないで頂きたい。大体、物証は？」

「ふざけちゃいないが、証拠はまだない。

だから話を聞きにきたんだよ。」

「は？」

「犯人はお前なのか？」

「なわけねーだろ！」

「ああ、コレは濡れ衣だ。」

「だよな。まあ、俺もそう思ってたわ。」

突然スマホを取り出した長谷川という男。

『管理官』と言っている人に電話をかけているようだ。

「え？冗談？」

いやいや、至って大真面目で…

…良いから帰れ？ わかりました、すぐ戻ります。」

そしてスマホを戻す。

「つてことで、上司の説得を試みてみたんだが。

お前なシロって話、信じてもらうのは難しそうだ。」

「そりやそうだよね…」

「今の電話…ホントに…？」

「やべえ…なんなんだこいつ…」

「…結局、何が言いたいのかしら？」

「いくら冤罪だと主張しても、お構いなしに逮捕する連中がいるって

ことだよ。

そうなればお前も困るだろう。俺も事件が解決できなくて困る。そこで提案だ。俺と取り引きしないか？」

「取引だと…？」

「俺は事件を解決したい。

そのために、お前の持つてる情報が欲しい。

今は解決の糸口さえ掴めなくてな。ぶっちゃけ困ってる。

そしてお前は逮捕されたくない。

そうならないように、警察に手を回してやる。

どの組織も身内の話は信じるもんだ。効果は大きいぞ。

お互いに協力できると思わないか？」

「公安は信用できないからな…」

「エラく嫌われたな…」

まあ、お前がやられたことを考えれば当然か。」

「お前みたいな怪しい野郎の言うこと、簡単に信用できねーな。」

「能ある鷹は爪を隠すって言うだろ？」

俺もそういうクチだからよ。」

「…どうする、レン？」

この男が信用できるのか、見極めてから返事しても遅くないぜ？」

「…しかし、よく鳴く猫だな。」

「ニャー、ニャー。」

「ま、答えは今すぐじゃなくていい。
暫く考えて返事をくれ。」

◇

「いい返事を期待してるぜ、怪盗団。

それじゃマスター。またカレー食べに来るんで。」

「悪いが品切れだよ。アンタにはな。」

「んな殺生な…」

「マスター、カレー一人前。」

「…お前もなかなかなこと言うねえ、翼。」

「あのなあ…」

◇

「なんなのあいつ！

言ってること無茶苦茶だし！」

「何本かネジの飛んだ男だったな。」

「ハセガワゼンキチ…

名前と似合ってなさすぎだ。」

「でも、あの人の言ってることが本当だったら…」

「蓮さんがマジで逮捕される…ってことだよね。実質、脅しみたいなものか。」

「けど、問答無用で逮捕されるよりはマジよ。罠かもしれないけど、情報がないよりはね。」

「ああ。警察が動いてるってわかっただけでも、あの刑事と話した価値はある。」

問題は、あの刑事がどれだけ信用できるかってところだが…」

「信用できないな。」

「そうだな、信用しすぎるのは危険だ。」

「…でお前ら、今度は何しでかしたんだ？」

「ななな、何もしてない。」

そうじろうは心配しなくていい。」

「…アリスって奴のことだろ？」

あの告白騒ぎがお前らの仕業だって疑われてる…

そんなところか。」

「てか、濡れ衣なんだよ！

悪いのは全部アリスって奴で…」

「ごめんなさい、マスター。」

また余計な心配をさせてしまっ…」

「…お前らは悪くねえんだろ？」

だったら堂々としてろ。濡れ衣は自分たちで晴らしな。」

「…ゴシユジンの言う通りだな。」

「何かあったら、いつでも協力はするからよ。」

「あ、ありがとう、そうじろう!」

「…まずは、アリスのことを何とかしよう。

刑事の件はその後だ。」

「そつか…そしたら取引とかいらないもんね。」

「しかし、肝心のアリスの城には、このままでは近づけないぞ。」

「あの隔壁が厄介だな…」

「いつそのこと、ぶっ壊す?」

「流石に無理だろ! 脳筋か!」

「流石に冗談だったの。」

「…何か困ってるか? 力になるぞ。」

「あ、ソフィア。」

あの隔壁を開ける方法を考えてるところ。」

「…それは私にも難しいな。」

双葉のハッキングはどうだ?」

「うーん…。隔壁に繋がった端末でもあれば、そこからどうにかできるだろうけど…」

「端末？」

操作パネルだったら、隔壁の裏にあっただぞ。」

「なにっ!? マジか!」

「以前通った時に記憶した。間違いない。」

「んなことよく覚えてたな。」

さすが、愛で動いてるだけあるぜ。」

「AIね、竜司さん…」

「…誰と話してる？」

また増えたのか？」

「気のせいだ、そうじろう。」

「…まったく、人の店を根城にしちまいやがって。」

俺はぼちぼち帰るからよ。戸締り頼んだぜ。」

あんまり遅くまでやるんじゃないぞ?」

「ああ。」

「ま、ほどほどにな。」

そう言ってマスターは帰っていった。

「…問題は、どうやってフタバを隔壁の向こうに連れて行くかだな。」

「何人かで協力すれば登れないかな？」

無理な高さじゃなかったと思うけど…」

「それか、ビル街伝いに行つて裏に回るとか？」

「どちらも、途中で見つかつてしまうぞ。

サーチライトもあつたからな。」

「なら、誰かが囿になつて、警戒網に穴を開けるしかないか…」

「囿つて、んな危ねえ役、できる奴いんのかよ？」

「…僕なら、いけるかも。」

「そうか…！」

確かに、ツバサは現実のアリスからも警戒されてる存在だ。できなくはないな。

…だが、新入りのツバサ1人では厳しそうだな。

一緒に動けるのがもう1人いれば安定するんだが…」

みんなの視線が1人に集まる。

デジャブな気がするが、別にいいだろう。

「…わかつた。任せろ。」

「流石だぜ、レン！」

オマエならそう言ってくれろと信じてた！

2人とも、大立ち回りを演じて、シャドウを目一杯引きつけてくれ
！」

「任せてくれよ！」

「だけど、2人がかりでも危険なのは確かだよね。

「誰かサポートは必要じゃない？」

「私がやるぞ。先行して、敵の一団を引きつけておく。

そしたら、2人の負担も減るからな。」

「ソフィア、助かるよ。

でも、無理はしないでよね。」

「ノープロブレム。」

「よし、作戦はこれで決まった。あとはチーム分けをするぞ。」

かくして、作戦会議が始まる。

それだけで、夜は更けていった。



—8月28日(金)—

渋谷駅の真上、鉄製の足場の上。

白い手袋、背中にかかったDMRと両腰に納めている双剣を確認。

『作戦は頭に叩き込んだな?』

「うん。ソフィーが第一波のヘイトを買う。

モナ、スカル、パンサーはサーチライトの破壊。

ナビが隔壁を開けて、その間、フォックス、クイーン、ノワールが

ナビを護衛。

そして、僕とジョーカーはスクランブル交差点でシャドウを一手に引きつける。

「これで合ってるよね？」

『よし、大丈夫みたいだな。

…行くぞー!』

To Be Continued…

#8 Bird Cage

夜のように暗いスクランブル交差点。

ジョーカーと並走するようにして、ビル伝いに行く。

《そろそろだね。》

《おう、行くぜ！》

下ではパトカーが集まりだしており、こちらには気づいていそう
だ。

そして、ビルの1つに来たところ。

《2人とも気をつけろ！下からだ！》

そして現れるマシンガン持ちドローン型シャドウ2体。
容赦なく発砲され、避けるように屋上から飛び降りる。
背中から取り出すDMR。

その先をジョーカーの方に向け、背後のドローンを撃つ。
彼も呼応するように、背中に回って仮面を剥がした。
そして無事着地。

ひしめき合うシャドウを前に、僕らは刃を向けるのだった。

《2人とも、頼んだぞ！ 作戦開始だ！》

◇

増援も含めて跳ね除け続けること暫く。

サイレンが鳴り響き、四方からパトカーが。

側から見れば絶体絶命。でも、そんな訳がないっていうね。

《間に合った！ 行くぞシノビ、ジョーカー！》

轟音が頭上からすれば、さらに隔壁が開く。

現れるは怪盗団の面々。

「間に合ってよかった！」

「2人とも、カンペキだったぜ！」

「陽動から戻ったぞ。

作戦、うまく行ったみたいだな。」

「ソフィーお疲れ様！」

それじゃ、あとは王城に突入するだけかな。」

「ああ、ここからが本番だ！」

シャドウを片付けて『705』に突入するぞ！」



王城を駆け上がり、着いた先は頂上。

「オタカラらしき匂いがあるのはここだ。気を引き締めろよ、オマエら。」

「しかしこれは…鳥かごか？」

「どうしてこんなものが…？」

「アリスはどこだよ？」

「いないみたいだけど…」

「ちよつと、アレ見て！」

パンサーが指さした先にはモヤが見えた。

「アレは、オタカラか…？」

いや、ワガハイの知ってるオタカラとは全然違う気も…」

「…！」

みんな隠れる、シャドウだ！」

ソフィーに言われるまま身を隠す。

するとシャドウが現れ、何かをしているようだった。

「何やってるんだ…？」

「…ネガイは運び終えたか？」

「はい、ひとまずこれで全部です。」

「ネガイ…？」

「まだまだ人は入ってくる。逃さずネガイを奪い、ここに集めるんだ。」

「承知しました。」

「あれってまさか…」

「ネガイか!？」

「ああ、間違いない。」

「ああ、あん時見たのとソツクリだぜ！」

すると、ネガイは真上のモヤと同じように変化。
そのまま吸い込まれていった。

「き、消えた!?! 今のって…」

「なんか吸い込まれていったけど、まさか…」

「ああ、間違いねえ。」

あそこに見えてるオタカラらしきモヤ…アレが『ネガイ』だ。」

「あれが…?？」

「確かに、アリスが集めてるとは聞いてたけど…」

「つか、さつきまで宝石だったろ？」

「なんであんなモヤみたいになっちゃったんだ？」

「これはあくまでもワガハイの推測だが…」

「アレが本来のネガイの姿なんじゃないか？」

「ニンゲンの願いには、元々形なんてないからな。」

それを大事なものだ意識するから、宝石みたいに形をなす…

ネガイを奪われたヤツらが、『奪われる』と意識したからネガイが宝

石になってたんだ。」

「なるほど…」

前にモナが教えてくれた怪盗のイロハで似た事言ってたね。

オタカラは『奪われる』って意識するから実体化する。

それと同じってことか…」

「じゃあ、何でアレはまたモヤに戻ってんだ？

ネガイは奪われたままだぞ。」

「この鳥かごに収められて、アリスに所有権が移ったんじゃないか？

だが、アリスはアレを『奪われる』とは思ってない。

だからモヤ状に戻ったんだ。」

「そういうことになるのかしら…」

「とにかく、アレを奪って解放すれば、人々は元に戻るかもしれない。」

「ああ、やってみる価値はあるな。」

「待て、あんなモヤモヤどうやって盗む？」

「予告状を使うんだ。」

「予告状…って何だ？」

「あのモヤモヤを実体化させるための手だ。

シノビが言ってただろ。持ち主に『奪われる』と意識させれば、形をなすんだ。

そのために『予告』してやるのさ。オマエの大事なものを盗っちゃまうってな。」

「…なんとなく把握した。」

「でも、前みたいにくまなくいくのかな？」

「ここはパレスじゃないんだし…」

「でも、あれもネガイなんでしょ？」

「同じく意識させるなら、いけるんじゃない？」

「ああ。打たぬ鐘は鳴らぬだ。まずは実行あるのみ。」

「とりあえず今は、潜入ルートだけでも確保しておきましょう。」

「よし、早くやるか！」

そういつて鳥かごの中へ駆ける。

と、何かにぶつかった感覚がしてー

「痛ったああああ!!」

「だ、大丈夫か!」

「大丈夫じゃないかも…」

「今のは一体…」

「なんかバリアみたいなの出た。また通せんぼか？」

「…今、何かが聞こえた…?」

「…え？」

って、ソフィー危ないって！」

「そして鳥かごに近づくソフィー。
勿論バリアに阻まれるのだが…」

キモっ…話しかけないでくれる？

なに男子に色目使ってるの？

あいつってさ…ほんと根暗って感じだよー

わかる〜！ ジメジメしすぎ、みたいなの？

「違う…私は…！」

「…何だよ…今の…」

「皆、聞こえたよね…？」

「それよりもソフィー、大丈夫？」

「…問題ない。」

それよりわかったことがある。今の記憶が、この扉を開く鍵だ。
この鳥かごには鍵がかかっている。」

鍵という言葉に気になり、改めて鳥かごを見る。

その鳥かごには、錠前のようなものがついていた。

「本当だ…」

どうしてあんなものが…」

「開けるには鍵がいる。」

今の声が出た場所…秘密の部屋にある。

でもここからは入れない。一度現実に戻らないと。」

「現実には？　なんでだよ？」

「部屋は隔離されてる。入り口は現実にはかない。」

「んなことまでわかんのかよ…」

それ、お前の能力か何かか？」

「…わからない。ただ感じた。」

「ええ…」

「…もしかしたら、この鳥かこの扉は王の心の鍵で守られてる…ってことかもな。」

「モナちゃん？」

「ソフィーの言う通りなら、さっき聞こえたのは王の記憶…『重要な記憶の断片』ってことだ。」

その記憶が、王の心の鍵となって、この扉を塞いでいるんじゃないやねえかってな。」

「なるほど、重要な記憶か…」

「鍵なら、見つからないように隠すのも当然だろう。」

「理屈としてわからなくもないが…」

そんなことがあるものなのか？」

「いや、今のはワガハイの予想だ。こんなの初めてだからな…」

「もしかしたら、それもパレスとジェイルの違いなのかもしれないわね。」

「その秘密の部屋、ここからじゃ行けないんだよな？」

「そうだ、現実でその場所を探さないで。」

「それがどこかは分かる？」

「そこまではわからなかった。」

「んー、ならさっきの言葉にヒントがありそう？」

「うーん、なんか…」

「イジメっぽい感じしなかったか？」

「男子に色目…学校かな？」

「そうかも！」

「冴えてるな、パンサー！」

「…私も学校で、似たような事言われてたから。」

「パンサー…」

「そうすると、アリスが通っていた学校に『鍵』があるということかしら。」

シノビは既に調べてるの?」

「まあ、それは外で話そうぜ。

予告もしなきやならないしな。忙しくなりそうだぜ。」

「だね。ここで話すのはそこそこ危ないし。」



「それでツバサ。何か情報は持ってないのか?」

「あー、それなんだけど……」

…知らない。」

「はあ!?! 翼でもわかんねえのかよ!?!」

「え? 芸能人の通ってた学校なんて、ネットですぐに出ない?」

「いや、それがそうじゃないんですよねー。

所属事務所には勿論ないし、掲示板にもない。

裏情報サイトにも載ってないし、あつたとしてもファンの妄想で書いたフェイク。

全滅ですネ。」

「マジか?」

いくら改名してたって、痕跡くらいありそうなモンなんだけどな
…」

「翼が集めた情報でもないとかあんのかよ…」

「というか、不自然に情報が消されてるって感じだったかも。」

「そうなるよ、誰かが意図的に隠してるってことになるな…」

「意外なところでつまづいたな…」

アリスの学校がわからなければ、隠された部屋とやらも見つけようがない。」

「で、でも、ネットの情報全部消すとか普通できなくない？」

「うーむ…何か他に調べる方法は…」

「マコちゃんのお姉さんに、調べてもらうのとかどうかな？」

「真さんのお姉さん？」

「お姉ちゃんは元検事なの。今は弁護士をしてるのよ。」

「へえ…」

それなら、伝手を使えば行けそうですね。」

「確かにな。頼めないか、マコト。」

「それはいいけど、なんて説明したものかしら…」

個人情報保護されるべきものだし、そう簡単に許してくれるとは思えないけど…」

「まあ意味わかんねーよな。」

アリスの通ってた学校調べてくれとか…」

「下手したらこっちが尋問されるぞ。」

『答えなさい!』って。」

『『どうなの!?!』とか訊きそう…』

「それなら、尋問室でよく言われたぞ。」

「マジすか…」

『なるほど、終アリスの学校ねエ。』

聴き慣れてない声。

振り向くと、昨日見た胡散臭い人がいた。

「お、お、お前はこの前の…!」

「胡散臭い公安の奴。」

「胡散臭かねーだろ…いや、臭いのか?」

「はい、とつても。」

「えらい良いようだな…」

つか笑顔で言うなつての…」

「…なんか用かよ?」

「そう邪険にするなつて。」

お前らを助けに来てやったんだぜ。」

「助けにつて…」

「柊アリスの母校が知りたいんだろ？」

「ああ、そうだ。」

「だがそれがわからない、と。」

まあ、そうだろうな。

柊アリスについては、どういう訳か情報が少なくてな。特に、デビューする前の事はキレイに消えちまってる。

…で、困ってるであろうお前らを、この俺が助けに来てやったってわけだ。

公安の俺ならアリスのことを調べられる。

どうだ、協力してほしいだろ？」

「あ、いつす。自分らで何とかするんで。」

「うむ。わたしもやるから、もう少し時間くれれば、必ず見つけてみせる！」

「だよな、俺の力が…」

ってちよつと待て！

せつかく協力しようつてんだぜ？　ありがたく受け取れつて…」

「すみませんね。警察は信用できないので。」

「だから笑顔で言うな笑顔で…つてお前かよ！」

はあ…わかったよ。まずは信用を得るところからだな。

…柊アリスは、お前らの先輩だ。」

「…はっ。」

「洗星高校かつ!？」

「……………」

「あー…いや、お前以外の先輩だ。」

「秀尽学園…って事!？」

「ごいつは貸しにしとく。ちゃんと返せよ?」

「そう言っただけは去っていった。」

「…行っちゃった。」

「…敵が味方か、読めない男だな。」

「つか、なんでアリスの通ってた学校知ってたよ?」

「警察もアリスをマークしてるってこと…?」

「ありえるな。だとすれば…」

「信用には値する…ってことか。」

「ま、試してみるしかねえか。」

「学校からなら、隠し部屋に行けんだろ?」

「そのはずだ。グニヤツて中に入れるはず。」

「りよーかい。グニヤツとな。」

「とにかく、現地に向かしましょう。
話はそれからよ。」

「ああ。行ってみるぞ…『秀尽学園』に。」

T o B e C o n t i n u e d …

#9 Lock Keeper

地下鉄に乗り、秀尽学園の前に到着。
見たところ、夏休みらしく静かだ。

「…来たはいいけどよ、本当にここでいいのか？」

「…間違いない。」

鳥かごに触れた時と同じ感覚がする。」

「まさか、こんな形で母校に戻ってくるなんてね…」

「ああ、懐かしいな。」

「ホントだね。まだ半年くらいしか経ってないのに。」

「…でも、アリスが秀尽の出身だなんて全然知らなかった。」

「私もよ。」

生徒会長として、秀尽出身の有名人は把握していたつもりだけど…」

「…消したい過去、だったのだろう。」

「と言うと？」

「鳥かごで聞いた声…」

悪意に満ちた言葉の刃と、悲痛な叫び。

イジメをする側だったのか、される側だったのか、それはわからな
いが…

ここでの体験は奴の心に深く大きな傷を残した。
その存在さえ許さないほどに。」

「…秀尽がその舞台だった、というわけね。」

「……………」

「とにかく、鳥かごを開ける鍵を探しますか。」

ソフィア、ここからどうすればいい?」

「隔離されてても、ここは渋谷ジエイルだ。」

E M M Aにキーワードを入れれば、同じように入れるはずだ。」

「…よし、行ってみるか。オマエら、準備はいいか?」

「うん、行こう!」

キーワードは『ワンダーランド』!」

『キーワードが入力されました。ナビゲーションを開始します。』



ジエイルに到着した。

…のだが、様子が違う。

教室になっていて、窓の外には檻がある。

「()…教室か…?」

「これが学校というやつか?」

ネットで見たのとずいぶん違う。」

「いや、現実とは全然違ってるからね？」

「かなり認知の歪みが強い。一体どうなって…」

「…！」

ちよつと、あれ…！」

パンサーが示した先には机の山。

そこから、秀尽の制服を着た人が現れた。

「ヒ…！」

ゆ、幽霊…!？」

『いつまで泣いてる訳？』

「まあ同情買おうとして。彼のことをそうやって騙したんでしょ？」

『ち、違う……。私はそんなこと…』

「な、何…これ…?」

空間中に広がる声。僕らの疑問をよそに、話は続く。

『うっぎ。ほんとキモい。』

「なんであんたみたいなのがこのうのと生きてんの？」

「あんたなんかさ、死んじゃえばいいのに。」

机から降りる「何か」。

近づいたかと思えば、突然体を震わせー

「なんだこいつ…!？」

現れるは、二対の腕を持つ怪物だった。

「気をつけろ、来るぞ！」

『あんたがいると空気悪くなるんだけど。

みんなのメーワクなの、分かんない？』

「クソツ、どうやってんだよコイツ!?

いきなり姿が変わりやがった！」

「というか、ここどこ…?」

なんか、牢屋の中っぽいけど。」

「話は後！ 来るわよ！」

「みんな、気合い入れてけ！」

二対の腕をもつ回転は、それぞれの手に斧を持って襲い掛かる。それと同時に、ジェイルにいたシャドウも現れた。とにかく、アリスへ色々吐くコイツを仕留めなければ。

◇

『あんた、告白とかしたんだって？』

ほんとキモい、キモいキモいキモい！

色気づいて調子乗ったの？ あんたが彼と釣り合うわけないで

しよ？

だから私が奪ってあげる。

アハハハ、アハハハハッ！』

「奪う…？」

恋愛のもつれが、いじめの発端となったということか。」

「こんなの一方的すぎ…！」

ただのアリスへのひがみじゃん！」

「ホント、聞いてるだけで吐き気がしそう。」

「敵、弱ってきてるぞ！ いじめっ子をこらしめてやれ！」

「了解！」

…イルジメ！」

その名を呼び、背後に立つイルジメ。

放つ光で怪物はふらつき、その間にイルジメと共に早業で切り刻む。

「さあ、締めだ！」

イルジメは仰々しく刀を抜き、怪物を一刀両断。

奴は倒れていった。

「決まったあ！」

「やっと倒せたぜ…！」

「待て。何か様子が…！」

霧散していく奴から金色の豪華な錠前が現れ、床に落ちる。すると突然ヒビが入り、砕け散った。それと同時に、地面が暫く揺れていった。



「今の地震みたいなの、一体…?」

「…今ので鳥かごの施錠が解けた。これで中に入れるぞ。」

「マジかよ!?!」

「さっきのヤツが『鍵』を持ってたみたいだ。」

「さしずめアレは、鍵を守る番人ということか。」

「番人…アリスの記憶…鳥かごを開ける鍵…」

「アリス自身じゃなく、番人が鍵を…?」

「モナ…?」

「なーにブツブツ言ってるんだよ。」

「あ、ああ、いや…」

「パレスとは色々違うと思ってな。」

「確かに、パレスにはこんな部屋も、鍵を守る番人も居なかったよね…」

「…先に進むほど謎が増えてる感じね。」

「てか、ソフィーがいなかったらここに辿りつけてないですよね。」

「私は役に立ってるか？」

「勿論！」

「褒められた。♪」

「ま、アレコレ考えんのは後にしようぜ！

これである中にも入れるようになったんだ。」

「そうだな。ワガハイたちがやるべき事は一つ。

予告状を出して、ネガイを取り返すぜ！」



夜、ルブランの屋根裏で作戦会議開始。

「…さてと、後は予告状出すだけだな。内容どうするよ？」

「盗むのは、アリスに『改心』された人たちのネガイでしょうか？

シンプルに、『お前が奪ったネガイを頂戴する』とか？」

「ああ。オタカラと同じ理屈が通じるなら、それで実体化するはずだ。」

「実体化すれば盗み出せる。

盗み出して、被害者に届けてあげれば…」

「みんな、元に戻るんだよね。」

「ねえ…そしたらアリスはどうなるのかな？」

「そりや当然、改心して罪を告白すんだろ？」

「いや、そうとも限らない。」

今回盗むのは、王が人から奪ったネガイだ。
パレスでやったように、本人の欲望…オタカラを盗むわけじゃない。

アリスが改心するかは、正直わからん。」

「被害者を助けたところで、アリス本人の改心がないとまた改心が発生していくってことか…」

「だが予告が成功すれば、ネガイが現れるのはあの『鳥かご』の中だ。
そこでアリスのシャドウと出くわす確率が高い。」

「派手に鍵を壊したしな。」

「説得するなり、拳で語るなり。」

シャドウを通じて改心させる機会はあるんじゃないか？」

「よし、なら正面から行きましょう！」

…あ、ごめんなさい。新入りが何言っただって感じですよね…
みんなを危険な目に合わせちゃいますし、もし良ければ、ですけど。」

「別にわたしたちは大丈夫だぞ！」

…でも、突然どうしたんだ？」

「アリスを改心させて、この連鎖の元を断ちたいってのもある。

それと、アリスを救ってやりたいんです。

テレビで言ってた『誰かの光になりたい』って言葉も、イジメを受けてた過去があるから言える本音だって思ってる。

それに、です。

あの部屋の光景、もしかしたらアリスのトラウマなんじゃないんですか?」

「トラウマ…?」

「過去の辛い経験や出来事で生まれた心の傷…かな。」

「このころの…きず…」

「そのトラウマで心が歪んじゃって、ジエイルが出来たんじゃないのかって。」

モルガナから教えてもらった理屈でパレスとやらが出来てるなら、そんな気がするんです。」

「トラウマで心が歪み、ジエイルが…

ありえない話じゃないな。」

「だが、それが、今のアリスの行動とどう結びつく?」

「私の考えだけど…多分、自分を蔑んでたタイプの女の人に、復讐してるつもりなんだと思う。」

「目の前で男奪って見せるのが復讐かよ…

エグいな…」

「翼の場合はちよつと違つてるけどな。

だが、それにしちや規模デカくないか？

被害者の数、半端なかつたぞ。」

「多分、邪魔する人間がいなくてエスカレートしていったんじゃないんですか？

王になったことで、歪みがさらに増した…ってのもあるかも。」

「私も、翼くんと同じでアリスを何とかしたい。

心が歪んだのなら、思い出させてあげたいの。誰かの光になりた
いって気持ち…

結果がどうなるかわかんない。わかんないけど…」

「ええ。誰かが目を覚まさせてあげないと！」

「アン殿、ツバサ…」

「…やろう。」

「わかつたわ。」

「だが、もし戦いになったとしても、命を奪うことだけは避けなくては。」

「うん、それだけは絶対にダメ。」

「説得できりや一番なんだけどな。」

「それでですけど、今回は僕に予告状を書かせてくれませんか？

間接的なアリスの被害者として、バシツと言ってやりたいんです。」

「それなら、私にも。」

「2人とも、頼んだ。」

「予告状か…」

私に手伝えることはあるか?」

「じゃあ決め台詞はソフィアにお願いするね!」

「うし、んじゃ後は、どう渡すかだな。」

「ふっふっふー、そこはわたしに考えがある。」

「へえ。どんな?」

「そこは後でだぞ、翼!

せっかくの怪盗団復活祭りだ。ド派手にいかなきゃな!」

とりあえず、予告状の内容を杏さんと考える。

決行は、明日の夜だ。

To Be Continued…

#10 Rabbit in Wonderland
d

色欲に溺れし大罪人、終アリス殿。

偽りの光で人心を弄び、愉悦の為に傷つける。

そんなヤツを、我々は許さない。

キサマが奪った人々のネガイ、今宵我々が頂戴する。

心の怪盗団より



—7月29日(土)—

フタバ砲・リターンズとやらで渋谷をジャックし、予告をした直後。
警戒度の異常なまでの高さをひしひしと感じながらも、鳥かごの前
に到着した。

「おお…コイツは…」

「デカっ！ 何だあのサイズ！」

鳥かごの内側、真上にはそれは巨大な宝石が。

予告の効果を感じると同時に、アリスがそれだけ多くのネガイを
奪ったのだとわかる。

「よしスカル、さっそく運び出せー！」

「いやいや、さすがにデカ過ぎんだろ…」

「これ、どうします…？ あのサイズ、盗むどころじゃないですよ…」

「どうしたものかしら…」

と、鳥かごの奥から機械音が。

「何だ…？」

下から現れるは玉座。

鎮座するのは勿論――

「あいつは…！」

「柙、アリス…！」

「やはり…こうなるか…」

「…ダメだよキミたち、勝手に入ってきちゃ。

私の集めたネガイ、どうしようって言うのかな？

キミ、確かジョーカーくんだよね。それにその銀髪クンも。

私のものになりに来てくれたのかな？」

「ネガイを頂戴しに来たぞ。」

「ああ。それに、お前の所有物になるとでも思ってたの？」

「へえ、やっぱりこれ盗もうって言うんだ。」

「ヒイラギアリス。オマエがやってきた悪事、すべてお見通しだ！」

「強制的に人の『ネガイ』を奪い取り、傀儡のように従わせてきた。」

「無茶な告白を強要し、何の罪もない男女を弄んだ。」

「自分の店まで開いて、詐欺みたいなこととして貢がせてただろ！」

「偽りの『改心』を操り、人々の心は無残に踏みにじったこと……
これ以上看過できません！」

「あんたの歪んだ心、怪盗団が叩き直してあげる！」

「高卷さん……とつてもキレイな人。」

あなたには、きつとわからない。私がどんな気持ちで生きてきたか。」

「秀尽でされた事を言ってるのか？」

「……！」

オマエ……そこまで知ってて……！」

「全部、知ってる。あんたがイジメられてたことも。惨めな思いをしたことも。」

でも私たちは……！」

「ああ、そうなんだ……知ってるんだ……」

変わったと思っても、何処までも過去が私を追ってくる……！」

惨めだよ……！ 本当に惨め……！」

でも、もういいんだ。この力があれば、何もかも手に入る！

欲しかったもの……ぜーんぶ！」

みんな、私のモノになっちゃえ!!!

強欲に溢れたその宣言。

アリスはその身体を豹変させていく。

身体は長身に。

腰には白い球体が張り付き。

長い耳と、付随する王冠。

作りモノのような顔。

本気を出す彼女の姿は、まさに狂気マッドラビットの兎そのものだった。

「なんだコイツ…ウサギみたいな姿に化けやがった!？」

「これも、『不思議の国のアリス』というわけね…!」

『さあ、急がなきゃ。時間に遅れちゃうよ!』

私がみんなを、ステキな場所に案内してあげる!』

「ステキな場所?」

「考えなくていいぞ、ソフィー。」

「うん。ドーせ『あの世』とかだろうし。」

アリス…お前の目、絶対覚まさせてやるからな!」

高らかにアリスの笑い声が鳥かごの中に響く。

いつの間にかライブ会場のようになっていた鳥かごの中で、戦いの火蓋は切られた。



アリスにダメージを与え続け、やつとかと思った頃。

『…ねえ、どうして邪魔するの。せっかく私が幸せになり始めたのに。あなたたちも私を否定するの？あの女みたいに…』

「そうは言っていない。」

僕たちはただ、アリスに大切な事を思い出してもらいたいだけで『ウルサイ！』

……！ 説得はやっぱり無理か…」

『うるさい…うるさいうるさいウルサイ!!』

惨めなのは、嫌アアアア!!』

ステツキをへし折ったアリス。

奴はそのまま四つん這いになり、再び襲いかかる。

「なんか雰囲気が変わった…？ みんな気をつけて！」

『みんなお仕置きしてあげる！』

まずは、口答えしてきたオマエだ！』

「つて、狙ってんの僕かよ！」

みんなを巻き込まないように離れ、駆ける。そして追うアリス。ダッシュの速さ比べなら負けてしまっただろう。だが、亀でも兎に勝つ要素など幾らでもある。

「イルジメ！」

『グッ、眩しっ…』

要素1。

怯むアリスだが、やったのは単純。背後に向けてペルソナの力を行使しただけだ。

亀だった今の僕には、兎に抗える力がある。

「シノビ、ナイスだぞ！」

「威を示せ、ゾロ！」

「踊れ、カルメン！」

要素2。

目眩でふらつくアリスへ、パンサーの火炎とモナの疾風が降りかかる。

そこへ、他の仲間も追撃を仕掛けていく。

今の僕には、共に戦う仲間がいる。

目眩が解けたのかこちらを向くアリス。様子からして、まだピンピンしてるよう。

『高卷さんにはわからない！』

蔑まれて、馬鹿にされて、否定されるのがどんな気持ちか…

自分がカースト上位だと思いついてる人ほど残酷なんだよ。イジめられて苦しんでる人がいても、知らん顔して笑ってる…

だから教えてあげるんだ。『あなたたちなんてゴミ同然だ』って。男にすり寄ったって逃げられないよ。裏切らせて絶望を与えてやるの。男の子はみーんな、私のことが好きになるんだから！』

喋り切った後でも手は止まらない。

その手を爪へと変え、何度も何度も振り回してこちらへと向かう。



攻撃を与え、与えられをまた繰り返した頃。
兎は、目に見えて疲労を見せ出した。

『ぐっ…私は間違っていないはず…なのはどうして…』

「アリス弱ってるぞ！ あと一歩だ、みんな踏ん張れ！」

『私を蔑んでた女たちに思い知らせる…男をみんな、私のものにして…！』

「…アリス、お前はそれがやりたかったのか？ 馬鹿言え！」

「私は覚えてる、あんたが言ったこと。思い出して、アリス！ あんた、本当はどうしたかったの！」

『私……私は…！』

混乱しだしたらしく、攻撃の手が雑になってきている。
それを見逃さないわけがない。
再びアリスを包む、カルメンの炎。
それによってダウンするアリス。

「今だ！ トドメを刺せ！」

斬撃、銃撃、打撃。

持てる限りの力を発揮した総攻撃。
奴から奪い取るは――

「バイバイ！」

紛れもない、勝利。

『そ…そんな……』

アリスは崩れ落ち、そして人の姿に戻っていった。

「ウソ…どうして私の力が…」

「変わったと思ったのに…もうイジメられる側じゃないって思ったのに…！」

「…もうやめなよ、アリス。これ以上やっても、自分が惨めになるだけ。」

「あんたに何がっ…！」

「アリスの気持ちを、パンサーはわかってるぞ。」

「……………」

…やっぱり勝てないね。高卷さんみたいな人には。

昔からそう。カースト上位の人には頭が上がらない…」

「……」

「私だって、変わろうとした…」

イジメられて、蔑まれて、惨めな自分をなんとか変えようって…

デザインを勉強して、頑張っつてここまで来た…

それなのに…あの女がまた現れて、私の過去をみんなに言いふらし始めた。『イジメられてた惨めな豚だ』って…!」

「……」

「だから奪ってやった! 男も、友達も、何もかも!

それでもまだ許せない…!」

あの女も、陰で笑ってた奴らも、見て見ぬフリした連中も!

みんなみんな、許せない…!」

「アリス…」

「これが…こころの傷…」

「この力があれば、みんなに復讐できる。だから…」

「…だからイジメる側に回ったって訳?

バカ! それじゃ同じじゃない。あんたをイジメてた奴らと何も変わらない!

それでいいの? そんな奴らと一緒にいいの?

あんたはなりたかったんじゃないの!?

誰かの…ううん、自分自身の光に!」

「……」

「平気で人を傷つける連中の言葉になんて負けないで…!」

「高巻…さん…」

そうだ…私、助けたかったんだ…

私自身を…どこかにいる、私と同じ想いをしてる子を…

なのに…私…」

「…それでいいんだよ、アリス。

僕は、お前がどんな過去を持っていようと赦す気はない。

実際、母さんや他の人をネガイを奪った。巻き込まれた僕みたいな人のこと、考えてたのか？」

「……………」

「謝りたいなら、謝りなよ。」

そして自分がしてきたことを償って行って、また一からやり直していくんだ。

嫌な過去が迫ってきたなら、追り返しちやえばいい。

そうやってこそ、アリス自身の…誰かの光に、なれるんじゃないのか？」

「…！」

そうだね。私、みんなに謝って、一からやり直すよ。」

「うん…！」

きつとあなたなら立ち直れる。私もたくさん悩んだから。

でもね…ここにいる怪盗団のみんなや、親友のおかげで、歩き出せた。

あなたはひとりじゃない。自分を取り戻せたら…私と友達になる？」

「高巻さんと…？ いいの…？」

「もち！」

だって私…同じ夢を持つてる終アリスが大好きなんだから！」

「う…ありがとう…」

銀髪くんも、ごめんね…

それと。名前…教えてよ。」

「…服部、翼。」

「服部くん…」

キミも…ありがとう。

私、還るよ。自分の居場所に…

そして、今度こそ…」

そう言うと、アリスは消えていった。

「…本名言っちゃったけど、大丈夫ですよね？」

「大丈夫。こつちで起こったことは、現実のアリスは覚えてないから。」

と、地面が大きく揺れた。

鳥かごは崩れ、ネガイの塊は碎け散る。

瓦礫のみが残る705の上から、雨のように降っていくネガイ。それは持ち主のもとに戻っていき、ジェイルから消えていった。

◇

スクランブル交差点に戻る。

モナたちが言うには、パレスとやらと違って、ジェイル自体が消えてないのが気がかりらしい。

「…すごいな。」

「どうしたのソフィア？」

「怪盗団の言ってた通り、柊アリスは変わった。ただ倒していたら気づけなかった。」

「こうなるって、わかってたのか？」

「そんなことないわ。」

「でも、変わるのが人だから。」

「変わるのが…人…」

「…人の心って難しいね。」

何かを乗り越えて強くなれたかと思えば、ちよつとしたきつかけで揺らいだり。」

「…確かに難しい。」

「人のこころ…謎だらけだ…」

「まあ、謎の量に関しちや、ソフィーも負けてないけどな。」

「いや、私は…」

「人の良き友人、でしょ？ 覚えてるよ。」

「わかってるな、シノビ。」

「そりゃあね！」

「フフツ、それじゃあ戻りましょうか。」

現実のアリスがどうなったかも確かめたいし。」

「うん。早く帰ろう！」



現実に戻って帰宅したら、ソフィアが口を開いた。

「…なあ、翼。」

杏と翼はあの時、アリスのシャドウに怒っていたな。だが最後は晴れやかな顔をしていた。

何故だ？ アイツに怒っていたんじゃないのか？」

「…何でだろうね？ 本音をぶつけたから…とか？」

「そうなのか…」

『怒り』というのは、人を傷つけるだけじゃない。人を救うこともできるんだな。」

「いや、それは場合によるかも。」

「救えないことだって、きつとあると思う。」

「だが、アリスは救われた。」

誰かが間違っていたら怒って、正しい道を教えてやることができる。人のこころは不思議だな…

お陰で貴重な経験を積むことができた。ありがとう、翼。
これからもよろしく。」

「ん。今後ともよろしくー！」

と、スマホが鳴った。

父さんからの電話らしいが…

「もしもし、父さん？」

『翼、突然ごめんな。実は母さんがー』

To Be Continued…

#11 Closing Time

—7月30日(日)—

『全部：私がした事なんですっ！ 周りの人たちは何も悪くないんですっ！』

「ごめんなさいっ…ごめんなさいっ!!」

アリスからネガイを盗った翌日。

いつぞやの修羅場が起きたあのスタジオで、アリスはそう言っていた。

改心が成功した証のようなものだ。

その現場を、僕たちはルブランでテレビ越しに見ていたわけだが。

「アリス…」

「…こりゃ荒れるだろうなあー。怪盗団絡みのネタだし。」

「とにもかくにも、これで一仕事終わったな。」

「ええ、パレスと状況は違ったけど、本人が改心したことは間違いないよね。」

「ネガイ盗られてた連中も元に戻ったみたいだぜ。」

ネットに書き込まれてる。」

「そうだ、翼くんのお母様は大丈夫なの？」

「ええ、ゆうべに父さんから連絡が来て。」

突然元に戻って、嬉しいと同時にちよつと慌ててましたね。」

「アリスに全財産を貢ごうとしていた息子が目を覚ましてくれた。」

怪盗団ありがとう』…」

『金返せ』って言ってるのもいるな。

それはわたしたちに言われても困る。」

「自業自得な人もいそうだけどね。」

「何はともあれ、ミッション・コンプリート。」

「…アリス、これからどうなるのかな？」

「今までみたいに芸能界でやってくのは難しいかも。すごいスキャンダルだし。」

「結局、報いを受けるのは自分ってことか…」

「でも、アリスが初心に帰れたなら、また一からやり直せるかと。」

長く時間が経てば、今度は違う形かもですけど誰かの光になれるはず。」

「そういうえば、本人にも事件の事聞かないとね。何か新しい情報が得られるかもしれないし。」

「そうは言っても、まず会えるかどうか…」

かなりの騒ぎですし、普通に考えたら不可能かと。」

「…相変わらず面白い話してるな。」

いつの間にかルブランの扉が開き、見えたのは黒いスーツ、そして特徴的な髭と髪。

「よっ。元気にしてたか？」

「まーたお前か、オッサン！」

「オッサンなのは否定しねーが、地味にへこむな…
それよりお前ら…早速やつてくれたな。」

「…何のことかしら？」

「とぼけるなよ。俺の情報、役に立っただろ？」

「そうだけど…」

「そいつはよかった。いい返事も期待できそうだな。」

「返事って…」

「それで、何の用ですか？」

アリスは僕らが何とかしたから、濡れ衣は晴らせたのでは？」

「あー、一個ずつ答えさせてくれ。」

まず用件だが、例の件の返事を聞きに来た。俺とお前らとの『取引』
のな。」

「だからテメーら警察なんかと…！」

「じゃあさらに特典も付けてやろう。アリスに話を聞いてきてやつて
もいいぞ。」

お前ら、アリスに会って確かめたいことがあるんだろ？ 俺なら聞
き出せる。」

で、濡れ衣の件だが…それがそうでもないのさ。」

「どういうこと？ 事件はもう終わったはずよ。」

「終わりなんてとんでもない。この『改心事件』は全国各地で起きている。

全てアリスの仕業なんてことはあり得ない。それじゃお前らの疑いは晴れないよな？

それに加えて今回のアリス騒動。あの予告で世間は熱を帯びてきた。『全国の改心事件は全て怪盗団の仕業だろう』って話が、警察でも盛り上がってるぜ？

お前ら、相当やばい立場に置かれてるってわかってるか？」

「ふざけんなよっ！ 俺らが何したってんだよ！」

「落ち着けよ、だからこそその取引だ。」

雨宮。俺は今すぐお前をしょっ引くこともできる。

そうしないのは、別に真犯人がいると踏んでるからだ。

そいつを捕まえるために、俺に手を貸してくれ。」

「…何故、真犯人がいると考えるんだ？」

「刑事の勘ってやつだな。まあ俺は公安だが。」

去年怪盗団の起こした事件と今回の事件とじゃ、犯行思想も動機も違いすぎる。

これは2つの別種の事件。それが俺の結論だ。」

「…：少しだけ、時間をもらえない？ みんなで話し合いたいから。」

「んじや、外に出てるぜ。話がついたら呼んでくれ。」



「彼が外に出たのを確認。最初に口を開けたのは祐介さん。」

「…アテが外れたな。」

「アリスの告白で濡れ衣も晴れると思ったが…」

「全国各地…改心事件…」

「翼、何か知ってんのか？」

「…そうだ。」

「そういえば、アリス関係の調査をする時、似たような事例がないか調べたことがあります。」

「突然人格が変わるようなことは地方でもチラホラあったんですけど、まさかその事…？」

「ニユースにすらなっていないので世間の認知度も低かったんですが、公安がそれに目をつけてるとか…ですかね。」

「あのオッサンの話、本当ってことかよ…」

「どうしよう…全部私たちのせいにされてたら、濡れ衣なんて晴らせない。」

「だいたい、わたしたちの改心とあの改心は別物だろっ！」

「本当にアリスのような『改心事件』なら、ジェイルが絡んでるのは間違いないだろうな…」

「アリス以外にも王がいるのか…？」

「どうする?」

こうなってしまうては、あの男の話に乗るのも手ではあるぞ。」

「あんなヤツ信用すんのかよっ!?!」

「でも他に方法なくない?」

少なくともアリスの情報は本当だったし…」

「レン、どうする?」

「ここは取引に乗ろう。」

「私もそれがいいと思う。」

「待て。取引するとして、どうやって説明するつもりだ?」

ワガハイたちのやってることを理解させるには、異世界のことも教えなきゃならない。」

「させるしかないだろう。でなければ、蓮の身が危うい。」

「でもよ、異世界だぜ!? ジェイルだぜ!?!」

頭の固い警察がそんな話信じんのかよ!」

「だが…」

「…連れていくしかないわね。ジェイルに。」

「ちよ、ちよっと、本気!?!」

「マコちゃん、大胆…」

「それ以外に、逮捕を免れる方法があるかしら？」

出せるカードはテーブルの上に。今はそれが最善だと思うわ。」

「なるほど。ジエイルの事は事前に説明して、入り口の近くだけにすればいいと思う。1人くらいなら守れるだろうし。」

僕がキヤパギリギリでどうにかなったんだし、あの人が力に目覚めるようなことがなければ、頭はどうにかなることは無いのでは？」

「蓮、お前はどう思ってるの？」

「大方同意だ。他に方法はなさそうだしな。」

「…わかった、取引しよう。」

「吉と出るか凶と出るか…」

「クソ、こうなったら腹くくるしかねえだろ…」

「じゃあ、呼ぶわよ。」

…話は終わったわ！ 入ってきて！」

彼も律儀に応え、店内に入ってくる。

「…なんだ、意外と早かったな。」

じゃあ、返事を聞かせてもらおうか。」

「貴方を連れて行きたい場所があるわ。私たちについてきて。」



渋谷を經由し、ジェルに到着。

異様な雰囲気は変わらないが、鳥かごがないだけ幾分かはマシに見える。

「…おい、こんなところに何があるってんだ？」

そう言いつつも彼は目を開ける。

「っておい…なんだこりや…冗談…だろ？」

「冗談なんかじゃないですよ。」

目の前の何もかもが真実。薬物検査なんて、要らないでしょう？」

「ま、まあ…そうだな…」

「ってどうしたっ!? 何のコスプレだっ!？」

「…ま、最初はこうなるわな。」

「これが私たちの怪盗服姿ね。」

「は…ははは…勘弁しろって…何がどうなって…」

「質問か？ ここはジェル。」

「オマエは今、ジェルの中にいるんだ。」

「いや、お前だれ!？」

「私は『人の良き友人』のソフィアだ。よろしくな。」

「よろしくな…って…」

「落ち着けよ、ゼンキチ。いい大人がみつともねーぞ。」

「あ、ああ…：そうだな…：取り乱してる場合じゃ…
…：って化け猫!？」

「化け猫じゃねえよ！　ワガハイはモルガナだっ！」

「これで納得してもらえた？」

「私たちの話がすべて本当だったってこと。」

「なんだ…：昨日飲み過ぎちまったか…？　つか夢だよなコレ…：現実なわけねえ…！」

「大丈夫かよオツサン？」

「安心しろ、ただの錯乱だ。」

「ただの錯乱って…！」

「全然安心じゃないような…！」

「にひひっ、刺激が強過ぎたか！」

「仕方ないわね…：いったん帰りましょう。」



全員揃って帰還したわけだが。

「ありえねえ…マジでありえねえ…」

意味のわからん事件追いすぎて頭おかしくなっちゃったか…?」

まあ、ご覧の通りである。

「ははっ、さすがにショック受けてんな。」

「うむ、脳のキャパ超えてオーバーヒートしたんだろうな。」

「説明すれば何とかなると思ったけど…無駄だったか…」

「俺たちも初めはああだった。…初々しいな。」

「しつかりしろ、オッサン。」

「やれやれ…いつまで呆けた顔してんだ。しつかりしろ、ゼンキチ。」

「ああ? ああ、そうだな…しつかりしねえと…」

「ってなんで猫が喋ってんだ!？」

「まさかお前、さっきの化け猫か!? やっぱ化け猫じゃねえか!」

「『化け』でも『猫』でもねえーよ!

モルガナって言っただろーが!」

「貴方は異世界で、モルガナが喋ると認知した。

だからこちらでも言葉がわかるの。」

「認知すりゃ猫が喋んの…?」

「はは…そりゃ大変だな…ははは…」

「現実を受け入れるのに、もう少し時間がかかりそうだね…」



「…とりあえず、取り乱して悪かったな。」

話は大体わかった。いや、さっぱりわからねえが…受け入れる努力はする。」

「取引をするからには、私たちは共犯関係よ。」

互いに信頼を裏切らないこと。それが最低限のルール。」

「…若いのにしつかりしてんな。」

わかったわかった。俺もお前らの信頼には応えるさ。」

全国の改心事件解決に協力してくれ。その代わり、俺はお前らを守る。」

お前らが俺に協力する限り、警察には手を出させない。約束だ。」

「取引成立だな。」

「ああ、よろしく頼むぜ。」

…じやあまあ、早速で悪いが、事件調査の協力依頼だ。」

今現在、改心絡みの事件が起きてる都市として、公安は札幌をマークしてる。」

お前たちには、8月8日までに札幌中央市に来て欲しい。」

「何故8月8日に？ そっちの都合とか？」

「半分当たり、半分外れだな。」

『改心』の力を使ってるらしい容疑者が、その日まで海外出張で不在な

んだとき。

帰国するタイミングに合わせて、こつちも調査を開始する予定なんだ。」

「なるほどね。」

「その札幌の容疑者が、アリスと同じく王である可能性が高いということか。」

「そうなるかもな。だとすれば、お前らに頼むのがベストだろ。」

「目的地は北海道の札幌中央市か。ちよつとした旅になりそうだな。」

「あー、1つ忠告だが…」

飛行機や電車、公共交通の類はなるべく利用しない方がいい。基本は自分たちの足か車を使え。」

「どうして?。」

「アリスの件でお前らは怪盗団を再び名乗った。その話は当然、他の王の耳にも入る。今ネガイを奪ってる王からすりゃ、お前らは邪魔だろ。」

「警戒されて当然だな。サイアク、消しにくるかも…」

「何処の誰が洗脳されてるかわからねえ。」

もしそれが飛行機のパイロットだったら…」

「け、けど! 飛行機がダメなら、どうやって札幌まで行くの?。」

「とりあえず車にしとけ。それが一番安全だ。」

「いや、警察が用意してくんねーのかよ？」

「悪いがこいつは極秘調査だ。そういう協力はないと思つとけ。ああそれと、アリスの事情聴取は俺に任せろ。後でお前らにも共有する。」

「んじゃ、そういうことでよろしく頼むぜ。」

「よろしくな、ゼンキチ。」

「あ、ああ…化け猫呼ばわりして悪かったな、猫。」

「反省してんのかコラ！」

長谷川さんはそれを言うなり去っていった。

「…大丈夫、お前はまだ正気だ。そうだろう長谷川善吉…」



夜、双葉と路地裏を歩く。

EMMAやジェイルのことを話し合い、マスターに掛け合つて車の手配をしてもらった後だ。

「双葉ー。」

「何だー？」

「いや、一つ思ったんだけどさ…」

僕たちの取引、なんだけど。」

「それがどうかし……あつ」

「多分察しの通り。」

僕はアリスへの復讐を實質成し遂げた訳だから、取引も終わり……だよね。」

「じゃあ、わたしと翼も、友達じゃなくてただの仲間ってことになる……のか?」

「……そうなる。」

でもだけど、僕は双葉とは取引とか関係なく、『友達』でありたいって思ってる。双葉がどう思ってるのかによるけど。」

「わたし……も……」

わたしも、翼とは友達のままでもいい。

仲間でもあるけど、それ以前に。」

「ふふっ、そっか。」

なら、今後ともよろしくってね。」

「ああ、よろしくな!」

……それならわたしも、『友達』としてまた色々教えるからな!」

「おっ、マジ? なら、時間あったらお願い!」

◇

双葉と雑談をしながら帰り、帰宅。

「翼。翼の父親から電話だ。」

「ありがとう。」

…もしもしー？

ああ、確かにそっかー。

いや、続けようかなって思う。

何やかんやこつちの方が楽しいし、予定も自由に組みやすいし。

…いやいや、たまには帰るから！

それに、近いうちにお爺ちゃんのところ行くし。

そーそー。友達とちよつとした旅にね。

お土産とか、買える分は買ってくからさ。

ん、わかった。おやすみー。

…ふう。」

「どんな内容だったんだ？」

「母さんが元に戻ったんだし、また3人暮らしに戻らないかって。

無下にしちゃったけど、ウチの家訓だから。」

「家訓？」

『何にも縛られず、法を守って自由に生きろ』って。
読んで字の如くだね。」

「そうなのか。翼の家族、なんだか不思議だな…」

「不思議って…」

まあウチ、金はある方だし、アリスの時はそれで縁切りにならなかったから不思議っちゃ不思議かも。」

そんな感じで、夜は更けて行った。

To Be Continued…

#12 The Beginning of the Journey

—7月31日(月)—

行動指針も定まり、長谷川さんと情報共有するところなのだが…

「キャンピングカー…？ 何だその青春謳歌する感じは…

つか、年頃の男女が同じ車で寝泊りか？」

「だいじょーぶだ。男子は全員車の屋根で寝るし。」

「語弊あるって…」

「真もいるし、何かあったら鉄拳制裁だし。」

「あ、私、薪割りも得意です！」

「そ、そだな…」

「お手柔らかに…」

「…頼り甲斐のある女性陣だな。まあ、好きにしろ。」

「それで、頼んでいたものは？」

「ああ、アリスのスマホだったな。」

ほらよと言って双葉に渡したのは、見たところ何の変哲もないスマホ。
昨夜、解析のために頼んでおいたものだ。

「ナイスだゼンキチイ！」

「おい、大事な証拠品なんだ。壊すなよ？」

スマホの解析を始める双葉を横目に話は続く。

「アリス、どんな様子でした？」

「一応、『改心』を使えるようになった経緯は聞くことができた。

EMMAでトモダチ登録すると、相手が言いなりになってくれたらしい。

最初は本人も不思議だったらしいが：どんな奴でも言いなりになるのが快感で、やめられなくなったようだ。」

「トモダチ登録したらか…」

「依存性あるって、なんか怖いな…」

「それ以外には？」

「あとは謝るばかりだ。少なくとも嘘を言ってる様子じゃなかった。」

「やはりジェルやネガイの事は知らなかったようだな…」

「まあ、俺だってあの世界を見せられてなきや、こんな話、信じなかったらうしな。」

「うーん…：…なんだこりや…：…」

「双葉、何かわかった？」

「アリスのEMMAにだけ何か細工があるかとも思ったんだが…なんもなし。」

「データ見た感じ、スマホ自体も普通の市販品っぽいね。こっちも、細工とかはなさそう。」

…収穫なしだった？」

「そうは言っていないぞ。誰かが覗いてた足跡は見つけた。」

「…覗いてた？」

「アリスのスマホかEMMAの動きを、誰かが外から観察してたっぽい。」

「ちよつ、それって…」

「監視者がいたということか？」

「だとすれば…あの事件に、アリス以外の関係者が居たという事にならないか？」

「相手の事はわからない？」

「日本にいる誰か…ぐらいしかわからん。」

「そいつがわかっただけでも大したモンだ。やるな、お嬢ちゃん！」

「怪盗団の情報担当舐めんなよ〜」

「監視者…何者かしら…」

「まあ、焦るな。」

事件はこれ1つじゃねえし、他を調べれば、わかる事もあるだろ。」

話はそれきりとなり、8月8日に札幌中央市でな。といってルブランを去った。

「やっぱアリスが人をジェイルに入れられたのは、王だったから…って事でいいのか?」

「EMMAに異常がないなら、そういう事になるよね…」

「気持ちはわかるが、答えを急ぐのはやめようぜ。」

ゼンキチの言うとおり、事件はまだあるんだ。」

「そうですね。情報がないなら、どうかして手に入れればいいし。」

と、蓮さんのスマホが鳴った。

昨日頼んだキャンピングカーを借りてきたらしい。



「ほらよ、借りてきてやったぞ。」

「これが…生で見るキャンピングカー…」

「スゲー…想像してたヤツの3倍はスゲー…」

「このレトロな佇まい…素朴でありながら華やかだ…!」

「ありがとう、そうじろう！」

「壊さないようにします。」

「おいおい、不吉なこと言うんじゃないよ。」

「…検索した。車種はワルゲン社のレトロライフ。ベッドは4つ、ルーフトントも完備。十分な電源と調理設備もある。」

「言うこと無しだぜ。さすがはゴシユジンだ！」

ついでに内装も見てみる。

とりあえず、全員の荷造りもあつて解散となった。

◇

「…夏休みの宿題の一部、ある。水着とラッシュガード…ある。」

指差し確認ヨシ！

手頃なサイズのカバンに色々突っ込み、ソフィアにも終わったことを伝えておく。

「翼、この後はどうするんだ？」

「そうだな……」

あつ、一応父さんたちのところにも行つとくかな。」

「旅の前に別れ言うアレか？ 映画にはそんなシーンがあるってネットにあったぞ。」

「そういう訳じゃ……いや、そうかも。一生の別れとか、そういうわけじゃないんだけどね。」

荷物を持って玄関へ。振り向くと、そこには電気すらついてない暗い部屋。

「…行ってきます。」

1人暮らしなのに、何故か自然とそう言えた。



父さんたちの家…もとい実質的な実家に到着。

「おー…翼の実家、大きいんだな。」

「ソフィア、両親は僕が怪盗だなんて知らないからね。バラさないようにするけど、ソフィアのことまでできるだけこっちに合わせて。」

「ノープロブレム。」

インターホンを押す。そしたら、母さんが出てきた。

「あつ、母さん！ ホントに元に戻ってるんだ！」

「突然のことなんだけどね。ここ2か月は記憶が曖昧だから、何とも

言えないんだけど。

それより父さんから聞いたけど、今は一人暮らしなんですよ？ ご飯とか、ちゃんと食べてる？」

「その辺は全然大丈夫。逆に楽しいくらい！」

「それなら良し。」

玄関で話していると、奥から父さんも。

「翼なのかー？ 突然どうしたんだ？」

「別に。今日出発だから、一応父さんたちの所にもって。」

「律儀だな…息子に言うのもなんだが。別に電話でも良かったんだぞ？」

「旅の前だから…かな？ そのくらいいいでしょ。親孝行者だと思えば。」

「おいおい…：…というか、昨日の今日か。義父さんにも、よろしく言っといてくれ。」

「勿論だつての。」

「というか、『旅』ねえ…」

私たちが付き合ったのも、修学旅行の時じゃなかったっけ？」

「そういえばそうだったな…」

翼も、旅先で旅仲間とイイ雰囲気になったりとかな。」

「流石にないでしょ…父さんらじゃあるまいし。」

「冗談だよ、冗談。…元気に行ってこい、ウチ自慢の翼。」

「そうね。体調、崩さないようにね?」

「分かってるって。…行ってきます!」

「行ってらっしゃい!」

「…家族か…話を聞いているだけで、胸の奥がポカポカするぞ。家族って、あつたかいんだな。」

家から離れたところで、ソフィアがそう言った気がした。



ルブランの前に戻ると、マスターと蓮さんがいた。

「おお、翼か。」

「準備が終わったんで来たんですが…まだですかね?」

「いや、そろそろ集合をかけるところだ。」

「了解。てか、まさかこんなことになるとは…」

「後悔でもあるのか?」

「いえ、これっぽっちも。」

ゆうべ、屋根裏部屋で言ったでしょう？ 『王がいて、被害者がいて、僕たちにしかできないなら助けてあげたい』って。」

「そうだったな。それと、何故仙台に寄るのを提案したんだ？」

「今日出発なら泊まりはそこでしよう……」

「っていうのじゃなくて、親の実家がそこなんですよね。」

「なるほど。」

「アリスに復讐するって決めたら、まさかの旅かー…」

でも、そこで困った人がいる限り、怪盗団は助けるんですよね？

僕も、みんなとその力になりたいです。

…今後ともよろしくです！」

我は汝…汝は我…

汝、ここに新たなる契りを得たり

契りは即ち、

囚われを破らんとする反逆の翼なり

我、「技師」のペルソナの生誕に祝福の風を得たり

自由へと至る、更なる力とならん…

BANDスキル解放・テクニシャン

効果：TECHNICALによるダメージが上昇する

「ああ、そうだ。」

「どうしました、マスター？」

「双葉、学校にも通い出して、友達作って…そして今回の旅だ。無いかもしれんが、もしかしたら何かあるかもしれない。」

その時は翼：頼んだ。双葉の友達に頼むのもアレだがな。」

「頼まりました！」

「では、みんなを集めるぞ。」

◇

全員集まり、キャンピングカーに乗る。真さんは運転席だ。

「本当にお前らだけで行くのかよ？」

「心配すんな、たぶん大丈夫だ！」

「行ってきます。」

「ハア…つたく、気をつけろよ。」

「はい、では。」

マスターに見送られ、車は動き始める。

「つしゃ！ 夏休み、スタートだ！」

「目指すは札幌ー！」

旅の始まりだ。

E p . 1 A m u s e m e n t P a r k D r o w n i n g
i n L u s t

C o m p l e t e

C o n t i n u e d o n n e x t e p i s o d e . . .

#12.5 Character Setting

はっとりつばと
服部翼

「亀だった今の僕には、兎に抗える力がある。」

▶？基本情報

身長：170cm

体重：57kg

学年：高校2年（年齢は双葉と同じ）

誕生日：10月12日

星座：天秤座

コードネーム：シノビ／SHINOBI

CV：（読者さんが考えてくれ）

アルカナ：技師

家族構成：母、父（現在は1人暮らし）

特技：ゲーム、料理

クセ：座る時に足を組む

趣味：ゲーム全般、街歩き

食の好み：ルブランカレー、甘いもの

苦さへの耐性はある程度ある。

理想の恋人像：趣味が合って冗談を言い合える人

もしも宝くじで7億が当たったら？：欲しいゲームを買ってあとは貯金。

▶？概要

佐倉双葉の友人であり、秀尽学園の生徒。

怪盗団ファンでありながらのゲーマーで、料理などでもできる多才な人物。

一見すると普通の高校生だが、『改心事件』で母親が『改心』されており、改心を行った柊アリスに恨みを持っている。

母親の件があり、現在は四軒茶屋で一人暮らし中。

ペルソナ能力に覚醒した後は、自身と同じ境遇の人を救うために怪盗団に加入、『世直しの旅』に同行することに。

名前の元ネタは戦国時代に活躍した人物「服部平蔵」。

▶？性格

基本的に優しく、信頼には信頼で返す。

その反面、自分や信頼した人へ危害を加えようとする、または加えた人物にはとても冷たい。

「悪に虐げられた者を救う」ことを大切にしており、怪盗として活動するのもその為という一面が多くを占めている。

また日本史を愛する一面もあり、「和」を好む祐介とは話が合う。

怪盗団のメンバーを含め敬語で話すことが多く、「親しき仲にも礼儀あれ」の体現。

大体はさん付けだが、下の名前で呼んでるだけマシとのこと。かなり甘めな考えである。

双葉だけ呼び捨て+崩した口調だが、「友達たるもの！」と言われてそうしている。両親、親戚は勿論のこと。

▶？容姿

母親譲りの銀髪をミディアムにし、瞳は黒。顔立ちは少年に近め。ファッションにはあまり拘っておらず、黒と白を基調にしたものが殆ど。

最近では、杏の影響でメンズのファッション誌をちよくちよく読んでいることも。

怪盗服は殆ど忍者装束に近く、仮面は忍者の額当てをモチーフにしたもので、忍者がするような頭巾はしていない。手袋の色は白。

祐介曰く「親近感を感じる」らしい。

▶？戦闘スタイル

近接武器は小太刀の二刀流で、遠隔武器はマークスマン・ライフル

の魔法アタッカー。

アクションでは「集中」状態という特殊状態になることができ、一定時間、攻撃範囲がかなり縮小する代わりに手数が大幅に上がる。

マスターアーツの中でも特徴的なのは4つ目「暗器」で、「集中」状態のときに1Moreをすると、「集中」状態の間近接攻撃に呪怨属性を付与できる。

▶?ペルソナ関連

イルジメ

討ち取れ、イルジメ!

翼が覚醒したペルソナ。アルカナは「技師」

梅があしらわれた漢服を着崩している細身の男性で、切れ長の目と一振りの刀が特徴。

モチーフは17世紀の中国・朝鮮に存在した複数の小説の登場人物「一枝梅」。

義賊として活動を行い、現場に一枝の梅の絵を置き去ることが特徴。

韓国でドラマ化されており、そこでの設定は「父親を殺した者への復讐を誓い、父を刺した剣を手がかりに義賊として活動する」となっている。

呪怨属性に強く耐性持ちだが、祝福属性に弱い（ソフィアの『ピトス』と耐性が逆。）

呪怨属性及び状態異常のスキルを得意とし、「コンセントレイト」での自己強化も可能。

状態異常の敵へのダメージが高い「寝首搔き」系統のスキルを有効活用するのが吉。

▶?人間関係

・佐倉双葉

怪盗団メンバーの中では最も仲がいい。

翼がアリス関係の調査をするときに双葉と「取引」をし、取引関係

でありながら友人という奇妙な関係に。

アリスを改心させた後は本当の意味で「友達」となった。

取引関係だった頃から2人で出かけることはよくあり、当人らは友人として接しているつもりだが、側から見ればカップル一歩手前の距離感らしい。

・坂本竜司

双葉が一度主人公以外の怪盗団メンバーを紹介した事があり、そこで知り合う。

口を滑らせてしまつて自分たちが怪盗団であることを言つてしまひ、翼が怪盗団に入る要因の一つになっている（かもしれない）。

体育会系であるためかプライベートで話すことはあまりないが、仲は良い方。

・高巻杏

双葉の紹介で知り合う。

ファッションへの拘りが少ない翼にファッション誌を勧めている。

・喜多川祐介

双葉の紹介で知り合う。

片や日本史好き、片や日本画好きとして気が合う人物。

・新島真と奥村春（まとめて）

双葉の紹介で知り合う。

大学生であるが故か、交流はあまり多くない。

・佐倉惣治郎

1人暮らしを始めてすぐの頃、ふらつとルブランに来たことで知り合う。

翼自身ルブランのコーヒーとカレーは気に入っていて、常連一歩手前。ちなみに、コーヒーの無糖は飲みにくいので微糖で頼んでいる。

惣治郎自身はコーヒーを無糖で飲んでほしいと思つているとか思つていないとか。

双葉との繋がりができた後は、双葉と友人になつてくれたことに感謝している。（取引があつたことは知らない）

Ep. 2 Walled City Coverd
in Ostentation
#13 Masamune

—7月31日(月) 夜—

キャンピングカーに乗ること数時間、空が暗くなった頃。

「だいぶ走った気がするが、今はどのあたりだ？」

「もうすぐ仙台市に入るな。」

「けっこう寄り道したけど、ジェイル、見つからなかったな。」

「ちよつと気が抜けちゃった。でも、あんなのがたくさんあっても困るよね。」

「もう暗いし、続きは明日かな？」

「翼くんの希望もあるし、車は仙台に停めるとして…」

「つかまらずメシにしねえ？」

「翼、仙台のウメエモンつつたら何よ？」

「1番に挙げるなら牛タンですかね。専門の店も結構ありますよ。」

「スイーツものの中にも、東北特有のものが色々。」

「それよりも、僕は蒼葉山公園にある仙台城跡を先にしたいですね。伊達政宗様の銅像を一度見てからじゃないと、仙台に来た—って感じが…」

「かなりの熱弁だな…親の実家があるだけある。」

「伊達政宗公の銅像を見に行くのは、俺も賛成だな。」

「わたし、先にお風呂入りたい。車で寝るにしろ、汗ベトベトじゃヤダ。」

「やれやれ…見事に意見がバラバラだな…」

「え、えーっと…どうしよう?…」

「全部行くぞ。」

「いや、流石に順番とか…」

「こういう時こそ、私の出番だな。」

車中泊可の駐車場、牛タン屋、伊達政宗に風呂屋…
任せておけ。全部含めた最適経路出してやる。」

「ソフィアって、そんなこともできるんだね。」

「特別なことはしてない。検索して適当に並べてみるだけだ。」

まずは蒼葉山公園の駐車場に車を停めて、伊達政宗騎馬像を…
あれ?

………」

「ん、ソフィア大丈夫?」

「…匂いがする。この街に、ジエイルがありそうだ。」

「おいマジかよ…つか、そういう感じで見つかるもんなのな。」

「確かなのか、ソフィア?」

「多分。」

距離があるせいかわっきりしないが、渋谷と同じような匂いがする。」

「どちらにせよ、仙台に寄るべきだな。」

「わかったわ。もう少しで着くと思うから。」



—仙台・蒼葉山公園—

「…でソフィア、ジェイルの匂いはするの?」

「…間違いない。この街にジェイルがある。」

「…本当にあつたんだね。渋谷以外の街にジェイルが。」

「ジェイルがあるなら、この街でも何か事件が起きてるはずだ。」

「そうね、まずは調べましょう。」

「でもなー、調べるっていつでももどーする? 仙台の街は広そうだぞ…」

「観光名所とかどう?」

人が集まるところなら、噂も入ってきそう。」

「それなら、尚更銅像に行かないとな…」

「銅像とか別に明日でよくね？　メシいこうぜ、メシ。」

「何言ってるんですか！　銅像が明日まである保証なんてないでしょう！？」

「そうだ。」

旅の出会いは一期一会……見ると決めたなら、今見ておくべきだ。」

「出た、翼アンドおイナリの謎理論……」

「そういえばマコちゃん。車中泊の許可って、無事に取れた？」

「ええ、さつき電話で確認したわ。寝泊まりする場所に感じではひとまず安心。」

それにここは観光客も多そうだから、ある程度話を聞くこともできそうね。」

「銅像、行ってみる？　ここから歩いて近いんだよね？」

「近いぞ。すぐそこだ。」

「よし、先行ってきます。」

何度も来たから場所は覚えている。
駆け足で銅像へと向かった。

◇

銅像の目の前。夜なのか人はいないのだが…

「……翼、何してんだ？」

「何って……」

土下座である。

「ははーっ！」

「そこまでやんのかよっ！」

「ふむ、やはり敬意を示すならば土下座か。俺もやっておこう。」

「おイナリもか！」

「この伝わってくる『独眼竜』の威厳……！平伏せざるを得ない……！」

「確かにかっこいな。」

「解ってもらえて何よりですよ。」

とりあえず平伏の姿勢から元に戻す。

昼間にも向かいたいとか、そういうのを思った矢先……

「何だアレ……？」

みんなと確認してみると、それは大量のポスター。

「『プリンスオブナイトメア第1巻、20刷目重版出来記念！』……」

「出来ってことは、本の宣伝……？」

許可を取ってそうでもないし、誰かのイタズラかしら。」

「不届な輩もいたものだ。己の利益のためにこんな張り紙をするとは…」

「とにかく剥がしておくが吉、ですね。」

◇

ちよつと苦労したが、なんとか剥がし終わる。

「これでいいわね。」

「んで、翼と祐介は満足したかよ？」

「ああ、おかげで政宗公に挨拶できた。」

「左に同じく。」

時間取らせちゃいましたし、次行きましようか。」

「んじや、1ヶ所クリアーだな。」

お次は牛タンディナーにれつつらごーだ。」

「ニャッフ…本場の味、グルメなワガハイを唸らせてくれるかな？」

「あ、すまん。猫の入店は厳しいかもしれない。」

「なんとっ!?!」

「あっちゃー…」



仙台市内の牛タン屋。

「おおお!!? んだこれ!?

肉、厚っ! 柔らかっ! ウマっ!」

「ちよっ…竜司! こっち飛んでる!」

「美味しい…やっぱ仙台だよここ…!」

「翼くん、何言ってるの…?」

「嗚呼…」

「あはは…祐介泣いてんだけど。」

「普段ちゃんと食べてるのかしら…でも、本当に美味しいわね。」

「なあ、ワガハイにも一口くれ!」

「うるせー猫だな。蓮から分けてもらえよ。」

「後でな、モルガナ。」

「だってよ。」

「残念だったな、ニオイだけで我慢しとけ!」

「ケチケチすんな！」

ワガハイだつて腹減つてんだぞ！」

「バカ、でけえ声出すな！」

「…猫の…声…？」

「やべ…」

視界の端にいた白衣を着ている人。

おもむろに立ち上がり、こつちに向かってくる。

「…気のせいかな？ キミのところから猫の鳴き声が…」

「い、いえ、違つて…ちよつと猫の声真似をしてただけで！
ほら竜司！」

「ニヤ、ニヤ…」

「練習中なんです。」

「いやキミ、さすがにそれは無理があるよ…」

思うに、メガネの彼のカバンの中かな？ いやあ優しいね、分けて
あげてるのかい？

猫ちゃん共々、是非このお店の極上の牛タンを味わってくれたまえ
！」

「ちよつ、声大きいですよ！」

「おっと、ごめんごめん。バレたら味わうどころか叩き出されちゃう

ね。

ところでキミたち、仙台の牛タンは初めてかな？つけ合わせにはー」

「テールスープが鉄板。コラーゲン豊富で美肌効果を求めて飲む人も多い。」

一般的に経口摂取は効果が薄いとされているけど、効果があったと言う人も少なくはない。」

「そう！

人間の認識は曖昧なものでね、思い込みの力…いわゆるプラセボ効果だね、これが美肌効果を…」

「へえ…なるほど…」

「お、おい…なんか話止まんねえんだけど…」

「…ウチらのこと見えてる？」

「この一方的な情報の圧力…古典的オタのニオイを感じる…

話についてこれてる翼も大概だな…」

「えーっと、カバンの中身はスンマセンっつーか…」

「え？何が？あー猫の話？大丈夫だよ、お店の人に言ったりしないから。」

「ところでキミたちは学生かい？」

「高校生です。」

「なるほど！じゃあ次は大学受験が待ち受けているのかな！大学は決めたのかい？」

って、自己紹介がまだだった。私は一ノ瀬久音^{いちのせくおん}。この近くの東鳳大
学で研究者として雇われてる。

ね、よかったらうちの大学に遊びに来てみない？
山奥だけど楽しいよー、この季節は熊も出るし。」

「く、クマ…？。」

「いや、僕たち他にも所用がありました…」

時間があまりないんです、すみません。」

「そうかそうか、若いときは何でもやんなさい。

では銀髪の少年よ、再会を祈って飴ちゃんをやろう。」

「あ、ありがとうございます…」

「それじゃ、牛タンも堪能し終えたことだし、私はこのあたりで。

さらばだ、若人たち！ 少年とはまた牛タン語りでもしようではな
いかー！」

その人…一ノ瀬さんは普通に店外に向かっていった。

「…ちよ、ちよつと変わったテンションの人だったね？」

「とにかく、騒ぎにならなくてよかったわ。

あの人に感謝しないと。」

「すまん、ワガハイとしたことが…」

「いや、俺も調子乗りすぎたわ…」

「ごめんねモナちゃん。後で笹カマ買ってあげるから。」

「あの焼き目ついてるヤツか！ 楽しみにしてるぞ！」

「さあ、食べましようか。今度は静かに味わうように。」

「うーっす…」

他の客の会話を聞き流しながらも食べていく。

何やら熱く語ってる人がいたが、気にしないでおこう。



心ゆくまで牛タンを堪能し、店外へ。

「ふー、食った食った…」

「まさかの麦飯5杯おかわりだと…胃袋どーなってんだ。」

「いや、おかわり無料って聞いたらフツーいくだろ。」

「ああ。まず並んだ肉の艶を眺め1杯、香りで2杯はカタい。」

「それは祐介さんだけなのは…」

「でも、本当に美味しいお店だったね！」

「ソフィア、グツジョブ！」

「朝飯前ってやつだ。」

「こりや店選びはソフィア担当で決まりだな！
…って…何だアレ？」

竜司さんが言った方向には人だかりがあつた。
それも、1人の人を中心にできている。

夏芽先生ー！ 新刊も最高でした！

先生、サインを！本にサインしてください！

「フフ、応援ありがとう。

ああ待つて待つて、サインは1人ずつね。

あー…悪いけど男性は後ろに並んで。

レディーファーストだからね。」

「…なんだあいつ？」

「すごい人気ね。新刊つて言うからには作家さんかしら？」

と、渦の中心にいた男がこちらへ。

どうやら気づいたらしい。

「やあ、君たちもサインが欲しいのかい？ それとも握手？」

「え？ その…」

「ハア…君たちのように可憐なファンを待たせてしまうなんて、僕は最低な男だよ…」

これ、お詫びに受け取ってくれかいかな？

大丈夫、ちゃんとサインは書いてあるから。」

何かを懐から取り出す夏芽先生と言われた人。
遠目に見たところ、本のようだ。

「は、はあ…」

「いえ、あの…私たち通りかかっただけで…」

「おや、そうだったのか。これはとんだ早とちりだったかな。」

『『プリンスオブナイトメア』…作者は…夏芽安吾…』
なつめあんご

「そう、僕がその夏目安吾さ。よろしくね。」

『『プリンスオブナイトメア』…って…政宗像の張り紙にあつた…』

「政宗像に張り紙だつて？」

ああ、もしかすると…また僕の熱烈なファンの仕業かな。

作品を宣伝してくれるのは嬉しいが…少々過熱気味なところがあつてね。

まったく、困ったものだよ。

…
どうかこの僕に免じて許してくれ。その代わりにお詫びのキスを…」

「…おい、その辺にしとけよ。困ってるだろうが。」

「いい加減にするんだ。」

「…何だい、君たち。」

僕が声をかけたのはこの魅力的な女性たちだ。君たちは黙ってい

てくれないか。」

「わりーけど俺らのツレなんだよ。用なら俺が聞くけどな？」

「フン…この俺にそんな口を利いて、ただで済むと思ってるのか？」

「やってみるんだな。」

「へえ、いい度胸じゃないか…！」

「夏芽先生。そろそろ移動しなくては。」

「…チツ。」

それじゃあ、僕は行くよ。これから雑誌のインタビューがあるからね。

僕の本を読んでくれるすべての読者に、心からの感謝と愛を。」

黒服と共に、彼は去っていった。

「…なんだ、あの男は。」

「センサーだか何だか知らねーが、ムカつくヤローだな。」

「変なヤツだったな。だが周りの人は大喜びしてた。なんでだ？」

「そりゃあ、周りがおかしいからでしょうよ。」

「同意見だな。お世辞にも褒められた人間とは思えん。」

「春、大丈夫だった？」

「うん…ちよつとビックリしただけ。」

「なんであんなヤツが人気なんだろ。全っ然わかんない！」

「…何か裏があるのかもしれないな。」

例えば、『改心』を使つて…とかな。」

「まさか…仙台の王!？」

「ただの可能性の話だけだな。」

「いや、ありえるんじゃないか？」

「アイツが王ならいろいろ納得だぜ！」

「まずは情報収集からだな。」

「よし、車に戻ればPCがある。いろいろ調べられると思うぞ。」

「それじゃ、キャンピングカーで作戦会議ですね！」

To Be Continued…

#14 Literary Grandson

—8月1日(火)—

翌日、仙台駅前。

「うっし、仙台駅到着っ！ キザ野郎の尻尾掴んでやるぜ！」

「朝から元気いっぱいだな…夏休みの小学生か…」

「うう…まだ眠い…」

「2人とも大丈夫？ 朝、苦手とか？」

「昨日あんま眠れなかった…マクラ変わるとやっぱムリ…」

「色々うるさかったんですよ…いびきとか寝言とか鳴き声とか…」

「翼は一人暮らしでそーゆーのは無縁だからな…」

「初めての車中泊だし、仕方ないかもね。少しずつ慣れるんじゃないかしら。」

「後で耳栓買うかあ…」

「それより、平日なのに駅前にはぎやかだね。夏休みだからかな。」

「少し歩けばアーケード街がある。七夕の飾りが観光客に人気らしい。」

「ああ…そういえばそろそろ七夕祭りですね。」

「人が集まる店も多くありそうだな。そちらでも聞き込みしてみるとするか。」

「ああ、アリスのときと同じようにやるぞ。何かあれば集合しよう。」

◇

「それじゃあ、何か連絡が来たらここに来るから。」

「ありがとうございます。」

真さんに頼んで蒼葉山公園に到着。

銅像を見に来たわけではなく、母さんの実家に向かうためだ。

公園を去り、住宅街の中へ。

それほど経たないうちに、いかにもな塀が見えた。

「ここが翼の母親の実家なのか？」

立ち止まってスマホを見てると、ソフィアが顔を出してくる。

「そ。この辺りだと、敷地は結構広い方だよ。」

塀に沿ってちよつと歩くと和風な門が。

雰囲気に合わせてあるインターホンを押すと、よく覚えている初老の顔が見えた。

「おお、翼か！ 元気にしとったか？」

「久しぶりー。」

「まあ、とにかく上がつとけ。大体のことは遊美翼の母親から聞いておる。」

一緒に上がり、畳張りの居間へ。横に見えている生花も質素ながら良い。お爺ちゃんがお茶を入れに行つた間にソファにも見せておこう。

「おー：周りにあるもの、全部高級品の部類に入るぞ。」

翼の祖父は金持ちなんだな。」

「まー確かにね。どうやって稼いだかは知らないけど、少なくとも裏社会繋がりがりじゃないらしいよ。」

なんでも、昔から脈々と受け継いでるーとか。」

「翼も将来はそれを継ぐのか?。」

「いや、そうじゃないよ。叔父さんがいるんだけど、叔父さんの方が母さんよりも早く生まれてるからそっちが継ぐ予定になつてる。」

継ぐ訳じゃない母さんは自由。それで、東京に来たつてわけ。」

「なるほど……」

翼ー。お茶持つてきたぞー。」

「あつ、お爺ちゃん来たからそろそろしまうね。」

「了解だ。」

お爺ちゃんから湯のみを受け取り、僕の正面に座つた。

「翼、確か友達と旅に出てるんじゃない？ 昨日遊美から聞いた時は驚いたわい。」

「そうなんだよねー。」

「一人暮らししてるとかも聞いたぞ。その歳でするとなると、昔のワシを思い出すわい。」

「お爺ちゃんもなの？ なんか意外…」

「そうじゃぞ。ここだけの話じゃがな。」

「てか、正月に会ってから口調変わったよね…」

「別に良いじやろ。ワシの見た目になると、二次元じゃこんな話し方に…」

「ならないから…」

「ええ… (困惑)」

「まあ、心が若いままならいっか。サブカルもわかるみたいだし。」

「そうじやろそうじやろ。」

…
うんうんと頷いている。爺ちゃんの心20代かと思ってしまうな

「そういえばさ、夏芽安吾ってわかる？」

「勿論じゃ。あやつの本は読んだ事あるが、なーんか面白くなくてな

…
賞を取ったと聞くが、疑ってしまうわい。翼も読んではいるのか？」

「いやいや、あんなの読むに堪えないっての。一卷だけ買ったけど、損した気分。」

ちなみに嘘である。

「ほーう。トモダチキーワード、要らんかったかのう…」

「え、知ってるの?」

「2ヶ月くらい前、興味本位でサイン会に行ったらな。というか、ワシはEMMAすら使っていないからすっかり忘れちまったんじやつた！」

ホツホツとゲームのように笑っている。

「忘れたなら仕方ないか…てか、EMMA使っていないんだ。」

「なーんかきな臭くてのう。」

それに、あーゆーのに色々聞いて頼りっぱなしになったら、なーんにも考えなくなっちゃう気がするのう…」

「へー。」

と、スマホが鳴った。お爺ちゃんに断りを入れてチャットを見ると、これから駅前で夏芽のサイン会があるらしい。

「友達からか?」

「まあそんなとこ。」

「ほーう。彼女とかじゃないのか…」

「違うっての。」

「遊美も高校の時に彼氏できたーとか言ってたんじゃなあ…」

「父さんたちと同じこと言わないでくれない…」

「ワシは信じとるぞ！彼女も連れてきとるとな！」

「あー…」

こうなったらテコでも動かないもんなあ…

どうしたものか。

「とりあえず、仙台出る前に連れて来れないかろう？　　というか連れてきてくれ。」

「はいはい…」

やばいことになっちまった…

まあでも、夏芽のことが色々済んでからでいいか。

とりあえず真さんに連絡しておこう。

◇

「そこら中、あのギザ野郎の宣伝だらけ…頭おかしくなりそうだけ。」

「案の定、サイン会もすごい人混みね…」

「うええ…人多すぎて吐きそうだぞ…」

「アリスの時と同じように、ここでEMMAのキーワードを配って『改心』させてるつもりか？」

「それはお爺ちゃんから聞いた。実際そうっぽい。」

「何？ キーワードは教えてもらったか？」

「いや、EMMA自体を使ってないからすっかり忘れたって。」

「そうなのか…」

「ご高齢なら、仕方ないかもね。」

「とにかく、もう少し様子を見てみようぜ。」

サイン会に来た夏芽に洗脳された人たちの話を聞くが、やはりおかしすぎる。

「小説を書き始めたきっかけは寝たきりの女の子のため」なんて言っているが、嘘のようにしか思えない。もつとも、アリスの言葉を疑った僕が言う事では無いと思うが。

そんな感じで、サイン会は終わった。

「予想はしてたけど…凄い人気だったね…」

「病気で寝たきりの女の子のために小説書き始めたとか、本当？」

「ンな奴には見えなかったけどな。」

「それにしてもナツメのヤツ、キーワードらしい言葉を言わなかったな…」

「確かに。僕のお爺ちゃんはサイン会で聞いたって言ってたけど…」

「王じゃないから？ それとも警戒してるのかな…」

「もし王だとしたら、ここに集まってたのは、皆『改心』済みだったんじゃないかしら…」

「お爺ちゃんは『改心』されてなかったから渡したってだけで、今回の場合は配る必要はなかった…」と。

「…ってかおイナリ、さつきから何読んでる？」

「夏芽安吾の小説だ。『プリンセスナイトメア』」

「買ったのか、おイナリ！」

「何のために？」

「この本が、人々の熱気に見合う内容かどうか確認したくてな。」

「それで…どう？ 面白い？」

「そうだな…なんと買ったものか。」

魅力ある創作物には、作者が作品に込めた『熱』のようなものが溢れているものだ。たとえどんなに稚拙で荒削りであろうと、見る者に訴えかける熱い輝きがな。

俺は、文学のことはよくわからんが…少なくとも、この本からソレは感じられない。

文章そのものはうまくさえ見える。だが、驚くほど空虚だ。まるで、誰かの言葉を借り、上辺だけ取り繕ったような…」

「ちよつと見せて。」

「あ、僕にも。」

祐介さんが持つ本と一緒に覗き込む。

「ちよつ翼、見えない…」

「あつと、ごめん。」

双葉が読めるようにちよつとどいて、改めて観察。

「えーつと…」

あーこれ、2年前にやってたアニメのセリフだな。微妙に変えてるのがまた小賢しい。」

「この展開、どつかで見たな…」

「このことか、あと…」

「てかこれ…色々な作品からつまみ食いして、つないでるだけじゃないのか？」

「わかる。これ、原作者でもファンでも激怒して大炎上するところまでいつてますね…」

「そんなまがい物の作品で、あれほどの人気を得られるとは到底思えん。」

「…ネガイを奪わない限りな。」

「こりや状況からして、限りなくクロだな。」

「キーワードさえわかれば、ジエイルに入って調べられるのに……」

「翼の祖父に、何とか思い出してもらえないか？」

「それは無理かもですね……聞いたのも2ヶ月くらい前らしいですし。」

「なら、取巻きから聞き出すか？」

「あれ全員、ネガイ取られた奴らだろ？」

「うーん……渋谷の時と同じなら、被害者が教えてくれるとは思えないわ。」

「ちよい手詰まり感。あの刑事のオッサン、なんか言って来てないか？」

「今夜、車まで来てくれるって連絡があったよ。何か情報を掴んだのかも。」

「それじゃ、一度長谷川警部補が来るのを待つことにしましょうか。」

◇

夜、キャンピングカーに集合。長谷川警部補も到着した。

「……なかなかいい車じゃねーか。」

しかし、まさか仙台に寄り道してるとはな。どうしてココにもジェイルがあるとわかった？」

「そ、それはまあ…」

「匂いで見つけた。」

「……」

…匂いすんの？」

「それより、何か調べたんでしよう？」

「ああ、夏芽安吾だったな。」

確かに奴は怪しい。本の売り上げにしたって、異常に高いのはこの仙台だけだしな。

概ね、お前から連絡があつたのと同じ報告が俺のところに来てる。

で、ここからは聞き込みでわかったことなんだが…夏芽にイカれた信者どもは、みんなEMMAで奴のトモダチになってるらしい。そうなったが最後、そいつは借金してでも夏芽の本を買いまくるようになる。

どっかで聞いた話じゃないか？」

「アリスの時と同じ…」

「終アリスとは違う方法かもしれないが、夏芽も同じ『力』を使ってる
と見て間違いない。」

「そうなる…ますますキーワードを知りたいところだな…」

「もうさ、とっ捕まえて吐かせればよくね？」

「そうならば、俺はお前らを暴行容疑で現行犯逮捕だな。」

「ジェイルだの洗脳だの言い訳しても、病院行きが関の山だ。」

「だよなあ…」

「それにやっぱり、私たちは怪盗なんだし表立った行動は控えないと。」

「おっ、さすがは美少女怪盗。もっとエレガントに行きたいよな。」

「美少女…何だって?」

「美少女怪盗だな。」

「び、美少女怪盗と申します…!」

「お前…自分で言うんだな…」

「それはさておき、だ。何か、キーワードを手に入れる方法を考えねえとな…」

「そこで俺の出番だ。感謝しろよ、お前ら。」

「…と、言うと?」

「今晚、夏芽が『プリンスオブナイトメア』の100万部突破を記念してパーティーを開く。」

「で、そのパーティーの招待状が、なぜか人数分、ココにある。」

「パーティーに潜入するってことですか…」

「なんか怪盗っぽいですね！」

「へー、面白そうじゃん！　なあ、蓮？」

「ああ、良いチャンスだな。」

「そうね、招待客だけの空間なら警戒心も薄いかもしれないわ。」

「どうだ？　俺と取引して良かっただろ？」

「なかなかやるな、オッサン！」

「ああ、やるじゃねえかオッサン！」

「オッサンを見る目が変わるな。」

「さすがですね、オッサンさん。」

「お前ら…せめて苗字で呼べよ…」

「ドンマイ、オッサン。」

To Be Continued…

#15 Painter and Writer

『皆様、本日はパーティーにお集まりいただきありがとうございます。私からのささやかなお返しと言ってはなんですが、今日はぜひお楽しみください。』

長谷川警部補の手引きでパーティー会場に到着。

スーツを着た人、テレビ局の人とたくさんいるが、遠目で見ていただけあって怪しまれてはいない。

夏芽の一言で始まったコレだが、今は彼の編集者らと話していた。ターゲット

話はこちらにも聞こえているが、編集者は「本の売り上げは夏芽先生の實力」と褒めている。夏芽はそれはどうかと受け流した。話題性さえあれば良い、と語る。

「本物、本質……結局、誰もそんなものには興味がない。ほら、前もあつたじゃないですか。斑目一流斎の謝罪事件。」

あの人の代表作……なんていったかな。」

『『サユリ』……でしたかね。』

「そうそう、『サユリ』。」

あれも美の極地などと持て囃されたが、私に言わせれば、今やゴミ同然だ。」

『『サユリ』。僕もその絵は知っている。』

ルブランに今も飾られている絵だが、本当は、今亡き祐介さんの母親が描いたものらしい。この作品に込められた想いについて、熱く語っていたのをよく覚えている。

それをゴミ扱い。話題性に関係なく「美の極地」と言えるそれを、よく軽く言えるものだ。

傲慢さが見えるその発言を、祐介さんは静かに受け止めているよう

だった。

「ユースケ、気持ちはわかるが今は…」

「…大丈夫だ。」

頼みがある。ここは俺に任せてくれないか。必ず奴からキーワードを聞き出してみせる。」

「でもよ…」

「皆は、先日の件で奴に顔を覚えられているかも知れん。」

その点、俺は後ろに控えていたからな。気づかれる可能性は低いだろう。」

「確かに、ここはユースケが適任かもな。」

「頑張つてね！」

「頼んだ。」

「…ああ。では、行ってくる。」

夏芽らに向かう祐介さん。「私、夏芽先生の大ファンでして…」と切り出した様子から、夏芽のファンを装って接近しているようだ。

「失礼とは存じますが、よろしければサインをいただけませんか…」

「おいおい…」

先生は忙しいんだ、後にしなさい。」

「あはは、いいじゃありませんか。サインの1つくらい。」

「ああ、本当ですか？ 寛大なお心遣いに、感謝いたします。」

祐介さんがポケットから出したものに、夏芽はサラサラと書き込んでいった。

「まさか夏芽先生にサインをいただけるとは。身に余る光栄です。」

「いやいや、気にしなくていいよ。物語を読んでもくれる人がいるからこそ、僕たち作家は本を書き続けられるんだ。」

「…なるほど。とても素晴らしい考え方です。」

ああ、そうだ。先生はEMMAをお使いでしょうか？

「もちろん。あれはとても便利なものだからね。」

「よければ、トモダチになって頂けませんか？ 尊敬する先生をより身近に感じたく…」

「フフ、構わないよ。僕は読者のみんなを大切にしたいからね。」

キーワードは、『プリンスオブナイトメア』だ。」

「ありがとうございます。後で申請を送らせていただきます。それと、もう一つ…」

先生方は、先ほど『サユリ』のお話をされていましたね？

『サユリ』はゴミ同然、中身のない惨めな駄作だど。」

「ああ、聞こえてたのか。そこまで言ったかな？ しかし、君もそう思わないか？

あの絵は結局、斑目一流斎という名前にしか価値のなかった、見てくれだけの…」

「あれは、私の母が描いたものです。」

「……!?」

「ですので、少々大人げないことを言わせていただきますが…」

そして祐介さんの雰囲気が一変。

腕を組み、睨むようにして夏芽を見ていた。

『サユリ』は、俺の母が命を賭して描いた最後の作品だ。あの絵には、唯一の愛が込められている。他人の作品を剽窃して作り上げられた貴様のハリボテと、一緒にするな…!」

「なっ…!」

「きつ、君いつ!」

「俺は事実を言ったままでだ。」

…では、失礼いたします。」

その通り、祐介さんはこちらに戻ってきた。

「目的は果たした。一度、外に出よう。」

夏芽からヘイトを買ったからには仕方ない。

言われるがまま、会場の外へと向かった。



会場を去ると、すぐに祐介さんが一言。

「すまない、最後は自分を抑えられなかった。俺もまだ甘いな……」

「いやいや、結果オーライだろ。キーワードさえわかりや問題ねえ。」

「右に同じく。」

「というか、よくぞ言ったって感じですよ。」

「…俺が奴の作品から感じたことが、すべて正しいとは言いがたい。絵画にしろ書籍にしろ、作品に対して抱く感情は、あくまでも個人の主観に過ぎないからな。」

「いや、少なくともわたしらは、おイナリのおかげでだいぶせーせーしたぞ。」

「とにかく、これでキーワードは手に入った。あとはどこから侵入するかだな。」

と、スマホが鳴った。ちょうど、何か言いたげなソフィアがいる。

「入るなら仙台駅がいい。」

「え、どうして?」

「匂いが薄い。たぶん警戒が緩い場所だ。」

渋谷の時みたいに安全に出入りできると思う。」

「…ってことは、いよいよだね。」

「ああ、これで準備は整った。明日からジェイルの攻略を始めるぜ！」

「おー！」

明日に備えてキャンピングカーへ。

そうしようとしたら、ソフィアがスマホを鳴らしてきた。

「なあ、翼。また聞きたいことがある。

さつき祐介は平静を装っていたが…哀しそうな声をしていた。何故だ？」

「んー…やっぱり、大事な親の作品だからね。侮辱されたからとか？」

「なるほど…人は大事なモノを蔑ろにされた時、怒るよりも哀しくなるのか。」

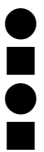
「まあ、そこは人それぞれだと思う。怒りと同じだね。」

「少なくとも、祐介はそう感じたんだな。

…なんだか、祐介のことが少しだけわかった気がする。教えてくれてありがとう、翼。」

「それはどうも。ほら、早く行くよ！」

ちなみに、耳栓を買ったからか今日の眠りはいくらかマシだった。



—8月2日（水）—

「…ねっむ。」

「しゃんとしろリユージュ！ いよいよジェルなんだぜ。」

「わーってるって。ちょっと興奮して寝付けなくてよ。」

「遠足前夜か！」

「ちなみに、中の広さはどれくらいなのかな、ソフィア。」

「匂いを感じから言って…たぶん仙台市街をすっぽりと覆ってる。」

「かなり大きいね…」

「仙台で起きている事を考えれば、そのくらいの規模であることは領ける。

だがそれも、ここまでだ。」

「仕事の時間だな。」

「ああ。仙台ジェル、攻略開始だ！」



準備を済ませていざジェル。

ジェルと化した仙台駅の上から見えた景色の一部は、どこことなくファンタジーさが見られる。

「アレだな…」

「さしずめ、魔王の城というところか…」

モナが指した先には、鳥かごが冠している建造物。フォックスもそう溢っていた。

「ジェイルに入れたわね。王は夏芽安吾で確定よ。」

「じゃあ、やっぱりアイツの人気はインチキなんじゃん。」

「人を洗脳して自分のファンにするなんて、虚しくないのかな…」

「キザ野郎の考えそうなことだぜ。とにかく、俺らが何とかしないと
な。」

「向こうに大きな建物が見える。あれが夏芽安吾の王城か？」

「おそろくな。」

オタカラ…いや、ネガイらしき匂いがする。」

「あつちは…蒼葉山方面か。正面の大通りから行けそうだぞ。」

「蒼葉山…仙台城跡にあるからして、大名気取りっぽいですね。」

「行こう。人々のネガイを取り戻し、夏芽安吾の虚飾を暴く！」

To Be Continued…

#16 Back to TOKYO

「そっぴいや俺ら、ここだと勇者ご一行サマなんだよな。

誰がどの職業とか決めてみねえ？ 戦士とか、僧侶とか！」

「ジョーカーが勇者、クイーンは武闘家、モナが魔法使いってとこだな。」

「んじや俺は？」

「スカルは遊び人って感じですかねー、何となく。」

「何でだよっ！」

「…てか、忍者って何なんだ？」

「んー…暗殺者^{アサシン}？」

「おー…なるほど、理解した。」

「私の職業は…会社役員になるのかな？」

「…それなんか違う。」



現在仙台ジエイル。

フォックスによると、ここは「プリンスオブナイトメア」の世界を元になっているらしい。

その小説だが、内容がテンプレそのもの。四天王がいるのに王城に入るための『証』とやらは三つ必要だし、最初に倒した四天王が「我は四天王の中でも最弱…」とか言ってたし。

一言で言うところ「駄作」であり、よく賞を取れたと思えた。

『ぐふお…ワシもここまでか…冥土の土産にイイものを見れたわい…』

「勝手に土産にすんな！」

「セクハラじじいは成敗した。あとは『証』を手に入れるだけだな！」

そしてこれで四人目の四天王を討伐。パンサーに色目を使つてた変態だったが、何とかなつた。

そして牢獄塔のてっぺんで手に入れたコアもとい『証』は万年筆。龍が飾られていて、とても派手だ。

「よし、これで3つの『証』は揃つたな。」

「…最後は万年筆か。作家らしいといえはらしいが…」

「これで、魔王城の門が開くんだよな？」

「小説通りなら、そうなりますね。」

「いよいよ魔王城に突入だ。」

「…つたく、苦勞させやがって。待ってるよ、キザ野郎。」

「…ちよつと待って。」

と、クイーンが口を挟んだ。

「突入前に、いったん現実に戻らない？」

敵の本拠地に乗り込むなら、万全の準備をしておきたいわ。」

「賛成……。さっきの敵なんか疲れた、いろんな意味で。」

「あはは…：パンサーお疲れ様。」

「フム…：ここで仕切り直すのもアリか。どうする、ジョーカー？」

「賛成だな。腹も減ったところだ。」

「大仕事の前には休養と準備。これ、怪盗の鉄則な。」

「いつからそんなものが…：まあ、僕も賛成ですけど。」

「決まりね。それじゃあ、帰還しましょう。」



夕ごはんも済ませ、蒼葉山公園。

アジトことキャンピングカーで双葉と休憩中だ。

「翼、双葉。ちよつといいか？」

ソファアでゴロゴロしてたら突然のソフィア。

「どうしたー？」

「何となくだが…渋谷に戻れそうな気がするんだ。」

「え？」

「ジェイルの方だ。何となく、『入れそう』って気がしてな。」

「へー…なら、キーワードを入れれば行けるのかな？」

「おそろくな。」

「なら、今から行くか！」

「え、今いるの三人だけだよ、双葉!？」

「入口くらいなら大丈夫だろ。」

「まあ、それもそっか…」

すぐにEMMAを起動。『ワンダーランド』と言うと…

『キーワードが入力されました。ナビゲーションを開始します。』

「おお、ホントに行けた！」



ジェイルに入る時の空間を揺らぎを過ぎると、足元には工事現場の足場が。そして顔を上げた先には鳥かごのない705。どうやら、本

当に渋谷ジェイルに来たらしい。

「スゲー…でもどうやったらできるんだ…」

と、横から声が。双葉ことナビ、それとソフィーもいる。

「私でも理解し難い。でも、仙台ジェイルには同じ感じはしなかったから、たぶん王がいなくなったことが関係してる。」

「んー…裏口機能みたいなもの、ってことかな？」

「そんなところだな。」

「それ以前に、主がいなくても存在してる異世界自体が初めてだからな…」

わたしたちが持つてるパレスの知識を当てはめ続けるのも、限界があるかも。」

「なら、前提知識自体がないのかな。」

それなら、パレスとかを知らない僕やソフィーが有利になったり…？」

「そうはならんやろ！」

「なっとるやろがい！」

「とにかく現実に戻ろう。戻ってどこに飛ぶかが気になる。」

「あー、確かに。…てか、渋谷に飛んじやったら不味くない？」

「そうじろうがどうにかするだろ！知らんけど！」

「ええ…」



戻ってきた先、視界に映ったのはー

キャンピングカー。

「仙台に戻ってきたっぽいな…」

「渋谷じゃなくてよかった…」

「世の中、そんな都合の良いことはないってことだろーな。」

双葉がそう溢したが、まあ、うん。

「今都合の良かったのは仙台に戻ってくる方なんだけどね…」

キャンピングカーの中に入るが、みんなは戻ってきていないらしい。スマホには相変わらずソフィアがいるが。

「うう…やっぱ異世界行ったら疲れるな…」

「今日はもう寝るのか?」

「いや、まだそういう気分じゃ…」

「ほう…良いスイーツを知ってるけど、それでも食べる？」

「おお、ナイス情報！」

「なら今から行こっか。ここからも近いし！」

「案内要るか？」

「大丈夫だよー。」

そうしてその店に来たわけだけど…

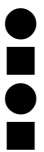
ーCLOSEDー

本日の営業は終了いたしました

「なん…だと…!?!」

まさかの閉店。思わず背中からドサアと倒れこんでしまった。

「し、しっかりしろ！　おい、おい！」「極主夫道」のアレ



ー8月3日（木）ー

渋谷ジエイルに戻れるのをシェアした後を迎えた翌日。

今は、王城突入前の準備時間だ。

「昨日はごめん…。開店時間確認してなかった…」

「そんな気に病むのか!？」

「いや、うん…なる。」

「別に、今買えば良くないか？」

王城に行く前だし、そういう意味でやる気?をつけれると思うぞ。」

ソフィアはそう言う。なら今行くか…

「よし、王城に行く前だし、しっかりエネルギーつけてから行くよ!」

「よし、いざ行かん!」

で、昨日向かった店に到着。今度は開店しているな。

確か…店主さんに言えばいい筈。そうして気難しい感じの人に話しかける。

「すみません。『至高のずんだパフエ』を一つ。」

「…合言葉をどうぞ。」

「…ズンダシロウ。」

そう言うと、店主さんの顔が穏やかになった気がした。

「…すばらしい。淀みなく言うその言葉、長年の品種改良の末に生まれたあの枝豆を知っている、と。そしてよく見ればその眼…この仙台への愛が見える。そして、後ろにいるお嬢さんのためという慈愛も。

いいでしょう。カウンターにてお買い求めください。」

そしてカウンターに連絡する店主さん。代金を払って受け取ったのは、とてつもなく豪華なパフエ。

フルーツ、クリーム、そしてずんだ。まさに至高と言えるだろう。

「す、スゲー…これが昨日、翼が言ってたヤツか…」

「これが『至高のずんだパフエ』…。うまそうだ。」

パフエを見て驚きの声を出す双葉のソフィアを横目にキャンピングカーの中へ。

そして双葉と半分にして食べることに。

「おお、ウマツ！」

「いやー…いつ食っても美味しい…」

「てか、よくこんな美味しいパフエがあるって知ってたな！」

「何年前か前、お爺ちゃんが教えてくれたんだよね。『合言葉を言わないと買えないパフエがある』って。」

「知る人ぞ知るとい感じなのか。」

「実際そうだよ。ネットにも出回ってる情報じゃないし。」

「……確かにそうみたいだ。」

「あの店主もエスパミみたいだったよな！翼の考え読んでたし。」

「仙台への愛ってのはまあ…自分でも自覚してるよ?。」

「わたしのためってのもだろ？」

「え？ ……まあ、うん…」

「……ヤベ、言ってるわたしも恥ずい…」

「…？」

双葉から目を逸らしているが、恐らく二人揃って顔赤くしている…
よな、これ。

その後は食べるどころじゃなかったというわけではないが、食べる
ペースは目に見えて遅くなった。…が、溶けきるまえに何とかなっ
た。

とにかく、これでエネルギー補給完了。王城に突入する準備を本格的
にやっておこう。

To Be Continued…

#17 Fixed

準備完了、いざジエイル。

見えた光景にあの日の渋谷ジエイルのような異様すぎる雰囲気は感じられなかった。まあ、あの時が特殊だっただけか。元々僕たちは怪盗なんだし。

「証」はすべて手に入れた。今なら王城に潜入できるはずだ。」
「目指すは王城だ。行くぜオマエら！」



魔王の腹心を打ち倒し、王城を駆け上がる。そして問題なく鳥かごのもとへと着いた。

渋谷ジエイルと違い、内側には建物があった。

「この鳥かご…渋谷の時と同じね。」

「で、夏芽のヤローがこん中でふんぞり返ってやがんのか？」

「早速ご対面といきたいところだが…。ソフィー、どうだ？」

話を振られたソフィーだが、当の彼女は上を指さしている。

「また鍵がかかっているな。誰かが触れて、心声を聞き出す必要がある。」

ソフィーの言う通り、そこには錠前が。龍の様子が金色であしらわれている。

「よし、じゃあシノビ頼んだ！」

「え、何で僕!？」

「あんな痛そうなのソフィーにやらせるわけないだろ…」

それにまあ、頑丈そうだし。」

「いやいや…」

ちなみに実際そうではない。異世界での身体能力も忍者に寄せているのか、速度が高い代わりに紙耐久なのだ。

「一度感電済みだしな。」

そう言っただと頷いているフォックス。ジョーカーは僕がやる前提で心配してくれていて、完全に僕がやるムードだ。

「仕方ないですねー…。これ普通に痛いんですよ?」

「私なら大丈夫だぞ?」

「いーのいーの。任しといて。」

「ありがとう、シノビ。」

傍に近づき、改めて鳥かごを見上げる。なんだか檻のように見えたそれに手をかざし――

バチリと電流が流れるような感覚がした。

まったく、たいした実力もない若造が…

まあまあ、これも我々のためですから…

「…やはり、何か聞こえてくるな。」

「この声に関することが、夏芽安吾の心の傷ということ…?」

「たぶん。この会話の内容からトラウマを負った場所を特定すればいい。」

「アリスにとつての秀尽学園みたいな場所ってことね。」

「…とにかく、もう少し聞いてみよう。何か手がかりがあるはずだ。」

みんなの声を聴きながらも、改めて聞こえてくる声に耳を傾ける。

…編集長、もう少し声を抑えてください。

もう戻ってくる頃ですから。

だがね、愚痴の一つも言いたくなるよ。

あの駄文を読まされる身にもなってくれ。

熱意はありますけど、それだけじゃねえ。

才能は遺伝しなかったようですね。

…ああすいません、ガトーレコーヒーをもう一杯。

はい、かしこまりました。

まあ、せっかく捕まえた金の生る木だ。

逃がす手はないからな。

編集長も人が悪い…

……………どういう、ことだ…

そこで声は聞こえなくなった。痛みだけが残るので、すぐに手を放す。

「いってて…やっぱ痛かった…」

「だが、お陰でかなり声は聞けた。」

「話はよくわかんねーけど、場所は喫茶店か…?」

「ああ、『ガトーレコーヒー』と聞こえた。」

「ガトーレって、チエーンのカフェだね。」

でも、仙台駅の周りではあまり見かけなかったかも。」

「こっちじゃ数が限られてるなら、探し回る手間が省けそうだな。」

「とにかくこれで、トラウマ部屋のヒントもゲットだ。」

「それじゃ、現実でその店を探しますか。」



軽く休憩を挟み、改めて仙台駅前に集合。

「よし、ガトーレコーヒーの調査を開始する！　まずはこの辺に何店舗あるかだー！」

双葉が一声上げると、すぐにソフィアが反応した。

「ガトーレコーヒーだな。仙台駅の付近には一つしかない。」

「調べるの早っ。」

「ここから少し歩くけど、私が目的地まで案内する。」

「ほんとに凄いなソフィア。板についてるといっつか。」

「うう…いつも『ナビ』やってるわたしの立場が……」

「まあまあ、双葉も十分すごいじゃん。」

「翼の言うとおり、適材適所というやつだ。双葉には双葉にしかできないこともある。」

「確かに、おイナリみたいな変態キャラは誰もマネできないな。」

「誰が変態だっ！」

「んじゃ、とりあえずその喫茶店まで行ってみねえ？」

「そうだな、出発するぞ。」

「OK、任せろ。」



ソフィアのナビについて行くと、程なくして到着した。

「……こね、ガトーレコーヒー。」

「コーヒーの香り漂う、普通の喫茶店だな。」

言われてみれば、確かそんな香りがする。ルブランに通っていたおかげだろうか。

「本当にここで合ってるのかな…？」

「…キーワードを入れてみるしかねえな。」

「ですよー…」

「…じゃあ行ってみよう、トラウマルームへ。」

「ト、トラウマルーム…？」

杏さんに同感。突然何を言い出したんだ…？

「たった今わたしが名付けた！　トラウマ部屋ってのもなんか言いにくい。」

「殆どそのままだな…」

「なんでもいいから早く行こうぜ？」

「ここに鳥かごを開く『鍵』があるはずだ。キーワードは覚えてるな…？」

「無論だ。キーワードは、『プリンスオブナイトメア』！」



トラウマルームに到着。

内装は喫茶店のようになっており、恐らくガトーレコーヒーの中だろう。

「渋谷のときと同じだな。ここにナツメのトラウマが…」

「一体、何があった…？」

「シッ！ あそこ、誰がいる！」

クイーンが示した先はカウンター席。そこでは、スーツを着た二人が話しているようだ。

…あの二人、パーティーで見たような…？

『本当によかったんですか？ あんなクオリティで大賞なんて。』

夏芽安吾：毎度応募してきますけど、万年一次落ちのヘボ作者じゃないですか。

中身もテンプレ丸出しの駄作。他の候補の作品とは雲泥の差ですし。』

『な、何だって…？』

「この声…夏芽安吾か…？」

『嘘だ…彼らは僕を評価してたんじゃ…』

言葉からして、あの二人は編集者といったところか。

そして、夏芽の声にも気づかず二人は会話を続ける。

『いいんだよ。彼はあの文豪・夏芽漱吾の孫だぞ？』

売るためには話題性が必要なんだ。どうせ中身なんざ誰も気にしないさ。

本人は、自分の実力で取ったと思っ込んでいるようだがな。』

『自分の実力もわからないなんて、本当に哀れな男ですな、ははっ。』

『違う…僕だって必死に…！』

『ま、俺たちに必要なのは数字だけさ。』

言いつつも、編集長らしき人は椅子を降り、こちらを向く。

『せいぜいうまく利用して、甘い汁吸わせてもらおうとしよう。』

それで売れば、本人も文句ないだろ？ ハハハハハハ！！

「こいつら…!」

「来るぞ!」

高笑いと共に、編集長はあの二対の腕を持つ怪物へ。部屋は牢獄へと変化する。

『才能のない若造が何を書いても——無駄、無駄、無駄なんだよ!』

「こいつ、渋谷の時の…!?!」

「気をつけろ! 前のヤツとは持つてる武器が違うぞ!」

マチエツトナイフを握り、番人は襲い掛かる。それを目の前にして、戦いを仕掛けに行った。



「効いてるぞ! あとちよつとだ!」

繰り広げられる戦闘も、もうすぐ終わりらしい。

『駄作でも金のなる木だ。世間が飽きるまでは使ってやるよ!』

そして再び姿を消す番人。だが——

「——見切った!」

背後に感じる殺気を感じ。振り下ろされる4本のナイフを躲し、呪怨の籠った一撃を叩き込む。

「ドロンをうまく躲して反撃……。あつ」

「だから忍者とは程遠いからね！」

ソフィーの察しを軽く受け流しながらも奴を見ると、瀕死なのが目に見えて解った。

「信念なき刃など無力！ そのナマクラ…俺が叩き折ってやる！」

ゴエモンを顕現させると、吹きすさぶ冷氣によって番人は周りのシャドウもろとも氷漬けになっていく。そしてフォックスは氷塊の中へと一人突貫し――

――切り捨てる！

一閃。

『せいぜい甘い汁を吸わせてくれよ、夏芽先生？ ヒヤハハハハハ！』

断末魔のように奴は叫び、番人を撃破したのだった。

◇

シャドウの気配がなくなると、トラウマルームはカフェの姿へと戻る。

作戦会議がてら、席の一部を使うことにした。

「やれやれ、片付いたか。」

「これで鳥かごん中に入れるな。さつさと突っ込もうぜ。」
「でも、さつきのつて…」

意気込むスカルとは逆に、パンサーは先程の戦いで発していた番人編集長の言葉が気になっているよう。

「夏芽安吾が大賞を受賞したのは実力ではなく、編集者が祖父の名を利用するためだった。」

「…やはり、奴の小説には裏があつたようだな。」

「でも…本人悪くないんじゃない？ 何度も応募して努力してたみたいだし。」

「それが実を結んだと思つたらあの言われようだ。プライドはズタズタだつたらうな。」

「…編集さんたちも酷いよ。実力不足を認めてるのに、話題性だけで受賞させるなんて…」

ノワールはそう話し、ジョーカーも肯定している。

「だが、それが悪事に手を染めていい理由にはならないけどな。」

「…俺には、奴の気持ちか少しだけわかる。」

「フォックス？」

「盗作まがいの作品で名声を得て、偽りの美談で大衆を煽り…」

そればかりか、『改心』の力を使い、他者を洗脳してまで虚栄に酔い痴れる。

奴が今しているのは許しがたいことだ。愚かとしか言いようがない。

…それでも、夏芽が長年陰で努力していた事実が変わりはない。」

彼らしい言い回しで、フォックスは言葉を紡ぐ。

「創作とは孤独であり、その孤独と戦うのは本当に苦しいものだ。」

そして結果が出せなければ、誰も評価などしてくれない。

この報われぬ暗く惨めな時間は、永遠に続くと思えてくる。

…俺も、ひとつ間違えば奴のように、醜悪な姿を晒していたかもしれない。」

「おイナリ…」

「同じ創作者として共感するところがある、というわけですね。」

僕の言葉に、フォックスは首肯で返した。

「俺には皆がいた。だから道を誤らずに済んだ。だが、奴には誰もいないらしい。」

虚飾の栄光に意味などないことは、奴自身が一番よくわかっているはずだ。

しかし今は、本当に書きたいものから目を背け、盗作まがいの小説を執筆し続けている。

…誰かが目を覚まさせてやらねば。」

「…今回はずいぶん燃えてるな、おイナリ。」

「創作に生涯を捧げようとするものとして、奴は放っておけんからな。さあ、行こう。予告状を出し、奴を玉座から引きずり下ろす！」

その宣言と共に、僕らはトラウマルームを離れるのであった。



アジトに戻るが、時刻はいつの間にか夜になっていた。

「んじや、あとは予告状だな。」

「ああ、ナツメ本人にネガイが奪われると自覚させ、物質化させる。」

「予告の方法はどうしましょうか……。渋谷と同じようにするのが

手っ取り早いですかね？」

「いやー、それはちよい厳しめ。

あれは渋谷だったから、人が多くて速攻で拡散したけど、ここじゃちよつとな。」

「うーん…何かいい手は…」

僕の案も厳しそうだと言葉。全員が考え込んだところ――

うああくん！ おかあさーん！

子供の声が聞こえてきた。

「迷子…かしら？ 私、ちよつと行ってくるわ。」

「ならば、自分も行こう。」

蓮さんと真さんが行ってくるらしい。そうしようとした途端、見知っている顔が見えた。長谷川警部補である。

前かがみの姿勢をとって話しかけているところ、何とかしてあげようとしているようだ。

…まあ、見た目が胡散臭いせいで大丈夫そうには見えないが。

と、警部補がスマホを取り出し、耳に当てる。電話かな？

「…安が迷子…如き…で出られねえだと？ ふざけんなテメエ、それでも警察官か！」

それとも何だ、自分の子でも放つとくつてののか？ 子供が泣いてりや大事件だろうが！」

公園に響く怒声。子供は怖がったのか、どこかに行ってしまった。

「つておい、なんで逃げんだ、おい待て！ 俺は怪しい者じゃねーつて

の！」

「不審者と思われてるぞ…」

「だねー。……でも、仕方なくない？」

「それはそうだなー。」

追いかけている長谷川警部補を眺めながら、双葉とそんな会話をしたのであった。

◇

暫く経つと、長谷川警部補が戻ってきた。

「…まったくあのガキ、世話焼かせやがって。何も逃げるこたねーよな、なあ？」

「ロン毛だし」「ヒゲ生えますし」「声でかいし」

「何よりオツサンですからねー…仕方ないんじゃないんですか？」

「そんな息合うくらい言えるモンなのか…？ あとオツサン言うな。」

「だが、いいところに来てくれた。ゼンキチの意見も聞かせてくれ。」

「いいぜ、俺たちは協力関係だからな。」

「夏芽のジエイルは確認できて、もう一歩というところなの。だけど、予告の方法で悩んでいて。」

「予告…？ ああ、渋谷の街頭テレビで流れたアレか。」

ああいう派手なのはもうやめとけよ。何度も放っておけるほど、警察もバカじゃねえぞ。

たとえ人助けとはいえ、法に触れるようなマネは控えろ。」

「うーむ、オトナの正論。伊達にオツサンはオツサンじゃないな。」

「お前…オツサン呼び止める気ねえな…」

…まあいい。とにかく、もっとシンプルな方法を頼むぜ。」

「予告状を確実に読んでもらえばいいんだよね…」

あの人が来る場所を先に知っておければ、仕掛けておくこともできそうだけど…」

何か良い手は。そう思った時、ソフィアが反応した。

「だったら、うってつけのイベントがある。駅前の本屋で、夏芽がまたサイン会をやるらしい。」

そこなら、間違いなく夏芽が現れる。サイン会は開店と同時に、朝の10時からだ。」

「なるほど、開店前に忍び込んで、会場に仕掛けておけばいいと。」

「おい、さっきの話聞いてたか？ 勝手に忍び込みでもしたら建造物侵入罪だぞ。」

「そこでオツサンの出番だ。」

「そうそう、私たちじゃ、もし見つかったら捕まっちゃうし。」

「俺だって捕まるわ！」

それはそう。だが、心の中で返しておこう。

「出来ねーの？ ケーサツって意外と権力ねんだな。」

「てか、協力する取引だったよな？ オトナが約束破るのかー？」

「ぐ…お前ら…」

「よし、決まりだな。では俺は、予告状の準備に取り掛かろう。」

「ああ、頼むぜユースケ。それからゼンキチもな。やり方はお前に任せるぜ。」

「頼りにしているぞ。」

「マジで、俺がやんの…？」

長谷川警部補はしよげているようだが、やる以上準備はしているよ。祐介さんも、早速文章を考え始めたようだ。

To Be Continued…

#18 Dragon of Nightmare

虚飾のペテン師、夏芽安吾。

他者を貶め、着想を盗み、私腹を肥やす大罪人。

仮初の王冠で悪行を重ねる貴様を、我々は看過しない。

貴様が奪った人々のネガイ、今宵我々が頂戴する。

—8月4日(金)—

善吉さんがどうにかしたらしく、予告は成功。サイン会の会場に貼り付けまくったらしい。

いぎ鳥かごの中に入ると、夏芽らしいシャドウが堂々と立っていた。

「フン…ずいぶん遅かったな、怪盗団。いや、悪しき勇者たちよ。」

「ようやく会えたな、魔王さんよ。」

「アンタがみんなから奪ったネガイ、返してもらおうから!」

「覚悟するんだな。」

それでもなお、夏芽は動かない。いや、動じていない。

「…くくっ、ははははは!」

愚かに過ぎるな。己の置かれた状況さえわからないとは。」

「奴の出で立ち…間違いなく、『プリンスオブナイトメア』の魔王だな。」

「いかにも魔王、って感じだね…。四天王の人たちは普通の服だったのに。」

「そう言うと、あの四人の扱い雑過ぎませんかね…」

「フツ…貴様らはわざわざ我の罠に足を踏み入れたのだ。」

ここは、我の我による我のための世界。断罪の魔王が、偽善の勇者に鉄槌を下すために作られた空間。

この場所において、貴様らは羽虫以下の存在に過ぎん。

自らの悪行を懺悔しながら、汚い悲鳴を上げて死ぬがいい。」

「ネガイを奪って好き勝手してたことを棚に上げて、よく言うわね。」

「お前が魔王だってんならよ、勇者の俺らにやられんのが筋だろ？」

「フン、貴様らは…その偽善を振りかざし、どれだけの魔族の命を奪ってきた？」

「わー…カンッペキに主人公の魔王サマになりきってるな、コイツ。」

お前は何を言っているんだと言いたい。ツツコミどころがどんどん増える…

「御託はいい、さっさとかかってこい。」

どれだけ虚勢を張ろうと、貴様は恐れている。その偽りの玉座を奪われるのをな。」

「何だと…?」

「そのハリボテで作られた幻想…俺たちが打ち破ってやる!」

とその時、周囲の雰囲気が一変。相変わらず夏芽は姿勢一つ変えな
いが、何かが起きようとしているのは間違いなかった。

「どいつもこいつも俺をコケにしゃがって…! いいさ…そこまで言うなら見せてやろう。」

俺の真の力、思い知れ!

同時にその場から消えた夏芽シャドウ。直後、鳥かご全体が揺れ始めた。みんなが慌てるのも束の間、背後から何かが天井を突き破る。

前方に現れたのは、黄金の鎧を身にまとう龍。夏芽の本気の姿なのが直感で解った。

『愚民どもが魔王に挑もうなど笑止！ 我が顎で噛みちぎってくれる！』

「ちよ、まさかのドラゴンですかあ!？」

「みんな気をつけろ！ あいつは手強いぞ！」

龍の咆哮が魔王の間に響く。ボス戦の開始だ。



激戦が始まって暫く。

夏芽は龍の力を存分に使い、自己強化やブレス、爪を振るう肉弾戦を激しく繰り出す。

だがこちらも負けてはいない。

クイーンの的確な指示のもとでペルソナをうまく使い、周囲の地形や道具を利用して確実に体力を削っている。

すでに尻尾部分の鎧は砕け、翼も塗装？がれのようになぼろだ。

『ク…人間どもがちよこまかと…！』

才なき者が、才ある者の邪魔をする。その愚かさがわからんか!』

『その言葉、そっくりそのままお前に返そう。』

『お、俺に…我に才能がないと言うのか!』

「他者の言葉を横取りした紛い物のどこに才能を見出せる？」

今のお前は…己の魂も誇りも投げ捨てた——三流以下の作家だ!』

『クソ…クソクソクソ!』

貴様も同じだ！ 我を否定したあの編集者どもと…！

驕り高ぶったその愚かさ！ 思い知らせてやる!』

そして顔を振りかぶる夏芽。

「みんな、回避よー！」

クイーンの言葉に合わせて動く、先ほどまで立っていた場所は豪炎で焼かれる。…が、見た目だけのようで、出力はそれほど高くなさそうだった。

『ハハハ！ どうだ！』

今のはアギダインではない……アギだ！』

「なんかどつかで聞いたセリフだな！」

ナビとハモったが、今はそれどころではない。油断せず、このまま続けていこう。



また暫く。こちらはまだ行けそうではあるが、夏芽を見るとその鎧は壊れかけていた。

「オラよっー！」

そしてスカルが一撃を叩き込むと——亀裂が鎧中に行きわたり、首の周りを除いて鎧が完全に壊れた。

そしてその下だが、龍に似つかない細い体。下着一枚とグローブだけのみずぼらしい姿だった。

『あああつ！ 俺の体がつ！』

お前ら俺に…あつ、我に触れるでない！』

「その身体すら鍍金めっきだったか。どこまでも紛い物とは、哀れな…」
「文字通り化けの皮が？がれたのね。このまま決めるわよ！」

その言葉に合わせ、召喚されるゴエモン。そして夏芽は氷漬けになるよう四肢を拘束された。

「宴もたけなわ！」

一気に総攻撃を仕掛けていく。

爪を折り、翼を貫き、鱗を切り刻み、そして――

――幕を下ろす時だ！

魔王、討伐完了。

『グハ…！ ば、馬鹿な…』

「この…我が…魔王が敗れるというのか…」

戦闘は終わるが、夏芽は定位置にいたままだ。

「終わりだぜ、魔王さんよ。」

「観念しておくんだな。」

そしてその顔には、焦りしか見えていなかった。

「ま、待て……！ お前に世界の半分を……！」

どこの竜王だよ。いやあいつ龍だったか。

突っ込みかけたその時、顔以外が前に倒れ、階段を滑り落ちていった。

そしてともに転げ落ちるほぼ裸のシャドウ。どうやら服装はハリボテで作っていたもので、顔出しパネルのようにしていたようだ。

「ま、魔王の衣が……！ 魔法の鎧が……！ み、見るな！ 見るなああああぁー！」

「あれが……本体なの？」

「みたいだな。結局、アイツ自身も全部ハリボテだったってことだ。」

「これまでだ、夏芽安吾。」

「なんの苦労も知らないクソガキどもがッ……！」

「まだだ、俺にはまだ、作家としての名声がある！ 大賞を取って！ 本まで売れた！ 俺には……まだ！」

膝から崩れ落ち、傍から見れば万事休す。それでも奴は諦めていないらしい。

「……お前は、それで満足か？」

それを、フォックスは一蹴した。夏芽も、何も返せない顔をしている。

「人を欺き、洗脳まで手にした栄光は、本当に、お前が望んだものだったのか？」

「本当のお前は、何のために……何を欲して、小説を書き始めた？」

「俺はっ！ 俺、は……クソ……クソ……クソが！」

俺だってな……俺だって、頑張ったんだ！

読んで、読んで、寝る間も惜しんで読んで！ 書いて、書いて、死ぬ気で書き続けた！」

そして「なのに！」と言葉を続ける。

「俺がそうやって必死に書き上げた小説は、夏芽漱吾の孫が書いた小説に過ぎなかった！」

誰も！ 誰も、認めてはくれなかった！ 俺の努力を！ 俺の作品を！ 俺自身を！

…どいつもこいつも、上辺に踊らされるクズばかり…！ 認めろよ！ 夏芽安吾の努力を！ 認めよおおお！」

正直、僕は創作者ではないので夏芽の言葉を完全に理解するのは可能ではない。

だが、自分を認めてくれなかったことに対する心からの叫びだったのは理解できた。

「——認めてやる。」

「…え？」

「お前が必死に小説を書いてきたことを、俺が認めてやる。」

創作というものは、どんな分野であれ孤独だ。お前は、その孤独と戦い続けてきた。

歯を食いしばり、己の魂を込めた作品を、何度も何度も、出版社に送った。

その努力を、その精神を、俺が認めてやる。」

「う…」

その叫びを、フォックスは静かに受け止める。そして言葉を紡ぐ。

「いかに技術や発想が優れていても、戦いを放棄し、去る者は多い。

諦めず、何度でも作品を生み出せる。それはどんなものより優れた才能だ。」

かつてお前は、確かに戦い続けていた。それだけは仮初の経歴じゃない。

だから…また一から這い上がってこい、夏芽安吾。真つさらなキャンバスにこそ、描ける絵もあるはずだ！」

言葉を詰まらせる夏芽。フォックスはこちらに振り向き、

「…俺も、みんなが信じてくれたからこそ、自分が進むべき道を選べた。

己を偽ることをやめ、一からやり直すことができた。

今度はお前を…この世界にたった一人だとしても、信じていてやる。」

「…クソ…ガキが…言いたい放題言いやがって…」

…けど、ああ…そうだよな。こんな嘘まみれの姿なんて…」

呟く夏芽。直後、自分の両角に手をかけ、

「…いらねえッ！」

自分の手で、折った。

「俺は、俺は必ず這い上がってみせる！ 自分の実力で、もう一度…必ず！」

祖父の小説のような…多くの人の心を掴めるような作品を…

みんなに誇れるような素晴らしい小説を、必ず…書いてみせる！」

「…ああ、一人の読者として、お前の作品を、楽しみに待たせてもらおう。」

「…ははっ。ほんと、馬鹿だな、俺は。どうして、ずっと忘れてたんだろう…」

俺が…俺が、本当に欲しかったものは——」

その言葉だけを残し、夏芽のシャドウは消えていった。直後、鳥かごが崩れ始める。

「…鳥かごが崩れる。さあ、脱出するぞ！」



鳥かごからネガイが散らばっていくのを確認し、現実世界。

ひと段落ついたが、モルガナは、今回もまたジェイルそのものが崩壊しなかったことが気がかりらしい。パレスとは別の存在と結論付けていた。

とにかく影響を確認しようとのことで、この場から離れることに。

「…なあ、翼。」

そうしようとしたとき、ソフィアが声をかけてきた。

「さつきから何かザワザワする。これは一体なんだ？」

「ザワザワ…？ 突然どうしたの。」

「私にもわからない。」

夏芽は必死に頑張ってたのに、途中で間違っただけを始めた。夏芽は…おかしなやつだ。」

「でも、夏芽は改心できたはず。きつとこれからだよ。」

「もう一度這い上がるって言ってたな。」

祐介は、夏芽が間違っていたのは、一人だったからと言っていた。そのことを考えると、胸のあたりがザワザワする。たくさんの人がおかしくされて、夏芽は倒すべき敵だったのに…

「この感覚は何だ？」

「んー…多分、祐介さんと同じ気持ちだと思う。」

「祐介と…?」

そうやってソフィアは目を見開いた。

「…そうか、だから祐介は夏芽を助けたのか。

夏芽があんなことをした理由が、とても哀しかったから……。…なんとなくわかった。

哀しみは人を苦しめるが、救いもする。人間と人間が支えあうきつかけをくれるんだな。」

「それがソフィアの答えか…。バツチリじゃない?」

「任せろ。く♪」

「なら、僕たちも行こっか。」

「そうだな。」



人の多い場所で通行人の話聞いてみるが、誰一人夏芽の話をしていないようだ。

「…これでいい。偽りの力で手に入れた栄光など、あいつには相応しくない。」

「これも、祐介が彼の目を覚まさせたおかげね。」

「なかなかイカしてたぞ、おイナリ。」

「ですね。まさに勇者って感じでした!」

「うん。勇者おイナリが、この地に平和をもたらしたのだー!」

「…ありがとう、みんな。」

だが、安心はできん。まだ本人を確認したわけじゃない。

「今はとにかく、動向を見守るしかなさそうだな。」

「ふう…じゃあ一段落したってことで、お風呂にでも行かない? も

うクタクタで…」

「そうだね、少しリフレッシュしてから、車に戻ろうか。」

「…ってことで、ソフィア先生、おなしゃーす！」

「一番いいのを頼むよ！」

「OK、任せろ」

#19 Time of Fall

—8月5日(土)—

夜、仙台市内の記者会見会場にて。

『…皆様、本日は会見にお集まりいただき、ありがとうございます。』

こうした場をご用意しましたのは、皆様にご報告と謝罪をさせていただきます。ためです。

まず、拙作『プリンスオブナイトメア』が受賞した創海社大賞につきまして…』

そう前置きを作り、本人たる夏芽安吾は語りだした。

『賞を、返上させていただこうと考えております』

それと共に、フラッシュが次々に点滅しだした。夏芽の顔には、反省の色しか見えていない。

『また、これまで発行した書籍もすべて回収…返金措置を取らせていただきます。』

理由といたしましては、『プリンスオブナイトメア』の受賞は、私が夏芽漱吾の孫であることのみを理由に決定された、所謂八百長だったためです。同作品の内容も、数ある人気作品から内容を剽窃、盗用したものに相違ありません。

加えて、病気の女性のためなどと、嘘のエピソードで皆様の同情心を煽り…』

どうやら、あの話も嘘だったらしい。話題性だけで人気を得たとはいえ、そこまでして人気を得たかっただろうか。

『ちよ、ちよつと先生！ 何を勝手なことを仰っているんです！』

『オイ、この会見は中止だ！ 解散、解散…！』

そう考えていると夏芽の横から編集者らが現れ、解散を促し始める。自社のスキャンダルのは種は消しておきたいのだろう。

『…下がっててください。これは！ 僕なりの、はじめなんだ！』

夏芽はそう言い放つ。このやり取りを見て、会見に来た記者たちも何かしら疑問に思っているようだ。

中でも、僕らよりとは言わないが真実に近そうな推察を口にした記者もいる。

そんな中、仲間の声が記者会見場にこだました。

彼ら——蓮さんと祐介さんは、カメラに映りそうな位置に立ち、夏芽らに向かい合っている。

『な、なんだ君たちは…』

『…俺は許さないぞ』

『君は…パーティーの時の…。あの時は、本当に…すまなかつた』

『逃げることは許さないぞ、夏芽安吾。帰ってくるんだらうな？』

『え…？』

『文壇に戻った時には…他でもない、夏芽安吾の小説を読めるんだらうな！』

目を見張る夏芽。自分を見てもらいたいという想いは、シャドウを介して伝わってしまったのだから無理はないだろう。

『次は、みんなに誇れるような小説を読ませてくれるんだらう?!』

『待っているぞ』

『…ありがとうございます、ごぞいます』

『なんだあの子たち…？』

訝しむ記者の一人をよそに、夏芽はマイクに向き直った。

『私は、この件を反省した後、いつか必ず戻ってまいります。たった一人でも、私の物語を読んでくれる人がいる限り。』

僕は——ずっと、小説を書き続けたい。かつて僕が祖父の小説によつて救われたように、誰かの心を救えるような……そんな作品を……！』

立ち上がる夏芽へ再びフラッシュが湧き、会見はそこで終わった。

◇

「……まったく、会見に乱入とは恐れ入ったぜ。無茶してくれやがる」

記者会見場の外で、善吉さんはそう口にした。

「……すまない。どうしても声をかけておきたかった」

「ま、いいけどよ。」

「じゃ、俺は行くぜ。夏芽安吾の事情聴取をしなきゃならん」

「そっか……。謝罪して終わりじゃないんだもんね」

「善吉が仕事してる！　なんかホントの警察っぽい！」

「ぽいじゃなくて警察だ。すぐ済むから、先に車に戻って待ってろ」

善吉さんはそのまま向かっていく。自分たちも引き上げることにした。

◇

「…と、ここまでが夏芽の自供内容だ」

アジトに戻って暫く、善吉さんが自供内容と彼のスマホを持ってやってきた。その内容だが――

「E・M・M・Aでトモダチになったら、相手が信者になってくれたか…」

言っていたことはアリスと概ね同じである。

「夏芽のスマホも、アリスのと同じだな。E・M・M・Aも本体も特に異常なしだ」

「また収穫なしかよ…」

「収穫なしとは言っていない。例によって誰かが覗いてた痕跡はあつたぞ」

双葉の分析結果もそんな感じだ。

「そこも含め、アリスと似てますねー…」

「アリスのスマホを誰かが監視してたってヤツだよね？」

「夏芽にも仕込まれたのか？」

「で？ 相手はわかるか？」

「…スマン、わからん。痕跡があるだけだ」

「アリスもナツメも…何者かに監視されていた…か。なあゼンキチ、警察はそれ知ってたか？」

疑問を呈するモルガナだが、訊かれた善吉さんは首を横に振る。監視者自体、双葉が見つ付けてくれて発覚したものらしい。

「E・M・M・Aを使っていること以外で、アリスとナツメの共通点は、この監視者だけだ。」

それを知らなかった警察が、どうして一連の事件が同一犯だと思っ
たんだ？」

「まあ今回は色々特殊だったが…主に犯行内容と時期だな」

「時期？」

「どの改心事件も似たような時期…ここ3カ月の間に起こってる。言
わなかったか？」

「3カ月前っていうと、EMMAがリリースされた頃だな」

「母さんが事件に巻き込まれたのも、爺ちゃんがサイン会でキーワー
ドを貰ったのも2ヶ月前…大体同じですかね？」

「まあEMMAが犯行に使われてんだから、そうなるわな」

「誰かが悪用しているのか…？」

「ありえるけど、第3者がやるのは相当ハードル高いぞ」

「やっぱ作った会社が怪し過ぎんだろ。確かマンボーだっけ？」

「マデイスですね。合ってるの『マ』だけ…」

「一応そつちのこともアレコレと調べちゃいる。」

だが、相手は世界的大企業だ。理由もなく踏み込むわけにもいかな
くてな」

「何も怪しい点は見つかってないんですか？」

「ああ。今のところ、関係者を探ってみても、怪しい情報は出てこな
い。」

その監視者つてのがマデイスの関係者なら、立派な証拠として踏み
込めるんだがな…」

そこまで推察した善吉さんは一呼吸置き、

「…お前らはこの事件、黒幕がいると思ってるのか？」

「それはまだわからん。共通点もあるが、別々の事件かも知れないし
な」

「…他の事件も調べて、共通点を見つけていくしかねえだろうな。

捜査の基本だ。共通点とそうでないものを増やして絞り込む。今
は事件を1つ1つ追っていくのが一番の近道だろうぜ」

「…確かに、今は俺たちにできることをしていくしかないさそうだな」
「他のジェルや王を調べていけば、新しいこともわかるかも知れないしね」

祐介さんや真さんは賛成らしい。まあ、僕もそうなのだが。

「んじゃ俺は、先に札幌へ向かって本来のターゲットの周辺を洗っておく。」

8月8日に札幌で待ち合わせるぞ。当日また連絡する」

「3日後…車なら余裕で着けるわね…」

「別に急ぐ必要はねえ。それまでターゲットは日本にいないからな。」

……：：：「そーいーや、七夕祭りが近くなかったか？ 仙台の七夕祭りは有名だぞ。美味しいもんが揃い踏みってな」

「確かに、あちらこちらに見事な飾り付けがされていたな…」

「とにかく3日後だ。忘れんなよ」

話はこれで人区切りとなり、アジトの中は怪盗団の面々だけになった。

「…休め、ということでしょうね」

口を開いた真さんはそう言う。案外、善吉さんも素直な人間ではないらしい。

「…オツサン、意外といいところあんじゃん」

「じゃあ、せっかくだし浴衣来て七夕祭りに行かない？」

「浴衣といえば、去年の花火大会の日は雨に降られて散々だったわね」
「だから浴衣リベンジ！ それに、あの時はまだ双葉も春も、翼くんもいなかったし」

「賛成！ 浴衣でお祭りなんて素敵！」

「そうしようか」

「じゃ、決まりな。ソフィア、浴衣売ってる店たのむ！」

双葉がそう頼むと、ソフィアがすぐに反応した。

「4軒発見。案内は任せとけ」

—8月6日（日）—

夜、祭りの会場。昼間にみんなで浴衣を買いに行き、男性陣とモルガナは先に会場に到着していた。周りを覗くと、見渡す限りに屋台と群衆が広がっている。

「すっげー、屋台だらけじゃん！」

「さすがは仙台の七夕祭り、賑わっているな」

「凄いでしょう？ こっちじゃ『たなばたさん』って言うらしいです。政宗様の時代に始まった祭りだとか」

「へー、あの銅像のオッサンか」

「オッサンと呼ぶな。奥州の雄、独眼竜・伊達政宗公だ」

「どんだけ気に入ってたんだ…家来かよ」

竜司さんのツツコミには思わず同意。だが、夏休みの前から度々布教していたからこちらにも非があるようにも感じる。だが後悔はしていない。

「これはどの屋台から行くべきか迷うな。どうする、レン？」

「色々あるが…やはりお面が気になるな」

手にした団扇を煽りながらそう答えている。

「ああ、異世界で馴染みがあるせいかな、どうしても目が行くな」
「俺はもう買ったぜ？ ガキの頃みたいで懐かしいわ」

確かに、既に買っているようだ。浴衣も相まって結構似合う。

「てか、あいつらまだかよ？」

「レディは支度に時間がかかるのさ。むさ苦しいオマエらと違ってな」

「お前が一番だろ。毛のカタマリだし」

「パツキンむしるぞコラ！」

なんだこのやり取り。遠目にみながら猫と金髪ヤンキーの会話を暫く見ていると、

「お待ちせ〜！」

女性陣も到着したよう。

「おおくアン殿！ 似合ってるぜ〜！」

「へへ、ありがとモルガナ」

「ごめんね待たせて。帯結ぶのに時間かかっちゃって」

「待った甲斐があったな」

「ありがとう。そう言ってもらえると光栄ね」

「やはり絵になるな。むさ苦しい空気が一気に涼やかになった」

「どうせ俺らはむさ苦しいっすよ…」

「てか竜司、似合ってるんじゃない。制服よりいいかも！」

「大きなお世話だったの！」

「でもそのお面のチョイスはセンスあるぞ。イエローは夏によく似合う。」

わたしも水風船買ってきた！ やっぱ祭りはコレがないとな」

ウキウキしながら言う双葉だが、それが自分を含め軽い地雷になつた…

「え、水風船？ ヨーヨーじゃないの？」

「いや、水ヨーヨーではないのか？」

「ちよつと待つてよ、ヨーヨー風船でしょ？」

「いや…水風船…」

「レン、オマエはどう呼んでるんだ？」

「ヨーヨーか水ヨーヨーだな」

「それってどつち…？」

「ふふつ、みんな楽しんでるわね。私たちも負けてられないわ。屋台で何か食べましょうか」

「うん、いい匂いでお腹空いちやつた」

「見ろ！ 焼きそば、焼き鳥、かき氷の定番から、東北名物こんにやく串までなんでもござれだ！」

「いよつし！ じゃあ突撃ー！」

自然と話題は祭りのことになり、屋台の方へと向かっていく女性陣。

「ワガハイたちも行こうぜ。すっかり腹が減っちゃまった」

「だな、片っぱしから食い尽くす！」

「もはや七夕は関係ない気はするが…異論はない」

「私も祭りに興味がある。金魚すくいとか見せてくれ、翼」

勿論と大きく頷き、みんなについて行く。そして――

各々がバラバラになってこの祭りを楽しむことになった。



「なーなー、次はあれとかどうだ？」

「賛成」

現在、露天が商店街のように立ち並ぶ場所の一角で、双葉と行動していた。勿論ソフィアも一緒である。

バラバラになって行動するとはいえ、ぼつちで行けとは誰も言っていない。双葉が誘ってきたのもあるし、僕自身も乗り気なのだから。

話を戻して
閑話休題。

双葉が指さした先は射的。よく見るライフルのレプリカが4本ほど並び、鈍く光る小皿には小さなコルクが5個横たわっている。

射的は僕も好きだ。遊びとはいえ実銃を構えることができる、非日常の2段構え。そして的に当てたときの達成感がそこにはある。FPSはやる口だし、異世界で実際に銃を扱うわけだから即答するのは当然だった。

「すみませーん、一回分お願いしますー！」

射的屋のおじさんに代金を払い、一丁を手取る――

「なあ、私にも見せてくれ」

としようとしたが、スマホからソフィアの声が。そういえばと心に眩き、双葉にスマホを持ってもらうことにした。



「いやー少年、全部落とすとは恐れ入ったよ！」
「いえいえ、それほどでも」

結果だが、命中率100%。実際に何かを撃つと良い経験になるらしい。射的屋のおじさんも賞賛している。

「謙遜なんてしてないでさあ！ 欲しいもの、オマケに何か持っていないよ！」

「えー…」

別に、欲しかったものがあつたわけでもない。ただ撃ちたかつたらやっただけで、落とされたのも無作為に選んだだけだ。

「…双葉、何か欲しいもの、ある？」

「うえっ!? えーと、じゃあ…あれ」

拍子抜けした表情を見せる双葉。ちよつと間を置いて指さしたのは、仙台限定のフェザーマンフィギュアだ。何故こんなものがあるのかと思いつつも狙わなかったものだが、欲しいものは欲しいのだから。

「じゃあ、あれで」

「あいよ」

フィギュアを取り、僕に渡される。それはすぐさま双葉の手へと渡り、目を輝かせた。

「二人とも仲良いんだねえ。兄妹？」

「…」

揃って言葉に詰まる。身長差はあるが同年齢だし、かと言って否定

したら要らぬ誤解を招きかねない。

結局その答えは有耶無耶にし、その場を去った。



射的屋を去って暫く。

「そういえばさ、翼のその浴衣めっちゃ似合ってるよな！ 竜司よりはイイ。実家から持ってきたのもあるのか…？」

「おおーそれは有難い。確かに、これは毎年の夏祭りように買ってくれたやつだからね。」

そこで、浴衣を取りに再び実家を訪れたときの爺ちゃんの言葉が不意に蘇る。

…彼女連れてこいって言われても、いないんだよなあ…。明日出発だし、どうしたものか。

「……翼、ここってどこなんだ？」

「…？ どしたの、双葉」

実はまだ二人＋ソフィアで露天を改めて歩いているのだが、唐突に双葉が言い出した。

「あいや、これって集合場所どこだったっけって…」

「……………」

言われてみれば、二人で露天巡りをしている間に地図とか見なかったような…

「……僕たち、迷った？」
「かもな」

スマホからソフィアもツツコんでいる。

「どどど、どうする!?! みんなとの合流ハードモードだぞ!?!」
「ちよつと待て、位置情報は……」

数秒もすればすぐさま地図アプリが開かれ、点が2つ。

「とりあえずこの位置と集場所を出しておいた。方向を合わせて行けば合流できるはずだ」

おおよその方向をカンで見してみる。だがその方向は人でにぎわっており、通るのは難しいいわけで。

「……これは……」

双葉が唸るが、これは同意だ。……選択肢はアレしかないのか。

「双葉、これ抜けるよ」

「ええ!?! でも、途中ではぐれるのは……」

「だよね……」

……手、繋いで行く?!

「んー……なら、後で色々分けてくれよ! 仙台の美味いもん、わたしも色々食べたいからな!」

「現金だなあ……」

とりあえず荒っぽくも双葉の手を取り、足早にその方向に向かう。
……顔が熱を帯びている気がするのは、気のせいだろうか。それとも暑さ？

ちなみにその後。

「……全然違う方向だった……」

「何やってんだよ翼あ……!」

「……すまない。周辺のモノからもっと方向を推察すればよかった。」

行っただと思えば実は全くの別方向であり、双葉にポカポカ叩かれて同じことになったのは別の話。

To Be Continued…

#20 Scientist And…

—8月7日(月)—

『…皆さんも知ってのとおり、人生とは、日々『選択』の繰り返しです。今日の朝食は？ どの服を着て家を出よう？ そんな、ほんの些細な『選択』に始まり…

研究分野、就職先、結婚相手、人生に大きな影響をもたらすような『選択』…

そう。人は常に『選択』の答えを…『最適解』を求めて生きています。

マデイスは、そんな皆さんを、AIという切り口から手助けしたいのです。

EMMAは、人々の生活と社会に寄り添う新しいAIの形をご提案します。

正確に、より多くの情報を収集、処理し、皆さんの『選択』の一助となるような…』

東鳳大学の講堂、その中心でそう語るのは近衛明^{コノエアキラ}、EMMAの運営を行うマデイス社の社長その人である。祭りの後に善吉さんから連絡が来たのだが、それが「明日、東鳳大学でマデイスの社長が講演に来る」というものだったのだ。

というわけで休暇モードから一転、何か裏がないか探りを入れるために講演に来たわけだ。

「…いかにもやり手の社長って感じだな」

「…凄いね…堂々としていて、自身に満ち溢れてる感じで…」

会社の方針や展望もきちんと示して、聞く人を引きつけてる…」

社長令嬢の春さんもそう言う。確かに、あの姿勢や声というか。なんとというか、気迫や信念のようなものを感じた。それも、共感できそうなの。

「確かにそうね…特に怪しい事は言っていないみたいだけど…」

「EMMAのおかげで、マデイス社の株は鰻登り。今じゃ間違いなく日本有数の大企業だ…」

「んー…そんな有名な企業が黒幕だとしても、メリットはあるんですねー…」

「だが、EMMAがジェイルに関係しているのは確かだ。なにしろ入り口だからな…」

「直接的にせよ、間接的にせよ…マデイスが無関係とは思えないわね…」

「なあレン。この一連の事件の真犯人、つまり黒幕が別にいると思うか？」

みんながマデイスに向けて思考を巡らす中、不意にモルガナが話しかける。講堂の中で猫が小声で鳴いているわけだが、大丈夫だろうか…

そしてその質問に対し、蓮さんは肯定で返している。

「ワガハイも…いると思う。」

王を改心させても、ネガイを開放しても、あのジェイルって異世界は消えることが無い。きつとまだ何かが残っていて、それがあの空間を維持させているんだ…

「それが黒幕…という事？」

「わからねえ。ただ、肝心の王が、EMMAのことをよく知らなかっただろ？」

「確かに…アリスも夏芽も、供述内容は同じだった…」

「…だとすれば、王以外にEMMAを利用しているヤツが居るのかもしれない」

「それがマデイス社の誰かなのか…」

「謎の監視者なのか…」

「他ならぬ社長のこいつか…」

「はたまた、それ以外の第三者か…」

「結局、オッサンの話に戻るんじゃないかねーか？ 色々と事件を解決して、情報を増やしてくしかねーってさ。」

俺ら、心の怪盗団がする事は変わらねえよ」

「竜司、珍しくいいこと言うじゃん」

「そうね…その意味ではこの講演も貴重だわ。最後までちゃんと聞いておきましょう」

本当に珍しく良いことを口にした竜司さん。真さんの言う通り、なんとか寝ないように頑張って講演を聞くようにした。

……近くで寝息のようなものが聞こえた気がしたのは黙っておこう。



しばらくして、講演は予定通り終了。やはり怪しいことは口にしておらず、誰がどう見ても普通の講演のようだった。

そして寝息の本人だが――

「よく寝たわー…で、シャチャョーは何だった？」

「…シバいていい？」

「どーぞどーぞ」

「何でだよっ！」

「いや、ダメでしょうよ…。みんなが聞いてる中で寝るなんて…」

やはりしれっと寝ていた。こういうところが竜司さんらしい…

「とりあえず、怪しいような話は無かったわね。まあ、簡単に出るはずもないけど…」

「つーか、腹減ったし帰らねえ？ あの社長、話なげーんだよ」

「確かに、それも——」

「ねえキミたち…さっきの話、本当なのかい？」

と、言いかけたときに女性の声が。しかも、どこかで聞き覚えのあるソレだった。

一斉に振り向いた先には、白衣を着た女性。確か…一ノ瀬さんだったか。

「キミたちが心の怪盗団だったの？」

「ううえっ!？」

…!?!? この人、どこからそれを!?!?

ちよつと気を抜けば杏さんと同じことを言いそうだ。

「貴方は牛タン屋の…」

「一ノ瀬さん…ですよね？」

「き、聞かれてた!?!」

「いやあ、猫の声には敏感だね。もう講演の話よりそつちが気になっちゃって」

「モ…モナーッ!」

「ワ、ワガハイッ!? いや、でも実際に聞かれたのはオマエらの声だろっ!」

「でも、講堂の中に猫の声ってのも…ハイ」

「とにかく、どーすんだよこれっ!」

「…大人しく白状するしかないだろうな」

と蓮さんが決めたその時、一ノ瀬さんが突っ込んできた。

「あー、ストップ、ストップ! 大丈夫だからっ!

とにかく、ここはもうすぐ閉まる。詳しい話は外でしょうよ…」



蒼葉山公園にいったん集まり、改めて一ノ瀬さんと話をする。
まとめると、

- ・ 僕らの話は講演が始まってからのすべてを聞いていた
- ・ 東鳳大学にてAIを専門にしており、EMMAのベースを作ったのは一ノ瀬さんである
- ・ 金欠もあってマデイスに売り、売った後のことはわからない
- ・ EMMAを売ったことでマデイスと縁ができ、今回の講演もそれによるもの
- ・ 彼女も招待されており、仕方なくあの場所で聞いていた
とのこと。

そこまで聞いたところで、どうしようか話をすることにした。

「こいつあ…予想もしない展開だな…」

「ベースを作ったって話、本当かな？」

「けど、マデイス社の社長さんが直接講演に来るなんて、凄いと思うよ。」

あの人の依頼でそうなったのなら、それだけ認められる人って事じゃないかな？」

「確かに…招待までされてたしな…」

「どうする？ EMMAについてなら、願ってもない情報源だぞ？」

「裏を返せば確かに…ですが、流石にリスクが大きいのでは？」

怪盗の視点から見てみれば、一ノ瀬さんは完全に信頼できる人とも言い難いですよ」

「わたしが怪盗つてのもバレてるみたいだからな…」

「どうするよ？…蓮」

話を竜司さんから振られる蓮さん。「大人しく真実を話そう」と答

える。

「無理に隠そうとしたところで手遅れか…」

「ならばいつそ、引き入れて情報を聞き出すか。虎穴に入らずんば虎子を得ず、だ…」

祐介さんから僕とは逆の提案。みんなはその方針で動くようだ。

◇

一ノ瀬さんに合流し、怪盗団のこと、異世界のことを全て話した。すべて聞いた一ノ瀬さんは驚いた表情を見せ、

「その話、本当なのかい？」

「いや、まあ、信じられないだろうけどよ…」

「なあ、善吉の時みたいに、異世界に連れて行けば…」

「凄い！ やはりそういう世界は存在してたんだ！ いや、そうでないと確かに説明できないっ！」

興奮したような声を上げた。しかも信じていそう。解せぬ。

「まさかEMMAがその入り口として機能してるなんて…いや…可能性を考えれば…」

「あれ…納得してる？」

「いやあ、めーっ…ちやくちや興味あるよ！ 何だい!? その超展開！」

「はは…ま、まあ、信じてもらう手間が省けて良いか…」

「どっかの公安のオッサンとは大違いですね…」

「一ノ瀬さんは、なぜEMMAが入り口になっているのか、心当たりあ

りませんか?」

「いやいや、そんなの知らないよ。異世界があるのだったって驚きなのに、そんな機能、思いつきもしない」

「…だよなあ…だとすると…あの機能は誰かが後付けしたのか…?」

「ネガイを奪って人を『改心』させてしまう世界か…うーん…興味が尽きない…」

「あ、いやいや、ここは悲観すべきか…わが子が悪用されてるんだし…」

表情をコロコロと変える一ノ瀬さん。そんな彼女に向け、蓮さんは「協力してほしい」と頼み出た。

「ええ。私たちと取引をしませんか?」

「おお、いいね。怪盗っぽいじゃないか! 私としても是非手伝わせて欲しい。」

全く無関係な話でもなさそうだし、何よりこのまま放置では好奇心で死にそうだつ!

でっ、私は何をすればいい? 何を調べさせてくれるのかな?」

で、この乗りようである。ノリノリである。解せぬ。善吉さんとは大違いだな…

「そうね…今、一般に出回っているEMMAの事を調べて下さい。一ノ瀬さんが作ったものと、何が違うのか…」

「なるほど。要は今のEMMAの秘密だね。誰かが手を加えたなら、その正体も知りたいと」

「あ、それと、確か、あつちで手に入れた謎のジャンク品があつたよな?」

中身の解析とか頼めたら、あの世界の正体がわかるかも」

「おお、なんか色々渡してもらえるのかな?」

いいね、いいよ、もちろんだとも。資料として買い取らせてもらう

よ」

おっと、ここでジャンク品が出るのか。

売り物にもならないし、ジェイルで拾ったものだからと一応で取っておいたのだが、ここで使うことになるとは。

買い取るということは、それなりの値段で買ってくれるのだろう。ジェイルで戦うときの装備のための良い軍資金になりそうだ。

「取引なら、私たちからも何か出さないとね。えっと…」

「いや、今の内容で十分だよ！ グイグイと研究意欲が湧いてくる！」

真さんの言葉を遮るように一ノ瀬さんが挟む。一応、取引は成立となった。

「あつ、そうだ。一ノ瀬さんはAIの専門家ですし、ソフィアのことも聞いてみますかね？」

「え？ ソフィア？」

僕が提案すると、一ノ瀬さんは途端に目の色を変える。ソフィアに合わせるため、スマホを見せた。

「よ。私は人の良き友人『ソフィア』だ。よろしくな一ノ瀬」

「これが…ソフィア…？ へえ…よろしく」

「反応薄っ！」

確かに、今までとは打って変わって興奮した様子は微塵も感じられない。

わざとらしいとさえ思えてきた。

「あ、いやいや、ちよつと今までの情報量が多すぎて…流石の私も混乱してきた…」

「渋谷の方の異世界で見つけたAIなんですが…何か心当たりはありますか？」

「いや私もわからないけど…後でコードでも送っておいてくれる？」

「ほ？ お、おー！ わかった！」

「これ、私の連絡先教えとくから！」

双葉に自身のスマホを見せる一ノ瀬さん。双葉は驚いた様子だが、自分のスマホに問題なく入力している。

「それじゃあ！ これからの展開を楽しみにしているよ！ じゃあね！」

その言葉と共に、彼女は嵐のように去っていったのだった。

「な…なんか、急に帰っちゃったな…」

「ソフィアのこと、何かわかるとよかったのにな…」

「私なら大丈夫だ。皆の役に立てればいい」

「今は仕方ねえか…」

「…つか突撃されて忘れてたけどよ、次、札幌だろ？」

「ああ、ワガハイたちも早く出発しよう。北海道でゼンキチが待つてるぜ」

「おう、待ってるよ、北海道！」



一度解散し、各々が仙台を発つ前の準備を始める。そんな中の僕と双葉だが、公園を離れて住宅街にいた。

「なあ、わたしで本当にいいのか…？」

「いいというか、双葉以外にこんな頼めないって…」

実は頼んだのは解散直後なのだが、その内容は「彼女のフリをしてくれ」というもの。

爺ちゃんから「仙台を離れる前に彼女を連れてきてくれ」と、いないの頑なに言われたものだから、今更「いない」なんて言えなくなってきたのだ。

ついでに、昨日の祭りのために借りた浴衣も返そうと思っている。

「…つと、着いたよ」

「…デカ過ぎんだろ…」

そうこうしているうちに到着。初めて来た双葉は門の大きさに驚いているよう。そして僕だが、やや震えた手でインターホンを押した。

「ウエルカム！」

暫くすると、爺ちゃんがどこかのスペイン人のようにして迎え入れる。すぐに客間に案内し、お茶を入れに引っ込んでいった。

「手際良いな、翼の爺ちゃん。慣れてるのか？」

「うーん…多分。仕事柄とかじゃないかな？」

そうこうしているうちに爺ちゃんも戻ってくる。取り敢えずで話をすること。

「…連れてこいとは言ったんじゃが、何から話そうかのお…」

勿論最初に口を開いたのは爺ちゃんだが、僕らからしてみれば早く帰りたい。

「あーそういえば、昨日借りた浴衣だけど——」

「翼が持つてても良いぞ。東京で夏祭りがあつた時、何かと不便じゃろう？ こつちに来るときは翼が持つてくりやよかろう」

ちよつと声が棒読み気味てるが、ばれていなさそうだ。浴衣も話はずいたから安心だな。

…それはそうとして早く戻りたい。彼女（偽）だと気づかれればたまつたもんじやないし。

「そうじゃ、えーつとそつちの…」

「さ、佐倉双葉であります！」

「佐倉ちゃんじやな。…翼のことは、彼女としてどう思ってるんじや？」

「えちよ、それはさすがに…。第一わたしらは——」

そこまで言いかけたところで双葉は口を嚙む。

——付き合つてすらいない。大方、そこまで反射で言いかけたころなのだろう。

…まあ、友達としてちよつとは気になるのだが。

横を見ると、訊かれた双葉の頬は少しだけ赤くなつており、

「……翼は、わたしよりもずっとすごい。コミュ力あるし、大体敬語だし、色々わたしよりすごい」

呟くように口を開いた。あと、敬語のことは要らなくない？

「でも、一緒にいたいときは居てくれるし、翼からも面白いこと提案してくれるし……」

……翼と一緒に居れて、わたしはすごく嬉しいぞ！」

何か、胸が熱くなるような感覚がした。

双葉の本音なのかは確かではないし、紡がれる言葉は短かったのだが、僕の心に響いたのは間違いなかった。

「そうかそうか。なら、将来も安泰じゃろうなあ…」

よし！ わざわざ来てくれてありがとうな！」

そして言葉を聞いた爺ちゃんだが、今ので満足した模様。「僕は？」
と思ったが、訊かれないだけマシだったということだ。

もうみんなのところに戻っても良さそうで、門まで送り届けてくれた。

「ほっほっほ、良い旅を！」

「じゃーねー！ また今度ー！」

大きく手を振り合い、蒼葉山公園に戻る。

——のだが、何かよく分からない感情が心に残った。

双葉が僕について言及したとき、ただ嬉しかった。だが、本当にそれだけなのか？

一度双葉の方を見てみる。のだが、彼女の顔はこちらからは見え
ず。うつむいた感じだった。

そんなことも悠長に考える時間なぞ僕らにはなく、すぐに合流、北海道に向けて出発することになった。

この感情は、一体——

Ep. 2 Walled City Covered in
Os
tentation

Complete

C
o
n
t
i
n
u
e
d

o
n

n
e
x
t

e
p
i
s
o
d
e
:

Ep. 3 A Silver World Fil
led with Gluttony
#21 Boys, Be Ambitious!

—8月8日(火)—

車中泊での一泊を経て、予定通り札幌に到着。

「サツポロ、キター!」

「札幌中央市の中心部か。周辺の雄大な自然と対照的に、賑やかだな」

テンションが上がっているような双葉と、構図を切っている祐介さん。僕としても、本州よりも涼しい気温のお陰で気分が心地よい。

「んで? 雪祭りってまだやってねーの?」

「…それ、ボケてるつもり?」

…前言撤回、凍り付いたように固くなったような気がする。凍った空気を戻したいので、取り敢えずソフィアに訊いてみる。

「それはさておき……ソフィア、ジェイルの反応は?」

「…ある。匂いがプンプンする」

「…オツサンの言った通りかよ」

「となると、ゼンキチが目をつけてるヤツが札幌の王って可能性が高まったな」

「とりあえず、情報収集も兼ねて、この辺りを巡りましょうか」

「でもその前にお風呂! 昨日、入れなかったし!」

「賛成! まずはスッキリしたいよね」

「私の出番だな。500m先に入浴施設があるぞ」

「流石ソフィア、仕事が速い」

「オマエらはお風呂タイムか。その間、ワガハイは情報収集しておく」

「モナちゃんは後で、私が身体を洗ってあげるね」
「な、なにっ？ それくらい自分ひとりで…」

春さんの言葉で明らかに狼狽える様子を見せるモルガナ。猫なのだが、言葉がわかるせいとか妙にわかりやすい。

「…猫は濡れるのを嫌う。なるほど、データ通りだ」

「ワガハイをそこらの猫と一緒にすんな！ データ書き直しとけ！」

「そうだ、私も銭湯に入ってみたい。誰かスマホごと中に連れてってくれ」

「熱々の湯にスマホって…ぶっ壊れるんじゃないか？」

「ほら、とにかく行きましょう。ソフィア、案内はお願いね」



ソフィアの案内で温泉に向かう途中のこと、親子と思わしき家族の声が聞こえてくる。

普通ならあまり気にしないのだが、その内容が内容であり――

おかあさん、果歩ちゃん、よろこんでくれるかな？

…ええ。綺麗なお花を見て、ありがとう、って言ってくれてるわ。

でも、会えないからさみしいよ。天国は遠くていけないもん…

……光景からして、花を供えているようだ。

「あそこで、何かあったのかな…？」

「お花をお供えしてるね。誰か亡くなったのかも…」

「そういえば、ニュースでみたことあるわ。大通公苑で起きた、雪像の崩落事故。」

確か、小さな女の子が犠牲になったって。あそこが事故現場なのかしら…」

「その子や家族のことを思うと、胸が詰まるな…」
「そうだね…」

会話を聞いていると、突然スマホが鳴る。「どうした」とソフィアが声をかけてくるが、彼女はあまり気にしていないらしい。
とりあえず、銭湯に向かうとしよう。



すすしのを暫く歩き、件の温泉に到着。現在は男湯でのんびり入浴中だ。

「ふいー、ゴクラクだぜー…」

「身体に染み渡るな…」

「疲れがとれる…。富士の湯が恋しい」

「富士の湯…：ああ、確かにあそこもいいですねー…」

…声が伸びているのはきつと温泉のせいだな、うん。

「やっぱ広い風呂っていいよな。家じゃこうはいかねーし。翼がそうじゃねーのか？」

「一人暮らしだと、確かにそうですね。まあ、こういうのも好きですよ？」

「今回は長旅になりそうだからな。都度、緊張をほぐすのは重要なー」

「うおおっ、杏やっぱスゲー！」

と、唐突に女湯の方から声が聞こえてきた。

「細いのにチートだろそれ。てか…何食ったらそんなになる？」

「ちよ、恥ずかしいよ。春に聞きなよ、春だつてほら…」

「ひやつ…!? ちよつと!?!」

「おお、やるな春！ こつちも破壊力あるぞ！」

「こら、あんまり騒がないの。私たちだけじゃないんだから」

「「「……………」」」

……聞いてはいけないものを聞いてしまった気がする。

何か、何か話を逸らせるものは…！

「…いい体してるな、竜司」

「まーな、腹筋とかバツキバキ…つて、何の話だよ…」

「蓮さん、もう少し良い話の切り出し方はないんですか…」

「にしても、マジで気持ちよすぎるわ。モルガナも来りやよかったのに」

「ソフィアもな。肉体がないというのも、良し悪しなのかもしれん」

「つーか、あいつつてやつぱ謎だわ。翼はどう思うよ？」

「んー…人の良き友人では？」

「それは聞いたけどよ、なんか『心を学びたい』とか言ってたじゃん？」

「人の心、か…。俺も絵で表現しようと試みはしたが、道半ばだ。」

陰にして陽。美でありながら醜…知れば知るほど、謎は深くなる」

「ふーん…。ま、俺も『心』とかよくわかんねーけど…」

「あいつ、俺らとフツーに話してるし、んなこと考える必要なくね？」

「言われてみれば確かに…。でも、これもソフィアの成長のためでしょうね」

「『心』を学ぶことが成長か…なるほど、AIであるソフィアらしい考えだな」

「へー、そういうもん？ なんかマジメな奴だな、あいつ」

「ソフィアがそう望むなら、応援してやろう。世話になっているのは確かだ」

「ははっ、そうだな。どっか抜けてるところもあるけど」

そこまで話したところで、暫く沈黙が訪れる。

すると、突然竜司さんが「あ」と口を開く。

「どうしました？」

「そういや、翼と双葉ってどういう関係なん？」

「どう…？」

「翼と双葉は友人ではないのか？」

「それは知ってるけどよ、なんかダチにしちや距離が近くねーかって。

そこんところ、どうなん？」

まさかの質問である。

…双葉とは、どういう関係か。その言葉で、昨日抱いた感情が蘇ってきた。

よくよく考えると、あの感情は本当に「友達」から来るものなのか？ そうでないのなら、何から来ている？

祭りの時や、二人でパフエを食べたときだってそうだった。

「——もしかして」

「大丈夫か、翼？」

「いや、大丈夫です」

そして一つの可能性に行きついた。思わず顔を手で覆ってしまったのは仕方ないだろう。

「……先、上がります」

「お、おう……」

断りを入れ、先に更衣室へ向かう。牛乳なんて、存在すら気づかなかった。



色々と済ませて休憩室で腰を下ろす。そこで再び思考を巡らせ「…翼、大丈夫か？」

「！…ああ、ソフィアか」

「大丈夫か？ 少し顔が赤いぞ？」

「…多分大丈夫。温泉の後だしね」

「ならいいが…」

…ようとしたところでソフィアが声をかけてくる。深く言及してこないだけ本当に助かった。

三度物思いに耽ろうとする。が、割って入るようによく聞く声が耳に入った。

「…翼、いたのか」

「……双葉？ 真さんたちは？」

「先にあがってきた。翼もなのか？」

「…まあ、僕もだね」

双葉はこちらが抱く感情など知らず、隣に座る。そして特に話すこともなく、黙ったまま二人きりの時間が過ぎていく。…平静を装い続けるの、案外難しいな。

ここで言えたら良いのだろうが、今は善吉さんが挙げている容疑者をどうにかしないと、という怪盗としての責任がどうしても邪魔をしてくる。もしくは、僕が単なるヘタレなのか。両方なのかもしれない

い。

だが、この感情をほつたらかしのにできるのかと言われれば「N.O」だ。放っておけるほどの人間じゃない。……伝えるならば、北海道での事件を解決してからになるのだろうか。

抱える葛藤は伝えられるわけがなく。双葉の顔なぞ見れず。ただ、みんなが来るまでに気持ちの整理をする事しか出来なかった。

◇

夜、アジト内。善吉さんと合流し、作戦会議開始だ。

心の整理は既についており、少なくともみんなと話す時の声の調子は大丈夫なほどになっている。

「よし、集まったな。改めて札幌の王キングについて話そう。

容疑者の名前は『氷堂鞠子』ヒョウドウウマリコ。驚くなよ、こいつは札幌中央市の現・市長だ」

「現・市長」。その一言で、車内は一気に緊迫した空気が流れる。

「ししし、市長!？」

「うそ…市長って、札幌で一番エライ人ってことでしょ?」

「そんな権力者が…王に?」

「獅童もそうだった。有り得ない話ではない」

「…確かにな」

「…獅童って、あの?」

頭に浮かんだのは、去年起きた「精神暴走事件」の主犯と自白した獅童正義。ガワだけ肯定し、内心は怪盗団ファンとしてちよつとは批判していたのだが、本当にそうだったとは…

……告白した日からクリスマススイブまで、獅童関連の記憶が曖昧なのは別、ということ。当時の翼は曲がりなりにも「無責任な大衆の一人」であり、そして怪盗団のファンだったためにこうなったという作者の個人的な解釈。

「ああ。アイツも、王みたいに認知の力を悪用してたんだ。最終的には、ワガハイたちが改心させたがな」
「ってか、なんでそいつが王ってわかんたよ?」

竜司さんのその質問に、一言

「支持率の異常な上昇だ」

と善吉さんは答える。

「札幌での氷堂市長の支持率は、現在88%。わずか2ヶ月で50ポイントも増加している」

「50?!?」

「スゲーな、いきなり確変したのか」

「すごいというか…普通に考えたら、あり得ない数字ね」

「それだけじゃない。ひと月前、市長の反対勢力でもある市議会議員3人が、突然汚職を告白して辞職した。その後、長い間対立していたはずの議会が、市長の条例案を支持し始めた。

…で、このタイミングで市長改選選挙。いろいろ出来すぎてて、疑いたくもなるだろ。

氷堂は国政進出を見据えてるって噂もある。公安としても捜査に乗り出してるが…今のところ、全く尻尾がつかめてねえ。これをどう思う?」

「…改心、だろうな」

「だろ? だからお前らの出番って訳だ」

「怪しくはあるか…」

「仮にその氷堂って市長、もしくはその周辺の人物が王だったとしたら、確かに出来レースとしか言えないですね…」

「しかし、本当に王かどうかを確かめるには、キーワードが必要だが…」

「それなら問題ない。奴は演説で度々EMMAの名前を出してたらしいからな。街頭演説の中でキーワードを拡散していた可能性は高い」「じゃあ、演説見に行けば、キーワードもわかる?」

「恐らくな。氷堂鞠子の街頭演説は、10日にせずしたのであるって情報だ。投票日も近いし、数千人って規模の群衆が集まるだろう」

「スゲーな…」

「有権者を丸ごと『改心』させているなら、それくらいは当然か…」

「うーん…」

と、春さんが考え込むような声を。そういえば、会議の間はずっとああだった気がする。

「どうかした、春?」

「ちよつと、気になることがあって…。氷堂…鞠子…どこかで聞いたことがあるような…」

「市長さんだもん。ニュースとかでじゃない?」

「そうなのかな…。うん、ゴメンなさい、気にしないで」

「…念のため言っとくが、直接接触しようとするなよ。」

こっちの動きがバレると厄介だ。お前らは演説日まで大人しく観光でもしてろ」

その時、真さんが提案。情報共有もあって、一ノ瀬さんのことを話そうということになった。

そしてひとしきり話し終わると――

「EMMAの開発者と取引した!」

いや待てよ…一ノ瀬久音だったな? イチノセ…イチノ…セ…。

ああ…その名前、報告書にもあったな…EMMAの元開発者、一ノ瀬久音」

「調べてたのかよ？」

「マデイスのことをな。その報告書に書かれてたんだよ。EMMAをマデイスに委譲した開発者つてな。そんなのとよく取引できたな？」

「まあ…色々とありまして…ですな…」

モルガナの鳴き声でバレただなんて言えない…。善吉さんにバレたらモルガナが色々とやばい。

「EMMAを誰かが悪用しているなら、あの人の協力が必要だと思うんです」

「EMMAの元の状態と、今の状態。比較して調べられるのは一ノ瀬くらいだ」

「…なるほどな。報告書を見る限り、危険な奴じゃなさそうだが…：情報源が増えるのは悪いことじゃない。だが、今後はもう少し慎重に頼むぜ。俺はお前らを信用して機密情報を流してんだ。知らない所でリスクが増えるのはゴメンだ」

「そればかりは正論ですね…気を付けます」

「…それに、だ。お前たちが頼るべき相手は俺だぞ。ホイホイ新しい協力者を見つけてもらっちゃ、こつちとしても寂しいってもんだろ」

…おや、善吉さんの様子が…？

「なんか急に協力者アピールしだしたぞ」

「オッサンが頼りになんねえから、俺らでいろいろ動いてんだろーが」

「仕方ねえだろ、認知がどうか俺にわかるか。」

それと、オッサンじゃない。俺は、イケオジだ！」

それと同時に凍り付く車内である。

「…何か言って！」

「…ヒゲは似合ってるぞ、善吉」

「慰めはいらねえよ！」

「そっちが振ってきただろーが…」

「とにかく、10日の街頭演説だ。よろしく頼むぞ」

半ば呆れ気味の僕らを背にして、彼は車を出たのであった。

To Be Continued…

#22 S i g h t s e e i n g

—8月9日（水）—

「わ、すごい！　なんか古そうなのに、超オシヤレ！」

「かつて道庁の本庁舎だった、北海道のシンボル。重要文化財にも指定されてるそうよ」

「これは…素晴らしい。新たな着想が、次々に湧いてくるぞ！」

翌日、札幌市内。街頭演説が明日にあるというのもあって東の間の観光を楽しんでいるところだ。現在は北海道庁旧本庁舎に到着したところである。

「お庭もすごく素敵。花壇にもいろんなお花があつて…」

……あれ、あそこ？」

と、春さんが何か見つけたらしい。言った先には、妙齡の女性と若い男性。両者ともスーツを着ている。

「ちよつとあなた！　花壇の花が枯れてるじゃない！」

「も、申し訳ありません！　ですが、この暑さですから…」

「言い訳なんて聞きたくない。市の名所には、一つの欠点も認められないわ。」

私はこの札幌中央市の最高責任者。あなたなんて、いつでもクビにできるのよっ。」

「ひいつ……どうか、どうかお許しを…」

「路頭に迷いたくなければ、24時間休むことなくすべての花壇を監視なさい！」

「しよ、承知いたしました市長……！」

市長と言われた人は職員をこれほどまでかと叱りつけ、職員の方も礼の姿勢をずつとしている。役所ってブラック企業なのか…？

「こえー…なんだアレ」

「いや待て。今…市長って言ってなかったか？」

「確かに…」

と、こちらに気づいた女性。風貌は、確かに市長と言われればそれらしい。

「…あら。あなたたち、観光かしら？」

せつかく来ていただいたのに、ごめんなさいね。職員の醜態を見せてしまった」

「あ、いえ…」

すると、突然女性が春さんの方に歩み寄る。とても意外そうな表情だ。

「でもそんな…あなた…もしかして『春ちゃん』？」

唐突に親し気に呼ぶ女性。言われた春さんだが、まるで覚えがなさそうな顔。

「えっ…？」

「ああ、覚えてないかしら…。まだ春ちゃんが小さい頃だったものね…」

私よ、氷堂鞠子。奥村社長…あなたのお父様にお世話になった」

「氷堂って…この人が市長の!？」

「みみみ、みんな、落ち…落ち着け！」

「あっ…もしかして…。マリ、さん？」

職員の前とは打って変わってにこやかな笑みを浮かべる市長。それを見て春さんも何か思い出したらしい。

「そう！ 嬉しいわ、覚えててくれて」

「え…春、この方と知り合いなの？」

「そうっ！ うん…そうなの！ 小さい頃にお世話になった、マリさん！」

マリさんは昔、オクムラフーズの取引先の方で、お父様がよくゴルフで一緒に一緒にしててね。私が一人で退屈しそうにしていると、よく相手をしてくれたの」

「それは…なんとも…」

偶然すぎる…。ターゲットが仲間の知り合いなんて、そんなことあるのか？

「まさかの展開だな…」

「春ちゃん…お父様のこと、本当に残念だったわ」

「いえ…ご心配をおかけしてしまつて…」

「何か困っていることはない？ 私はいつでもあなたの味方だから」

「ありがとうございます。でも、大丈夫です。」

会社の経営陣も信頼できる方ばかりですし、大学とも両立させて、私なりに頑張ってます。支えてもらつてばかりではなく、自分で前を向いて歩いていかなないといけませんから」

「春ちゃん…立派になつて…」

「マ、マリさん…みんなが見てます…！」

「あら、ごめんなさい。感極まつてしまつて、つい」

市長と抱擁を交わす春さん。まるで親子のようにも見えてきた。

「今日はお友達と観光だったのかしら？ 皆さん、札幌を満喫してくださると嬉しいわ。」

札幌を気高く美しい街にするために職員にも尽力させているから、どうか安心して。

…ほら！ あなたはさっさと替えの花を用意なさい！」
「は、はい！」

礼の姿勢をずつとしていた職員は、その言葉に合わせて去っていった。

「まったく…私がいないと手を抜こうとするから…」

…ごめんなさい、お見苦しいところを。それに申し訳ないけど、これですれ失礼するわ。

選挙前でいろいろ忙しくて。困ったことがあつたらいつでも言うてね」

表情を二転三転させながらも、市長は去っていった。

「…春には悪いけど、裏表の激しそうな人だったわね」

「マリさん…昔は、誰に対しても優しい人だったのに…」

「本当にあの人がジェイルの王なのかな…」

「というか、さっきの怒り方の時点で、って感じな気がしますね…」

「だな。あそこまで言うか？ 花くらいだよ…」

「…春、大丈夫？」

杏さんが問うが、春さんは憂い顔だ。

「…うん、大丈夫。ちよつと…驚いただけ。」

それよりゴメンね。キーワード…聞けば良かったよね…」

「無理はするなよ」

「ありがとう。でも、本当に大丈夫だから」

「キーワードも気にしないで！ まだ街頭演説があるもの」

「そうだな。後で必ずチャンスは来る。今日のところはひとまず、街でビョードーの噂集めでもしておこうぜ」

「うん…ちゃんと調べなきゃ…」



「なんだこれ…『清掃キャンペーン』?」

夜、すすしのの歩行者天国。周りを見渡せば人の大群であり、それらしさがある。

その中の僕とソフィアだが、バラバラになって噂集めをする中で一枚のポスターに遭遇していた。

『札幌中央市』と書かれているな。市が行っている活動みたいだ。

…調べてみたが、職員が市内の清掃をするキャンペーンのようだ。あまり気にしなくてもよさそうか?」

「ん…多分…?」

スマホから顔を出すソフィア。ポスターから離れる。と言っても、このポスターそのものは街の至る所で見つけられるようだ。

そしてしばらく大通りを歩くと、一軒のドラッグストアがあった。何かないかと中に入って見て回ると、風邪薬や栄養ドリンク、あとはエナジードリンクの類が棚から消えている。

「クソツ…ここもか…」

と、右から声が小さく聞こえてきた。振り向くと、やつれた様子のスーツを着た男。

「な、なあー! この辺でエナドリ売ってるって、知らないか?」

「ちよつ…。そう言われましても、僕は観光客なもので…」

「そうか…」

こちらに気付いた男は突然肩に掴みかかり、疲れの見て取れる雰囲気です。こちらに話しかけてきた。こちらが答えると、やつれた雰囲気がいよいよ加速していく。

「随分と疲れているようですが、大丈夫ですか？　そこまでの状態なら、病院にでも行った方が……」

「……無理だ。二か月前からこの役人はこうだ。」

あの市長、表向きは良い婆さんだが、俺らを見る目はマジで冷てえ。まるで、養豚場の豚を見る目だよ」

愚痴を吐くように彼は続ける。

「俺は、生まれ育ったこの札幌に何か恩返しができないかと思ってこの職に就いた。」

だが現状はどうだ？　真つ黒な環境で市長の奴隷になるだけじゃねえか！」

やる気がなく、そして恨みの籠った声が店内に小さく響いた。

「そういや、去年から音沙汰がなかった怪盗団、ちよつと前に復活したらしいな。」

こないだ仙台にも現れたらしいし、次はココ……とかだったらいいな。

……すまないな、少年。こんな奴のちよつとした独り言、聞いてくれて」

「……いえ、大丈夫ですよ。悪いやつに人生を狂わされたこと、僕もありますし」

「ははっ、そんな若そうなのに、よくそんな経験してるな」

それじゃあな。それでは。

そう言葉を交わして僕は店内から去り——小さく手を握り締めた。彼はきつと、氷堂市長によって人生を狂わされたなんの罪もない人だ。改心とかそういうわけじゃなく、アリスのプロデューサーのように、歪んだ心によって引き起こされてしまったもの。

：彼のような人を早く救うためにも、早く氷堂の改心を成功させなければ。

「：蓮さんたち、こんな思いで怪盗始めたのかな」

「何か言ったのか、翼？」

「いや、なんでも」

改めて、怪盗をやることへの決意を固めた瞬間だった。



—8月10日（木）—

『先ごろ、札幌市議会で汚職事件がありました。大変に恥ずべきことです。』

私は新しい倫理条例を制定し、たったひとつの汚点も見逃さない、断固たる決意であります。

この札幌を、淀みなく美しい街にしたい！ そう、真冬に降り積もる新雪のように！

世界に誇れる、行政を市民が心身共に真っ白なスノウ・シティを目指して！

さあ、皆さん。札幌の大掃除をいたしましょう！』

翌日、すずしのに市長の声が響く。

街頭演説は予定通りに行われ、EMMAのキーワードが出るのも時間の問題だろう。

勿論だが、僕らは少し遠いところから眺めているところだ。

「すっげ…マジで全員信者じゃねーか…」

「確かに凄い人気だよね…みんな『改心』された人たちなのかな…」

「人は人を呼ぶからな…『改心』されてない者も混じってはいるだろう」

「春…」

やはりというか、春さんは憂い顔だ。親のような人がそうなれば、まあ仕方ないようにも思えるが…

そうこうしているうちに、市長のがスマホを出したようだ。

『皆さん、EMMAを利用していますか？ ぜひ、私とトモダチになりましょう！』

市民の皆さんはもちろん、市外、道外、海外…どなたでも構いません、私と繋がってください！

キーワードは、『スノウ・シティ』です！ さあ、遠慮なくどうぞ！』

キーワードを聞いた見物人は、選挙でEMMAを使うことを気にも留めずトモダチ登録をしているようだ。

「みんなトモダチ登録してる…」

「なあ、ここで止めた方がよくねえか？」

「ここで騒いで捕まったら、改心とかジェルとかどころじゃないですよ。今は我慢するしかないですね…」

「だが、キーワードは手に入った。これでヒョードーが王なら、ジェルに侵入できるはずだ」

「このすずしのなら匂いは薄い。安全にジェルに入れると思う」

「準備は整った、というわけだな」

「…行こう、みんな。もしマリさんが王なら、私たちしか止められない。」

これ以上、何の罪の無い人たちの心を弄ぶようなこと、させちゃいけない」

「…だな」

「準備は整った。氷堂を止めに行くぞ」

「…よし。準備を整えてジェイルに突入するぜ！」



「さささささ、寒っ…！」

「なんも見えねえ…！」

すずしのの一角に集まり、ジェイルに突入——したはいいが、待ち受けていたのは吹雪。極寒が待っているのは知らないって…！

みんなは凍えた様子で、ソフィーとモナに関しては何も言わなくなってしまうていた。あと頭に雪乗ってる…

そして吹雪がやむと、目の前に広がるは凍てついた街並み。凍ってしまったのか、氷でできているのかはわからないが。

「ねえ、あれ！」

なんて考えていると、ノワールが一方向を指す。

凍った街並みのその先には、一際目立つ大きな城がそびえ立っていた。

To Be Continued…

#23 Major Cleanup

ジェイルに突入して直後、吹雪をやり過ぎたあと。雪が降り続く札幌ジェイルを、みんなで眺めていた。

「凍てついた街か…。美しいが、どこか物悲しさを感じるな」

「ううう…ない…真夏にこの寒さはない…」

「ジェイルに入れたってことは、やっぱりここの王は、マリさんなんだね…」

「ノワール…」

「…大丈夫。早くみんなのネガイを取り返さなきゃ」

「向こうに王城っぽい建物が見えるぞ。どうする？」

「どうするも何も、まずはあそこでしょうね。というか寒くて動けない…」

「そうね。まずはあの王城を調べてみましょう」



三つの牢獄塔からコアを盗み出しながらも、雪と氷に覆われた札幌ジェイルを進んでいく。

途中、吹雪に遭ってしまったり、それを巨大ストーブで対処したり、スノボで滑走しながらシャドウを薙ぎ倒したりと、かなり刺激の多い攻略だ。お陰様と言うべきか、気温の低い環境でありながら体は結構暖まっている。

「…よし、これですべての壁が消えたな」

大通公苑付近でそう呟くフォックス。牢獄塔からコアを回収しているのは、この壁を消すためでもあるのだ。

「んじや、この勢いで突入すつか！」

「そうだな、ここは一気に——」

ピンポンパンポーン…

スカルとモナが意気込んだその時、どこからか突然、チャイムの音がジエイルに響いた。思わず身構えるが…

『みなさん、御機嫌よう！』

「この声…マリさん!？」

『白く美しい札幌！ その実現のために励んでいますか？ いつもの大掃除の時間です！ 職員は率先して働きましょう！』

手を抜くことは許しません！ 塵一つ残さず！ 美しく清らかに！

札幌を、真っ白で美しい街に！』

聞こえてきたのは市長の声。内容からして職員へのアナウンスのようだが、大掃除とは…？

そんなことを考える暇もなく、今度は前方から何か地響きのようなものを感じた。

「ムツ…!?! 何か来るぞ、隠れろ！」

モナに従い物陰に隠れる。暫くすると、何かの大群が近づいてきた。

ヒーホー！ ヒーホー！ ヒーホー！ ヒーホー！

ヒーホー！ ヒーホー！ ヒーホー！ ヒーホー！

ヒーホー！ ヒーホー！ ヒーホー！ ヒーホー！

『大掃除、大掃除！ ヒーホー！』

『大掃除、ヒーホー！』

『大掃除、大掃除！ ヒーホー、ヒーホー！』

隊列を組むようにしてジャックフロストの大群が目の前を通り過ぎていく。幸い、その多さのせいかわくわくは見つかっていなかった。

というか、この光景はもはや異様……群れすぎて何体いるのかが全く分からない。

「んなんだコレ…!?!」

「すんげー大群…大地の怒りか!?!」

「なんとこの画だ…!」

「大掃除の時間とか言ってたな…。定期的に警戒度を上げてるのか？」

「なら、一旦ここで待機します?」

「そうだな、これじゃ突入は難しそうだ。コイツらがどこかに行ったら、ワガハイたちも一度現実に戻って様子でも見てみようぜ」

モナがそう提案するが、ジョーカーから返ってくるのは賛成でも反対でもなく――

「ヒーホー!」

謎の返答であった。

「ヒーホー!」「ヒーホー?」「ヒーホー!」「ヒィーホオーウ!」「ヒーホー!!」

そしてソフィア、ナビ、ノワール、スカル、フォックスと、ヒーホーという言葉はどういうわけか仲間の間でも広がっていき、まるで新言語のように飛び交っていく。

「なんか伝染^{うつ}ってるし!」

「はあ…何やってんですか」
「もう…バカなことしてないで帰るわよ」

…勿論、僕が参加するわけがなく。むしろ呆れる方だ。
その後は頃を見計い、スカルの悲しげな「ヒーホー…」を置いてジエイルを去るのだった。



現実に戻ると、辺りはすでに夜。人の流れは昼からあまり変わった感じはしない。

「はあ…やっと先に行けると思ったのに、あんな反則だろ…」
肩を下げてそう口にした竜司さんから話は始まった。

「怒りじゃ〜！ 大地の怒りじゃ〜！」
「掃除の時間だと言っていたからな。恐らくは一時的なものだろう」
「とりあえずは仕切りなおしだ。明日に備えて今日は休もうぜ」
「ですね…別に、急かされてることもないですしね」

モルガナの提案に合わせてキャンピングカーへと戻る。
だが、大通公苑に着いた辺りでそれを僕らは見た。

「うっし、じゃあ今日は風呂でも入って——」
……まったく、何度も言っているでしょう！
「ちよ、あれって…！」

遮るようにして聞こえた声の先には、先ほどジエイルで声を聞いた

氷堂市長、そして市の職員らしき男がいた。男の方は、遠目から見てもわかるほどに顔色が悪そうだ。

「あなたたち職員がたるんでいるから、市民も安心して暮らせないのだとー！」

「も…申し訳…ごほつ、ごほつ…」

「なに？ 体調不良なんて言い訳にならないわよ？」

さあ、早く仕事に取り掛かって。市民の期待を裏切らないでちょうだい。

いいわね、遅れた分は寝ずに働いて取り返してもらおうわよ」

「すみません…ごほつ…！」

「あの職員、大丈夫なのか？」

「見るからにフラフラだぞ？ アレで働けてのかよ……」

「早く止めに入るぞ」

すぐさま全員で二人に近づく。市長の方はこちらに気付いたよう
で。

「あら、あなたたちは…」

「マリさん、どうしてこんなひどいこと…」

「…ひどい？ ああ、違うのよ春ちゃん。」

これはこの街に必要なことなの。私も心を鬼にして言ってるのよ。

この一ヶ月間、市の職員が街を掃除する、清掃キャンペーンをやっているの。職員の規律意識を高め、街の治安をよくするためにね。

——そんな大事な職務なのに、この子は…あろうことか遅刻してきた。市民に顔向けできないわ。たるんでいる証拠よー！」

「清掃キャンペーンだと…？」

「さつきのお掃除ヒーロー大行進、まさかコレのことか…？」

僕にも思い当たる節はある。ソフィアと噂集めをしていたときはポスターで見つけたものだが、ジエイルのことと繋がっていたとは

……

渋谷ジェイルでモルガナから色々教えてもらったことに「現実における主の認知は異世界にも影響を及ぼす」とあるが、身をもって理解した感覚だ。

……それよりも、市長の方をどうにかしなければ。

「私が性根を叩き直してあげる。さあ、早く職務につくのよ！」

「でも、こんなに体調が悪そうで……！」

「いい？ 春ちゃん。今の札幌中央市役所は、使えないクズばかりなの。私がこうして1人ずつ更生させないと、どんな悪事を働くかわからないわ。」

市長である私を……裏切って、ね」

春さんの言葉も届かず、逆に市長は春さんに諭すように語りかける。まるで、自分のしていることが正しいと信じているかのよう。

「んなの、アンタが決めつけてるだけじゃねーのかよ!？」

「彼はまず、病院へ連れて行くべきだ。働ける状態とは思えない」

「私が保護します。こっちへ……」

「す、すみません……」

「ちよつと！ 何を勝手に……！」

「もうやめてください、マリさん！」

職員はこちら側に寄り、市長は止めようと声をかける。見ていた春さんは、市長にそう言った。

言われた市長だが、まるで凶星のような顔。可愛がっていた人からそう告げられると、さもありませんと思えるが。

「今のマリさんは、私の知っているマリさんとあまりにも違う……」

誰にでも分け隔てなく優しくあったあのマリさんは、どこへ行ってしまったんですか……？

マリさんの周囲は、いつも笑顔が溢れていた。だれもがあなたの温もりに救われていた……

私にとってマリさんは……お日様の様な、誰よりも温かい人でした……

それがどうして……どうしてそんな風に……」

どうして凍ってしまったんですか……！

「ハル……」

凍ってしまった心への問いかけは、言いかけの言葉によって返される。暫く黙ったのち、市長は

「私は、立ち止まるわけにはいかないの。あの子のためにも。」

「ごめんなさい、失礼するわ」

そう呟き、去っていった。

「…マリさん！」

「追うなハル、アイツはジェイルの王。ワガハイたちのターゲットだ。」

……ジェイルで改心させるしかない」

「放っておけないのわかるよ。でも今は、この人を病院に連れて行くこ
？」

「…うん、そうだね」

「病院は調べといた。急ごう」



職員を病院に送り届け、大通公苑に戻る。春さんの顔は、さすがに良いとは言えない。

「なんて奴だよ、ゼツテー許せねえ。病人相手にあんなマネ……」

「……竜司」

「…悪い」

「でも、私たちと話してる時はいい人なのに、職員さんにはあんなに厳しいなんて……」

「……わからない。何がマリさんをあそこまでさせているのか。あんな人じゃなかった。誰にでも優しい素敵な人だった。それがどうして……」

「何か深い事情があるはずだ。それもそのうちわかる筈」

「うん、あんな風になるきっかけ……すごく辛いことだったりするのかな」

「明日は王城突入ですし、そこできつとわかるはずですよ」

「ああ。それまでは立ち止まらないことだな」

「思わぬ邪魔が入ったが、王城への道は確保してあるからな。明日、ヒョードーのいる鳥かごを目指すぞ」

話は一区切りつき、そこで今日は解散となる。

気になっていなかった救急車のサイレン音が、今日はやけに大きく聞こえた。

To Be Continued…

#24 Bribe

—8月11日(金)—

「これが札幌の王、ヒョードーの鳥かごか……」

「これ、氷？ すつごく冷たそうな色……」

「全てを拒むかのような凍てついた檻……誰も信じられない、という心境の表れか」

無事に鳥かごの目の前に到着。やはりと言うべきか、氷に「覆われている」のではなく氷できている印象が見えている。

「ノワール、顔色が悪いぞ。大丈夫か？」

「……うん、大丈夫」

王城に突入する前はやる気を見せていたが、いざ鳥かごの前に来ると心苦しいのだろうか。

「では、いつも通りやるか。頼むぞ、シノビ」

「はいはい……」

「よく断らねえな……あんな痛そうだったのによ」

「慣れ……ですかね……。結構痛いですけど、皆さんにも同じ痛みはさせたくないってのもありますから」

「私は大丈夫だぞ？」

「ソフィーは大丈夫だろうけど……何となくね」

僕にとってはそのくらい些細な問題だ。そう考えつつ、鳥かごへと手を伸ばす。

「では、行きますよー！」

伸ばした手には、無機質な感覚が触れられる。それと同時に、電流

の痛みが体に流れてきた。

あなたのせいよ！ あなたが……！

あなたが許可したんでしょ！ あんな危ない雪像をつ……！

誠に……申し訳ございません……！

「来たっ……！」

「雪像……？」

前回同様、声が聞こえてくる。先に聞こえた悲痛な叫び声、そして氷堂市長の声だ。

「雪像」とクイーンが訝しげに呟くが、どこかで聞いた気が……

ここで、あの子は……ううっ……

重かったよねえ、痛かったよねえ……

——果歩を返して！ 私の娘を……！ 私の子を返してよおっ！！

今回の事故は……全て……私の責任……です……

本当に、本当に、申し訳……

「……謝ってるのが、市長さん？」

「しっ……まだ聞こえる！」

ノワールの声かけの直後、今度は卑屈そうな男の声が聞こえてきた。

まさか崩落するとは……。でも、責任は決裁した市長にありますよねえ？

私は何も悪くない。この安月給だ。ちよつとくらい、良い思いをしただって——

声はそこで途切れていた。

「今の声が、ヒョードーマリコのトラウマか……」

「雪像、事故って……もしかして、あの公苑のところの……？」

「……雪像崩落事故。あの事故に、市長のマリさんが関わっていた……？」

「その可能性が高いだろうな」

「それが彼女のトラウマ？ 責任を追及されたということかしら……」

「……っか、妙な男の声も聞こえてきたな。なんか人のせいにしてる感じのよ」

「とにかく、重要な手がかりなのは間違いない。一度現実に戻って、真相を確かめるぞ」

その提案に頷く全員。一度、ジエイルを後にするのだった。



ジエイルを去った後、雪像崩落事故についての記事をスマホで探してみる。ソフィアの助けもあり、すぐに見つけることができた。

「……ありました、雪像崩落事故の記事。読んでみますね」

「ああ、頼む」

「えーつと……」昨年の12月、札幌中央市主催の雪祭りで、設置された巨大雪像が崩落。崩落に巻き込まれ、9歳の女兒・七瀬果歩ちゃんが死亡……」

当時も市長だった氷堂市長が謝罪してますが、結局不可抗力による事故ということになってるみたいですよ」

淡々と読んではいいるが、実のところあまり気は乗らない。市長のトラウマに間接的とはいえ関わっているから他人事ではないし、まず人の死についてをこう読み上げるといのは個人的には、とも。

「そっか…あの公苑に供えられてた花は、その時の……」

「マリさんを問い詰めてた声は、亡くなった女の子のお母さんかな……。あれが、マリさんのトラウマ……」

「たぶんあれは事故現場だ。雪祭りの会場、大通公苑のな」

「では、そこに行ってみるとするか」

「ああ、あの辺りでEMMAにキーワードを入力してみるぞ」

というわけで、公苑の例の場所に向かう。到着したその場所には、花束が挿されている花瓶が一つ。

「ここが事故現場…なんだよね…？」

杏さんがそう呟くと、スマホから回答のように反応が返ってくる。

「キーワードを入れると、トラウマルームに行けるはずだ」

「おそらくまた敵が待ち構えてる。オマエら、準備はいいか？」

「…行こう。真実を確かめに」

「うん、マリさんに何があったのかこの目でちゃんと見ておきたい。」

——キーワードは、『スノウ・シティ』！」

『キーワードが入力されました。ナビゲーションを開始します』



トラウマルームに到着。周りが赤っぽいのはいつものことだが、今回は色味が淡く感じられる。

「ハハハ……」

「雪祭りの会場……みたいだけど……」

ノワールの言葉通り、どうやら淡い色の正体は雪のようだ。山のよ
うに積まれたソレのすぐそばにシヨベルカーがあるが、これは崩れた
雪像といったところか。

「おい、あそこ。誰かいるぜ」

スカルが指したところには二人の男。片方は細身でどこか卑屈そ
うで、もう片方の男は腕を前に組んでいる。

しかも、雪像を前にして話しているようだ。

『いやはや、まさか君がリベートを受け取っていたとはね……』

『せ、先生、どうかこのことは内密に……』

『それは構わんが、私にも見返りがないとね。事故の責任をあの人に
押し付けて、辞職に追い込んでやりたい。そして私が市長になる。そ
うなれば、君のことも悪いようにはしないよ。協力してくれるね？』

『は、はい、それはもう……』

『一体、どういうことかしら……？』

その最中、女性の声が割って入る。勿論、声だけだが。

『ヒ……し、市長!?!』

『……おやおや、聞かれてしまったか』

『市長、違うんです！ これはそういうことじゃ……!』

『市長ってことは……ヒョードーか?』

『マリさんは、この密談の現場を見てしまった……?』

『事故が起きたのは、あなたのせいだったのね……!』

『……し、市長も話のわからない人ですね。』

祭りの主催は札幌中央市。税金も投入されてる。安い業者に頼む
のは当然でしょう?。

それで少々の見返りをもらうくらい、職員はみんなやってること

じゃないですか！

それを…雪像が一つ崩れたくらいで…たまたま運が悪かっただけだ！』

『なんてことを…今すぐ警察に連絡します！』

『いい、いいですよ。告発するならすればいい。だけど——あなたも道連れだ！』

『なんですって…!?!』

『あなたの指示でやったと証言しますよ。そうならばあなたも破滅だ。』

あなたは市の最高責任者。署名付きの決裁文書だってある』

『……そういうことだよ、市長。残念だが、君はもうオシマイだ』

『あなた…市議会議員でありながら、不正を正そうという気はないの!?!』

話していた二人の男のうち、腕を組む方は議員のようだ。国会議員だった獅童が悪人なら、市議会議員も言うべきなのか。

『私は、ただ事実を語っているだけだよ』

議員の男はそう答え、卑屈そうな職員はこちらへと歩み寄ってくる。これはもしか…！

『……どうです。私の話を聞く気になりましたか?』

ねえ、市長！

「来るぞ…！」

職員の声が響き、番人へと身体を変える。トラウマルームの中、それぞれの腕に盾を構え、こちらへと向かう。

『私は悪くない……全部、役所の給料が悪いせいだ！』

「この世は金、金、金……金が全てなんですよ、市長！」

「コイツ……市長を脅してたってことかよ！」

「こんな理由があったなんて……マリさんも、すごく苦しんでたんだ」

「考えるのは後だ！ 今はコイツを倒すことに集中しろ！」



『私一人を処罰しても無駄ですよ！ 不正なんてみんなやってるんですから！』

「敵、弱ってきてるぞ！ みんな、がんばれー！」

盾から放たれるとは思えなかった熾烈な攻撃。それをペルソナでいなしつつ確実にダメージを与えていくが、それも佳境に入っていた。

「覚悟しなさい！ その盾ごとかち割ってあげる！」

同時に現れるミラデイ。そしてその衝撃でノワールを中心にシャドウが吹き飛び、一つの空間ができる。

二人はそこで舞踏会のように舞い――

「……覚悟！」

ミラデイのスカートが開き、そこから現れる大量の重火器。容赦なく放たれる銃弾は盾を貫き、周りのシャドウをも巻き込んでいく。

――ファイニッシュ！

その後から飛び出すノワール。大きく振った斧が放つ念動の波動によってシャドウは一掃され、番人も倒れたのだった。

番人を倒すと、トラウマルームも事故現場の風景に戻っていた。とりあえず作戦会議の時間だ。

「片付いたか。これで王の間に潜入できるな」

「さっきの奴ら、なんなんだ？　なんか市長とモメてたな」

「一人は市議会議員。もう一人は……市の職員かしら。」

職員が雪像を制作した業者から、不正にお金を受け取っていたよね」

「いわゆるワイロってやつですね……」

「業者の手抜きか、技術不足かはわからないが、結果、崩落事故が起きてしまった」

「そして、それを知った市議会議員が、事故を利用して氷堂市長を陥れようとした。そんなところかしら」

「ぐぬぬぬ……許せん」

「……これで話の内容はつながった。ヒョードーは、この話を偶然聞いてしまった。雪像崩落事故の原因をな。そして、市議会議員が自分を陥れようとしていることを」

「胸クソ悪い話だぜ。カネと権力欲しさの汚え連中のせいだよ……！」

「……氷堂の気持ちもわかるうというものだな。」

彼女は、周囲の人間が腐り切っていることを知り、ならば自分が正してやろうと考えた」

「だからマリさんは、職員を酷使したり、無茶な倫理条例を制定したり……」

「しかも、市民を意のままに操り、再び市長に当選しようとしている」
「マリさん……」

俯くノワール。こうも話が絡まっていくと、氷堂市長に同情してしまいたい。

「……事情はどうであれ、これで鳥かごの鍵は開いた。アジトに戻って、予告状をどうするか考えようぜ」

モナの提案と共に、トラウマルームを去っていった。



「あれ……蓮さん……？」

トラウマルームからの帰還、そして作戦会議を経ての就寝中のこと。目が覚め、何か違和感を感じて寝床で首を回すと、蓮さんだけがない状況だ。

やや気がかりだが、トイレに行きたくなったので行くことにした。



用を足し、トイレを出て真夜中の札幌を見上げる。車の音が些か静かに感じられる中、少しベンチに腰掛けることに。

ふいに思い浮かぶのは、数時間前の作戦会議のこと。

氷堂市長にトラウマが植えつけられるきつかけとなった今回のモノだが、色々と複雑過ぎる。誰が裁かれるべきなのか。誰が『悪』であるのか。あの場にいた善吉さんは「事故の責任は許可を出した市長だ」と——それが世の中だと言いついていた。そして、「それが世の中かもしれないけど、簡単に割り切りたくない」と返すように言っている。

た真さん。結局のところ改心すべきは全員なのではと思いつくが、そんなのは不可能なことだろう。

だが、法で救えない人を救うのが怪盗団。かつての僕がそうだったように、それで勇気をくれた人がいるのは確かだ。その救う側になりたいと言われると、あまり自信はないが……

とにかく、早く寝るとしよう。明日は予告状を出して決戦だ。それが済んだら、その後は――

――その後、は。まだまだ続く事件の解決へと奔走するのだろうか。

だが、もしそうでない場合は？ 双葉へ密かに向ける感情に向き合わなければ。

上手くできれば良いのだが……

◇

しばらく一人で考え、それなりに気持ちの整理をつけてキャンピングカーに戻る。

到着すると、蓮さんと春さん以外のみんなが外に出ていた。

「お、翼！ どこ行ったか心配したぜ！」

「竜司さん。この集まりは……」

「目が覚めたら蓮がいなくてよ、どこ行っちゃったんだってモルガナや祐介と話してたんだけどよ……」

「私たちも、春がいないって話してたんだよね」

「少し探したら、二人がいるところを見つけたってワケだ。あそこ、見てみるよ」

モルガナが鼻で示した先には、蓮さんと春さんらしき後ろ姿。公苑

の噴水越しでよく見えないが、何か話をしているようだ。

「……何か、相談事ですかね？」

「札幌に来てからかなり思い詰めているようだったからな。無理はないだろう」

「そうね……それに、明日予告状を出すから余計になのかも」

とりあえず、二人にバレないようにもう寝ようということに。

明日は決戦、気を引き締めて行くでしょう。

To Be Continued…

#25 Thief and snow's
e m
p r e s s

心が凍った偽りの女帝、氷堂鞠子様。

他者を意のままに操り、道具のように使い捨てるその冷徹さ。

そして己が権力に縋る貴女を、私達は許さない。

貴女が奪った人々のネガイ、今宵我々が頂戴致します。

予告状を出すことに成功し、札幌ジエイル。今回も善吉さんに頼んだのだが、選挙ポスターに貼り付けたとか。

鳥かごの中へと突入すると、中は氷の宮殿であった。

「待たせたな！ テメエを成敗しに——つてうええええええ!?」

スカルが切り込むが、その勢いは驚きの声と共に消えてしまう。しかし、そうなるのも無理はないわけで。

「ハグツ、ハグツ……うるさいわね、黙ってて」

「な……なんだよアレ……」

「まさか、あれが……マリさん……?」

玉座にいたのは、紛れもなく市長のシャドウ。しかし、彼女の容姿は真っ白な髪に真っ白な服、そして恰幅のよい体だ。現実のソレとは明らかに違う。

巨大なフォークとナイフと手にして料理を口に運ぶ姿は、別人にも見えてくる。

「どうしてあんな姿に？」

「これが、ヒョードーの歪みが現れた姿ってことか……」

怪盗団の話す光景にやっと気づいたのか、市長は食事の手を止める。

「なんなのかしら……あなたたち。私の……邪魔をしないで頂戴！

あと少し……あと少しで私は、市長を続けるだけの票を集めることができる！」

「…違います、マリさん。それはあなたが、人の心を捻じ曲げて奪った、偽物の票なんです！」

「それに、今のままではあなたの部下、職員の人たちが倒れてしまう！」

「誰も信じられなくなるのも解ります。でも、だからと言って人を傷つける理由になるわけがないんです！」

「うるさいわねっ……！ 私の間違ってなんかいない！」

汚職を働く職員は、徹底的に働かせて更生させる！ 私を裏切るクズ市議どもは、すべて粛清する！ 私に従わない市民の票も、私が全部食ってやる！

そうすれば……誕生するのよ！ まっさらで美しい、スノウ・シティが！」

恍惚とした表情を浮かべながらそう語る市長。だが、そんな方法で得る権力なんて間違っている。

「偽物の権力で満足か？」と問うジョーカー。続くように、ノワールは言葉を紡ぐ。

「彼の言う通りです。マリさんが集めた人々のネガイ。それは本来、

人が『選択』すべし心の意志。それを奪って思い通りにしたところで、何の意味もありません。

人は自ら立ち上がって答えを見つけ出す。そのために、この心を授かったのです！

「お、お黙りなさい……！」

「いいぞノワール、もつと言え」

「……マリさん。あなたが人々から奪った数々のネガイ……！ この美少女怪盗と怪盗団が！」

——今宵、頂戴いたします！」

宣言を受けた市長。苛ついた表情で、なんと目の前の料理に再び手をつけ始める。

「本当に……嫌になっちゃうわ……。私の……邪魔ばかりしテ……！」

ひたすらに両手を動かす市長。眺めるのも束の間、一回り、二回りと市長の身体が肥大化していくではないか。

「あなたたちみんな——」

私が食べてアゲルワアア!!!

腕からは三対の触手のような腕を生やし。

肥大化した胴体には醜い顔を浮かべ。

変化の直後に目の前のテーブルを丸飲みにした女帝の姿は、まさに暴食の象徴とも言えた。

「マリさん……あなたは間違っている。みんなのネガイ、返してもらいますー！」

『黙れ……黙れえっ！ あなたたちに何がわかる！』

私を否定する者は……残さず！ 食らい尽くしてくれるわー！』

吐息のようにこちらへと吐かれる大量の冷気。一身にソレを受け、闘いは始まる。



『まだよ……まだ食べなくちゃ……全部私が……食べつくすの……！』

氷の宮殿の中、激戦は続く。身体を真っ赤にして熾烈な攻撃を繰り広げる氷堂シャドウに対し、僕らも防戦ながら確実にダメージを与えていく。

「マリさん、もう止めて！ 優しかったマリさんに戻って！」

ノワールは氷堂を止めんと叫ぶが、勿論というかそんな言葉は届くはずもなく。逆に、氷堂はとてつもない量の冷気を吐き出し、吹雪を再び生み出してしまった。

「く、再び来ると身体に堪えるな……」

「な、ナビ！ ストーブのハッキングは!?!」

「すでにやってる！ ……一カ所できた、南東の角にあるやつだ！」

直後、ナビが示したストーブの場所に視線を向ける。しかし、その前に氷堂が間に立つようにして滑り込んできた。

白い息が口から零れる。吹雪の中で戦うのは明らかにジリ貧ではない。しかし、行こうにも氷堂が邪魔をしているのだ。

ならばと思い立ち、真上に跳躍する。DMRを構えつつシャンデリアの上へと降り立ち、狙うはストーブのスイッチだ。

氷堂もまさか上から撃ってくるとは思っていなかったらしく、放たれる銃弾はスイツチに命中。ストーブの故障はなく、吹雪は止んだ。

「良いぞシノビー！」

「そりやどうも！」

吹雪がなければこっちのものだ。若干優勢になった気がしながらも、戦いは続いていく――



シャンデリアも全て落ち、床についている傷も尋常ではなくなってきた頃。

『ハア……ハア……もつと、もつと食べないと……』

真つ赤な氷堂の顔に疲れが見え始め、動きが鈍くなってきているではないか。

無論、その隙を見逃すわけがなく。

「イルジメー！」「ミラデイー！」

僕とノワール、互いにペルソナを顕現させる。隙を的確に突く斬撃と念動の波動をモロに食らった氷堂は、その場にぐだりと倒れ込んだ。

「覚悟はいいですか?！」

彼女の掛け声に合わせて、全員で一斉に総攻撃を仕掛ける。ありつた

けの火力をぶつけ、そして――

――これまでです！

女帝は、地に伏すのだった。

元の姿に戻り、膝をつく市長。しかし、表情からして戦意は未だ残っているようだ。

「まだ……まだよっ！ 私は……倒れるわけにはいかない……！ 不正を……一つ残らず排除するまでは……！」

「……もういい、もういいんです……！」
「え……！」

「マリさんは優しい人だから……全部背負おうとしてたんですよ……？ 汚職をしていた部下のことも、自分を陥れようとした市議の人も。そして……事故で亡くなったあの子のことも……！」

言葉が詰まっているような氷堂。ノワールは、言葉を続けていく。

「全て自分が責任を負って、二度と悲劇が起こらない街を作ろうとした。そうなんですよね？」

市長の表情は未だに硬い。しかし、ゆっくりと口を開いた。

「……何の罪もないあの子が犠牲になったのは、市長である私の責任。部下の裏切りのせい……腐った連中の金勘定のせい……!!」

私が退けばいいとも思った。でもそれじゃダメなのよ。次のクズが権力を手にするだけ！ だから私は市長であり続けようとした！

どうせ食うか食われるかの世界なら、私が全て食ってやると！
たとえ偽物の票で得た地位だとしても、それで悲しみの無い世の中
を作れるならと！

だって私が食われたら……誰が、あの子の責任を取るっていうの……
！ あんな小さな子が亡くなったのに……私は……悪を一掃することも
できずに……！」

「……今からでも遅くない。事件の真相をみんなに語ってください！
そして、もう一度やり直して。マリさん自身の力で！」

「そんなこと、無理よ……私自身が、市長であり続けるために、真相を
隠すことに加担してしまったのだから……これでは……もう……！」

本音を話したからなのか、市長はかなり弱気になっている。直後、
一人の声が鳥かごの中で響いた。

「……立ちなさい、氷堂鞠子！　そこで倒れたままでもいいのですか！
あなたの優しさ、意志は……こんなことで躓くような弱い想いでは
なかったはず！

だから……立って。立ち上がりなさい！　たとえ躓いても、何度で
も、立ち上がるのです！」

「その……言葉は……」

「そう。昔、マリさんが私に贈ってくれた言葉です！」

たとえ真実を告白しても、必ずマリさんの想いを見てくれる人がい
ます！

そんな王冠の力に負けないで。自分の意志を、思い出してください
！」

「そうだけ、市長！　負けんなよ！」

「あなたの気持ち、絶対みんなに届くから！」

「私もお父様が亡くなって、心が張り裂けそうだった……！　でも、怪盗
団のみんなのおかげで、前を見て歩けるようになったんです！」

だからきつと……マリさんにだって！　何度倒れても、立ち上がるこ
とを教えてくれた、強くて優しいマリさんを思い出して！」

ノワールの言葉に続くスカルとパンサー。言葉を受けた市長だが――

「そう…そうね……ありがとう……春ちゃん……間違っていたのは…私の方だった……」

職員には無理難題を押し付けて、おかしな力で無理やり市民の支持を得て……私怨に駆られていつの間にか、最初の想いを見失っていたわ。

自分がどうして市長になったのか……誰からも愛される素敵な街を作ること。私を育んでくれた街への恩返し……だから、もう一度立ち上がってみせる。二度と……間違えたりしない。

――こんなもの、初めから必要なかった！」

頭につけていたティアラを投げ捨てた市長。そのままの状態で、ノワールへ向き直る。

「春ちゃん……立派になったわね……」

あなたのお父様も、きつと天国で喜んでいると思うわ……」

そう言い残して、市長は消えていった。改心もうまくいっただろう。

「マリさん……！」

「喜ぶ……？」

ノワールは嬉しそうにしており、ソフィーは疑問のように呟く。束の間、鳥かごが激しく揺れてきた。

「崩れるよ！ 行こう！」



現実世界に帰還すると、辺りはかなり暗くなっていた。

「すっかり、遅くなってしまったな」

「春、お疲れ様」

「よくやった。格好良かったぞ」

「ううん、みんながいてくれたから。でも、マリさん大丈夫かな……」
「大丈夫だと思うぜ。いつもみたいに消えてったじゃんか」

「ああ、ハルの想いは確実に届いた。アイツの心は間違いなく変わったはずだぜ。」

今回のジェイル攻略のMVPは間違いなく春さんだろう。みんなも労いの言葉をかけている。

「ひとまず、ここでのミッションは終了だな」

「あとは、市民が元に戻っているかどうかね。すぐに確かめたいところだけど……」

「とりあえずなんか食おうぜ！ つーか、腹減って倒れそうだわ」

「そうだな。腹が減っては戦はできぬ、だ」

「いや、戦は終わったろ……」

「なあなあ、ワガハイ、ジンギスカンってやつを食べてみたい」

「おおっ、北海道名物うー！」

いつの間にか話題もご飯の話に。モルガナがジンギスカンを提案したが……

「なんだと!? 今日こそ伊勢海老鍋ではないのか？」

「いつ決まったんだよ……つかこのクソ暑いのに鍋はねーだろ」

「でもそれ言ったら、ジンギスカンも鍋じゃね？」

「うそ、何で!? 焼肉じゃなくて？」

「確か、ジンギスカンで使う調理器具は『ジンギスカン鍋』って言うんですよね。だからと言っても、厳密には焼肉な気がするんですけど……」

「いや、そうならば『鍋』料理だろうな」

「ははっ、やはりか。ならば今日は伊勢海老鍋で決まりだ！」

「いや、そうじゃねえだろ……ってか、何の話だっけ？」

「…ふふっ、あははっ！」

話していると、これまで話さなかった春さんが笑い出した。

「おお？ ウケてる」

「いい笑顔だ」

「だな！ サツポロに咲いた、美少女怪盗・100万ドルの笑顔だ！」

「よかった。ずっと思い詰めていたみたいだったから」

「ああ。夜中にこっそり、リーダーを呼び出して相談するほどにな」

「ええ!? 見てたの!？」

春さんの反応に、今度はみんなで笑い出して。

そんなこんなで、札幌でも一仕事完了したのだった。

To Be Continued…

#26 Melting

—8月13日(日)—

翌日。昼になり、みんなで市民の様子を眺めているところだ。聞こえてくる話を聞く限り、洗脳も解けているよう。

「まあ、良い感じなんじゃね？」

「氷堂鞠子への異様な熱狂は消え、ごく普通の顔を取り戻したようだな」

「まずは一安心だけど、この変わりよう……やっぱり王の力が恐ろしいものだ、再認識させられるわ」

そんな感じで話をしていると、他の場所に行っていた杏さんがこちらにやってきた。急いでいたのか疲れを含んでいそうな声で、

「ねえ、今から氷堂さんが会見開くって！」

そう彼女は言った。



すぐにネットから検索。ちょうど視聴を始めると、今から会見が始まるどころだった。

『……お忙しいところ、お集まりいただきありがとうございます。本日、市民の皆さまにご報告申し上げたいことがあります。この度、私は市長選より撤退し、市長の職も退く所存です。』

そうして立ち上がり、深々と礼をする市長。フラッシュが沸き上がるが、それを気にせず市長は言葉を続ける。

『私は…市長という立場にありながら、皆さまの信頼を裏切りました。先に発生した雪像崩落事故に関しまして、真相をお伝えいたします。』

崩落した雪像は、市の職員が不適切な業者からワイロを受け取り、制作したものでした。私は……責任者でありながら、そうした行為を見抜けず……雪像の政策を許可いたしました。結果として雪像は崩

落し……一人の女の子の尊い命が……奪われたのです……

更に私は、真相を知った後も、自らの立場を守るために事実を隠蔽しました。市長であり続けるため、仮初の支持票を獲得していたのです。保身のために……皆さんを裏切り……不正行為に加担したので……

私自身も加害者のひとり……私が……あの子を殺したのです……』
市長はうつむき、そして顔を上げる。何かを決意したような顔つきだった。

『よつて、当該事件を改めて警察に捜査して頂くと共に……私は全責任を負うため、市長選から撤退し、市長を辞任させて頂きます』

深々と礼をし、会見の配信はいったんそこで区切りがつくこととなった。

「……氷堂さん、迷いのない顔ね」

「ええ。元々は、ああいう性格だったのかもですね」

「……マリさん、警察に捕まったりするのかな」

「どうかしら……」

「ヒョードーは、自分が市長でなくなり、市民を守れなくなる方が怖かったんだろうな……」

「事実を公にして、当の職員に責任を負わせることはできる。だが、他にも『悪』が潜んでいるはずだと、気が気ではならなかったんだろう」
「……でも、これで良かったんだと思う。マリさんは、過ちを犯したままにいてるなんて、望んでなかったはずだから」

優しい気な顔でそう言葉を紡ぐ春さん。その時、蓮さんの電話が鳴る。善吉さんからのようだ。

「……ああ、了解した。事故現場で会おう」

「マリさんのことで何かあったの？」

「崩落事故の重要参考人として、市長はこれから事情聴取を受けるらしい。コネを使って善吉が護送することのだが——『本人と話す時間くらいは作ってやれる』と」



「ごめんなさい……本当にごめんなさいね……果歩ちゃん……」

件の事故現場に到着するが、市長の方が一足早かったらしい。懺悔の言葉を口にしながら、花束に手を合わせているところだった。

「マリさん……」

春さんはそう呟くが、一体何を思ったのだろうか。だがその言葉で、少なくとも市長は僕たちに気付いたようで。

「春ちゃん……私、どうかしていた。おかしな夢を見続けていた気分よ。いつからこんな風になってしまったのか、わからないけれど……でも、あなたに言われて、昔の自分を思い出したの。そして、市長になった時の思いを——街の人たちを、家族のように守ろうと誓った、あの気持ちを」

語る氷堂さんは、ここ数日の間では初めて見たような表情のように見えた。憑き物が落ちたような、そんな感じ。

「あなたのおかげで、私はようやく自分と向き合えた。そして、私がしていたことは、亡くなった子への裏切りだと気づいたの。現実から目を背け、独りよがりだった私は、あの子に何も返せていないって」

「そんなこと……マリさんはマリさんなりに……」

「いいの、事実よ。もしかすると私は、この先ずっと人々を苦しめ続けていたかもしれない。でもそんなことは、この子が望むはずがないもの。だから、お礼を言わせて春ちゃん。この街を——私の家族を救ってくれて、ありがとう……」

「マリさん……」

「お父様が亡くなって、まだ日も浅い大変な時に……本当にごめんなさいね……この先、困ったことがあったら、私に言っ。何があってもすぐ駆け付けるわ。春ちゃんだって、私の……とても大切な家族なんだから」

「ありがとう、マリさん……」

感極まり、互いに抱きしめる二人。こうして見ていると、なんだかこちらまで嬉しくなってくる。

よかったね……と呟く真さんが、その総意を示していた。

◇

暫くしたのち、抱き合うのも終わりになった頃。互いに落ち着いたようだ。

「じゃあ、もう行かないと。急に市長を退いて、街のことは心配だけど……後に続く人たちに頑張ってもらおうわ。横暴で愚かな市長の代わりだね」

「もう、政治の世界からは身を引くということですか？」

「ええ。これ以上、市民に合わせる顔なんてない。私も歳だし、これからは若い人が——」……市長

その時、遮るように誰かの声が入る。市長が気づいた先には、やつれた風貌の女性が。

「ニュース見ました、本当に辞めるんですね。しかも、政治家を引退する……？」

「は、はい……もう二度と、皆さまの前には……」

「——ふぎけないで！ あなたが消えたところで、あの子は帰ってこない！」

果歩の……娘の死は変わることはない！

「お、おい……止めた方がよくねーか？」

「いや、大丈夫ですよ。恐らくあの人……」

竜司さんを制止。「娘の」と言う辺り、きつとあの方は……

その推測は、隣にいる真さんも同じのようだった。それをよそに女性は言葉を続ける。

「だからあなたは……逃げずに戻ってきて！ すべてやり直して、もう一度市長になって！」

「えっ……？」

「やり場のない怒りをぶつけた私の前で、あなたは涙を流してくれた……あなたは逃げずに、私の悲しみに寄り添ってくれた……！ その姿は、私が一番よく知ってるわ！」

「お母さん……ありがたう……ありがたうございます……！」

約束します…あなたやあの子のために…必ずもう一度立ち上がって、市民を守る市長になると……！」

その光景を目にし、目の辺りを拭う春さん。それを横目にソフィアから話がスマホが震えた。

「……何故だ、翼。これは多分、哀しい場面のはず。だつてみんな涙を流してる。なのに、温かくて優しい。これは…いったい何だ？」

「ふむ、僕としちや言い難いけど……『喜び』なんじゃない？ 嬉しい気持ち、みたいな」

「そうか…だから春は、氷堂を助けたのか。哀しいを、嬉しいにするために…」

……重要情報を記録。ソフィアは『喜び』を学習した」

「いいね、ソフィア。……とりあえず、僕たちはそつとしておこう」
「そうだな」



氷堂さんをみんなで見送り、その後アレコレしていると、あつという間に日は暮れていた。各々自由行動中、氷堂さんの事情聴取も現在進行形で行われているのだろう——そう考えながら僕は独りベンチに座り、スマホをつつく。

「エロス、プラグマ、ルーダス、アガペー、ストルゲー、マニア……へー……」

「……翼、何か調べ物か？ 私に頼ってもいいんだぞ？」

「そうだけど……なんて言うかね、ソフィアは気にする必要がないつていうか」

「そうなのか……」

きっとソフィアには頼れない。恋愛感情を知らないんだ、だからこそ自問自答でどうにかするしかあるまい——だが、どうやって？ それに、いつ告るつてんだ。

そもそも、僕にそんな資格すらあるのか——そんな自身の無さが、どうしても嫌になる。

「……でも翼、その表情は心配するぞ」

「……そっか」

どうやら顔に出ていたらしい。そうなるなら、少し話してみるのも良いかも……

「……ごめん、秀尽の友達から相談受けててさ」

「どんな内容なんだ？ 私で良ければ協力するぞ？」

「そうさせて貰うよ。で、肝心の内容なんだけど、結構複雑でね……その友達には好きな人がいて、近々告白したいと思ってるって。でも、いざ考えると自信がないって言っててさ……どうするようにアドバイスすればいいのかなって」

「恋愛感情とその向き合い方、ということか？」

「そんなところかな」

「なるほど」

そこから何故か数秒固まるソフィア。視線を泳がせたりもした後、口を開く。

「……すまない、私はまだそういった感情について理解ができない。だが私なりにアドバイスをするなら、まずは何か行動を起こしてみればいいだな。それで失敗する可能性も考慮できるが、それを二の次にするというのが重要だと私は考える」

「行動を起こす、か……」

ソフィアの言葉を軽く反芻し、確かにそうだと身に染みてくる。実際怪盗団に入るまでは、アリス関連を除いて消極的に動いていたことは否めないわけだし……

「……ソフィア、ありがとう」

「気にするな」

チャットを開き、軽く深呼吸。自分は結局他人に動かされる人間だというのを実感しながらも、勢いのままに手を動かした。

To Be Continued…